

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Western Perspectives on the Kimono

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大丸, 弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004442

西 欧 人 の キ モ ノ 認 識

大 丸 弘*

Western Perspectives on the Kimono

Hiroshi DAIMARU

This study aims to analyze how Western culture has recognized the Kimono, and how the Kimono has been accepted in occidental life from 1860 to the present. In the 1860's a great deal of concrete information about Japanese life began to spread to the west.

This study, which includes a discussion of the Western perspective on the Kimono leads in to the problem of the western definition of occidental clothing by pointing out the particular thought and aesthetic consciousness concerning clothing in general.

The Western cultures discussed here are those of Western Europe (English, French) and American culture.

In a later, discussion we will try to discover how to define the Western tradition of clothing, and if in fact certain distinctions exist in this definition.

Kimono has been modified from 1860 to the present, and Western consciousness concerning customs of dress has also changed. These two evolutions of the object observed that is the Kimono, and the observer, Western culture, make the relationship between the two difficult to analyze.

Western culture in the 19th century paid more attention to Japanese morality, as reflected by Japanese clothing, than to the Kimono itself.

We can perceive the fundamental difference between the Kimono and Western clothing by analyzing the aspects of the Kimono accepted by the West, together with the Europeanized Kimono.

Viewed architecturally, Western clothing can be consider-

* 国立民族学博物館第5研究部

ed a wall-like structure and a massive-structure, the foundation of Western aesthetic consciousness having been based on the physical mass of the body.

On the other hand, the Kimono has a pillar-like structure. The geometrical forms of the Kimono are organized around pillars. One pillar, for example, is the long neckband of the Kimono. The pillars are produced because the Kimono is separated from the body.

We can consider that the Western conception of Japanese clothing came from a preconception based on a comparison with Chinese clothing or Oriental clothing in general, and that these are included in the Western conception of orientalism.

If we consider all of these factors together, the Western consciousness of fashion and body worship becomes more comprehensible to the Japanese.

まえがき——目的・概念規定・研究方法——	
1章 キモノ認識の前提としての、東方の服装にたいする西欧人の既成観念	4章 西欧におけるキモノ受容の態様——イギリスを中心として——
2章 造形作品における認識	1) 一般的受容
3章 記述的認識	2) いわゆるキモノ・スリーブの展開
1) 時代区分について	5章 まとめと補足
2) I. 開国期	1) 製作技術・素材の観点から
3) II. 明治和服期	2) スタイリングの観点から
4) III. 昭和和服期	3) 生活的観点から

まえがき——目的・概念規定・研究方法——

この研究は、衣服製作のもっとも基本的かつ普遍的な技術として tailoring の方法をもつ西欧人が、日本のキモノをどのように認識し、またどのようにうけいれてきたか、という事実を分析することによって、つぎのふたつの問題を解くためのてがかりをえようとするものである。

そのひとつは、現代日本文化のなかでの“日本的”生活様式の態様である。他のひとつは逆に、キモノを認識しそれに対応する西欧人の自覚のなかにあらわれる、西欧型衣服の基本的な理念である。

ここでいうキモノとは——今回のテーマに順応して気のすまないままに片仮名を

つかうが——もっとも限定的にいうなら、近代のいわゆる和服長着である。一般の西欧人の理解のていどでいえば、**Japanese dress** イコールキモノとする方が、妥当かもしれない。また、私がとりあげるキモノ論議はものとしてのキモノにとどまるものではないから、まして長着などという限定は、狭きに失するともいえるだろう。そういう意味では、私が今回のテーマとして用いたキモノという概念には、ひとつには象徴的な内容をもたせている。とはいえ、私はたんなる精神論をこころみるわけではないので、ものとしてのキモノには、はっきりした具体性が需要である。長着は和服の外衣として男女ともに着用される文字どおり床までの丈をもつワンピース型の衣服で、その外からはおられる羽織・半纏・被布のたぐいとはちがう。しかし打掛はキモノから着用法の点で分化しただけの、キモノの一種とかんがえるべきである。念のためにいうならば、漢字で書かれた着物と、ここでいう片仮名のキモノとは、べつの概念である。片仮名のキモノは、あくまでも西欧人的な概念であり、今日西欧における専門的理解では、だいたいうえに説明したような概念で用いられ、**juban** や、**yumoji** までふくめた **Japanese dress** とは区別される。

なお和服という概念は、**Japanese dress** が **historical costume** や、**folk dress** をふくめなければ、ほぼおなじ内容といえる。和服は日本人がいう着物（あるいは片仮名のきもの）と、現在ではだいたい同様に用いられているらしい。和服といういいかたはそれほど古いものではなく、洋服の普及に伴ってもちいられるようになったのであるから、洋服と和服というつねに対応したかたちでの併存関係的な点に、その意味内容の特色がある。したがって狩衣や袷袷は、和服にはいれるべきではない。江戸時代を通じて形成され、日本人の日常着としてほぼ今日のかたちにちかい様式をうるに至った小袖型服装の組合せが、和服といえるだろう。以下の文章中でも、私はその意味で、キモノと和服とを、つかいわけている。

西欧人という概念は、本稿にかんするかぎり、きわめて限定的な意味で用いているのであって、衣に関するある特定の文化を継承し、それをじぶんたちのものとしている人々である。研究課題の第二でのべたとおり、本稿は、西欧型衣服とはなにか、という問題の、起論のひとつとしての役割ももっている。その場合その西欧とはどこをさすかといえば、私の目的からいうと、洋服の文化をもってきた地域ということになる。それでは洋服とはなにかという、それがいまの問題なのである。こうした堂々めぐりではあるが、しかも我々の脳裏には、常識的な程度でなら、洋服とは基本的にどんなものかについて、一応の線はうかぶ。それゆえさしあたりは、その線を仮に前提とし、前にすすむ他ない。その線というのが、テイラリングの技術である。やがて

私はいくつかの段階で、この基本線をさまざまな角度から検討しなおすことを迫られるだろう。さて西欧型衣服の基本的性格を一応そのように仮定してみると、ヨーロッパのなかでも、東ヨーロッパ圏の多くの国では、べつのタイプの衣生活のパターンが、微妙なかたちで、しかし色濃く影をおとしているように考えられる。むしろアメリカ合衆国のアングロサクソン文化の中には、そういう意味での異質性は乏しい。私が今回利用した資料は、造形作品をふくめて、イギリス・アメリカ・フランス・ドイツの四か国のものであった。

さてこれらの国々の人のキモノ観において、私は日本人の一般的なキモノ観とニュアンスを異にする点を、できるだけ数多くとりあげ、その理解の内容を分析してみた。衣食住に関しては、すべての人が実際の体験者であり、貴重な証言者である。時代や範囲をかなり絞って見たところで、得られる資料の、全体の意見との比率はきわめて小さく、せいぜい蓋然性の議論でしかないことも多い。私はせめてサンプル数をふやすことで、でてきた結論が単なる可能性に陥ることのないようつとめたかった。とくに第3章の記述的認識では、国立国会図書館、京都外国語大学ニポナリア・コレクション、関西外国語大学図書館所蔵の日本関係文献のうちから、衣生活に関連する部分についてはほぼ網羅的に検索し、これをおいて、Bibliothèque Nationale (Paris) および British Library (London) の蔵書で補足した。

日本人の一般的なキモノ観とニュアンスを異にする、という意味で、多少困難があったのは造形作品の場合である。西欧人の描いたキモノには、われわれ日本人がみてしばしば奇妙なものがある。絵が下手、ということではなく、たとえば羽織の上から革のベルトを締めさせるたぐいの奇異性である。第2章において私はこの奇異性を取りあげ、その由ってくるところを分析することによって、じぶんたちがよく知らないものをじぶんたち流に認識する際に表出される、衣服についての西欧人の *mannerism* を、さぐりだそうとところみた。

いうまでもなく、絵の奇異性をみてとるのは感性ではなく、悟性である。もっとものぞましいのは、描かれた絵と同一条件の同時代の写真と比較することであり、現代については着装モデルとの比較である。今回の分析でも、原則としてこの方法を用いた。従来も、外人の見たキモノという主題のいくつかの研究、ないし紹介があった¹⁾。その中で、たとえばある紹介者は、Humbert の〈日本図誌〉にえがかれたキモノについて、「衿の合わせ目が低くなっていて、ほとんど合わせていないように見えるも

1) アメリカにおいては1850年代初めから日本への関心がわかになり、日本についての書物がいくつか刊行されている。しかし Cecil の指摘するように、それらの内容は、概していえば、それまでであった日本紹介書の内容を継ぎ合わせたものであった [CECIL 1947: 19]。

のもあるなどの欠点もあるが、このような欠点はひとりウンベールに限らず、欧米人の描く日本人の図には珍しくない」[那珂 1954: 65] とかいている。ところが実は、Humbert が滞日していた時代の日本の女性は、そんな風に低いところで衿をあわせるのが、ふつうだった。つまり奇異感というものは、それを奇異とみる側の見方——より具体的にいえば規準の幅によって変わってくる可能性がある。したがってまえにのべたような方法で、ふたつのスタイルの比較をするのが、もっとも説得力のある方法であろう。しかしそうはいても、ことに幕末・明治期のキモノの場合、描かれたものとおなじ条件の写真が手に入るかどうかは、偶然を期待するほかはない。また第2章であらかじめ触れるように、造形作品には様式という厄介な要素があり、実物と似ていない点があるからといって、それでただちにキモノらしくないとか、奇異であるとかをいうことはできない。様式性という飾り硝子をとおして、しかもキモノと非キモノを区別し、あるいはキモノ美の理解されていることを理解するためには、ときには感性的要素も必要であるかもしれない。

なお本稿が対象とする時代は、幕末の開国以後、現在にいたる期間である。19世紀前半までの、昔からよく知られている西欧人による日本見聞記やそこにつかわれた挿話は、参考として二、三のものを利用したにとどまった。その理由は、この研究の目的のひとつが直接には現代日本の問題にかかわるものである以上、当然ともいえるが、衣生活とそれをめぐる日本人の生活観が、維新のまえとあととは、おなじものではありえないためである。また、衣生活、あるいは衣服そのものについてさえ、江戸時代に関してはじゅうぶんな学問的把握がなされていない、ということも考慮にいれなければならない。

さらに大きな理由は、観察者である西欧の側の事情である。1800年と1980年とは、同一の“西欧”であろうか。tailoring technique という点でいうならば、まさしく西欧は、それを数百年遡る時代から現在まで、基本的には変わっていない。しかし日本を認識するのは、テイラリング技術そのものではなく、人間である。衣習慣については、男性は19世紀の近代的ブルジョワ社会の形成期間を通じて、女性は世紀末からアメリカン・スタイルの成立の過程において、大きな変容をとげた。日本を批判した19世紀の西欧人の意見には、現代の西欧の若者には理解しがたい部分もあるだろう。したがって開国以後の130年についても 状況を勘案し三つに時代区分したが、それについては本文で説明する。

1章 キモノ認識の前提としての、 東方の服装にたいする西欧人の既成観念

1850年代をふくめ、それ以後、西欧社会にもたらされる日本人についての情報は、飛躍的に増加し、正確に、かつ具体的になるのであるが、それ以前の日本は、おおむねオリエンタリズムという既製観念のなかで、その文脈に沿って理解されることの方がふつうであったとみてよい。それはのちに触れるように、開国当初の日本の土地を踏んだ西欧人のことばのはしばしにさえ、「所詮日本人は半未開のオリエンタルであり、異教徒なのだということを銘記する必要がある——」[HABERSHAM 1857: 241]といった態度のみられることから理解されよう。

中世以降の西欧人にとって、オリエンタリズムとはなんであったかについては、エジプト出身のアメリカ・コロンビヤ大学、E. ザイド教授の近年の分析が啓発的であるとともに、要約的でもある[Said 1978]。ながいあいだ、西欧人にとってもっとも具体的なオリエントとは、オスマン・トルコであり、オリエント世界の中心はコンスタンチノーブルであった。もっとも美術工芸の分野からみるならば、その重さの質のちがいはあるにせよ、中国の比重は、Said の指摘する程度よりもう少し重いとみるべきかもしれないが。

ともあれ、これら二つの国、あるいはそれにインドをくわえた三つの国についての知識は、西欧人がアジア諸地域の人々についていただくイメージを、あるていど共通の色合いに染めていた可能性がある。しかもその知識は、かならずしも中世以降乏しく不確かな情報にもとづいて流布し、いわゆるオリエンタリズム、あるいはシノワズリーとして幻想化したような性質のものばかりではなかった。1853—1856年のクリミア戦争は、近東世界にたいする西欧人の関心をにわかたかめ、きわめてみじかい期間であったが、トルコ情報ブームともいべきものを現出した(表1)。

中国についてみるならば、これも主としてイギリスむけの情報であるが、阿片戦争のはじまる1840年前後より情報量はにわかた増加し、この方はトルコの場合とはちがって、それ以後もあまり大きな変動なく、中国の各方面の事情に関する書物が刊行されつづけている(表2)。

すでに17世紀には、おそらくオランダ人の手を介しての日本の衣服の実物が西欧に伝えられている[BAINES 1981: 155, 157]、中国と比較しての日本人の生活の特異性は、開国当初の訪問者によって、ことこまかに紹介されている。しかし西欧の大衆の平均的な知識の水準からいえば、現在でさえそうでないとはいえないくらいであ

表1 1890年までの西欧におけるトルコ関係文献の出現状況

-1600	1481, 1513, 1516, 1529, 1529, 1529, 1530, 1537, 1538, 1538, 1539, 1540, 1540, 1541, 1541, 1542, 1542, 1544, 1544, 1545, 1545, 1546, 1546, 1547, 1548, 1551, 1551, 1552, 1556, 1558, 1560, 1560, 1562, 1565, 1568, 1569, 1572, 1572, 1573, 1575, 1576, 1576, 1576, 1577, 1577, 1577, 1577, 1578, 1580, 1582, 1582, 1585, 1585, 1586, 1586, 1589, 1590, 1593, 1594, 1595, 1596, 1596, 1596, 1596, 1597, 1599, 1600, 1600
1601-1700	1603, 1609, 1614, 1621, 1621, 1622, 1625, 1631, 1635, 1642, 1646, 1648, 1650, 1653, 1654, 1658, 1659, 1660, 1663, 1665, 1670, 1673, 1673, 1673, 1674, 1674, 1675, 1677, 1678, 1681, 1682, 1684, 1684, 1684, 1684, 1684, 1684, 1686, 1687, 1688, 1689, 1689, 1690, 1697
1701-1800	1709, 1717, 1720, 1720, 1724, 1735, 1747, 1761, 1771, 1772, 1780, 1784, 1786, 1787, 1788, 1789, 1792, 1796, 1799
1801-1810	1802, 1803, 1809, 1809, 1810
1811-1820	1812, 1813, 1813, 1819, 1819, 1820, 1820
1821-1830	1821, 1821, 1822, 1824, 1824, 1825, 1825, 1826, 1827, 1828, 1828, 1829, 1829, 1829, 1829, 1830
1831-1840	1833, 1833, 1833, 1835, 1839, 1839, 1840, 1840, 1840
1841-1850	1842, 1843, 1843, 1843, 1844, 1845, 1850, 1850
1851-1860	1851, 1851, 1852, 1853, 1853, 1853, 1853, 1854, 1854, 1854, 1854, 1854, 1854, 1854, 1854, 1854, 1854, 1855, 1855, 1855, 1855, 1855, 1855, 1856, 1856, 1857, 1857, 1857, 1858, 1858, 1859, 1859, 1860, 1860, 1860
1861-1870	1861, 1861, 1862, 1862, 1864, 1864, 1866, 1867, 1867, 1868, 1869, 1870
1871-1880	1872, 1872, 1872, 1873, 1873, 1873, 1875, 1876, 1876, 1876, 1877, 1877, 1877, 1877, 1877, 1877, 1878, 1878, 1878, 1878, 1879, 1880

[PEDDIE 1933; 1935; 1939; 1948] による。

るから、まして19世紀半ばの当時において、遠い東方の国と国とのあいだの、風俗習慣の認識における奇妙な混淆は、むしろ当然すぎることであったはずである(写真1)。そしてその混淆の型の原則は、うゑに述べたような情報の量と、展開の順序からいって、日本の場合でいえば、オリエントのモデル、とくに中国のモデルへ付加されるか、あるいは、これらとの比較においてきわだたせられることを、その傾向としてもつことになる。写真1についていうならば、おそらくこれは、日本女性の衣服の印象として伝えられた“大きな袖”を、西欧人があらかじめ持っていた中国服の知識に、無

表2 1880年までの西欧における中国関係文献の出現状況

1500—1600	1585,	1586,	1588,	1588,	1588,	1589,	1590,	1599		
1601—1700	1621,	1622,	1628,	1630,	1639,	1643,	1645,	1653,	1653,	1654,
	1654,	1654,	1655,	1655,	1655,	1655,	1658,	1665,	1667,	1667,
	1668,	1668,	1670,	1670,	1670,	1670,	1671,	1672,	1672,	1676,
	1678,	1681,	1686,	1688,	1688,	1688,	1696,	1697,	1697,	1697,
	1697,	1698,	1698,	1698						
1701—1800	1706,	1710,	1734,	1736,	1739,	1741,	1741,	1755,	1771,	1778,
	1781,	1790,	1795,	1795,	1797,	1798,	1799,	1799,	1799	
1801—1810	1804,	1806								
1811—1820	1811,	1813,	1814,	1817,	1817,	1818,	1820			
1821—1830	1821,	1822,	1823,	1824,	1825,	1827,	1827,	1830		
1831—1840	1833,	1834,	1834,	1834,	1834,	1835,	1835,	1836,	1836,	1838,
	1840,	1840,	1840,	1840						
1841—1850	1841,	1841,	1841,	1841,	1842,	1842,	1842,	1842,	1842,	1842,
	1843,	1843,	1843,	1844,	1844,	1844,	1844,	1846,	1846,	1846,
	1847,	1847,	1847,	1847,	1847,	1847,	1847,	1847,	1848,	1848,
	1849,	1850,	1850,	1850						
1851—1860	1852,	1852,	1852,	1852,	1853,	1853,	1853,	1853,	1853,	1853,
	1853,	1853,	1853,	1854,	1854,	1854,	1854,	1854,	1854,	1855,
	1855,	1855,	1856,	1857,	1857,	1857,	1857,	1857,	1857,	1857,
	1858,	1859,	1859,	1859,	1860,	1860,	1860,	1860,	1860,	1860,
1861—1870	1861,	1861,	1861,	1862,	1862,	1862,	1862,	1862,	1862,	1862,
	1862,	1863,	1863,	1863,	1864,	1864,	1864,	1865,	1865,	1865,
	1866,	1866,	1866,	1867,	1868,	1869,	1870			
1871—1880	1871,	1872,	1872,	1872,	1873,	1873,	1873,	1874,	1874,	1874,
	1875,	1875,	1876,	1876,	1876,	1876,	1877,	1877,	1878,	1878,
	1878,	1878,	1879							

[PEDDIE 1933; 1935; 1939; 1948] による。

造作に付加したものであろう。

さて、オリент服装のモデルとしてのトルコ服装についての代表的な紹介書のひとつが、Dalvimart 等による〈The Costume of Turkey〉(1804)である。Dalvimart の紹介が代表的であるという意味は、彼が序文中で、オスマン帝国をあくまでもヨーロッパの一部とみなす態度はとっているものの、西欧人が一般にオリент服装の特色とかがえる要件のほとんどが、本書中に網羅されているからである。

まず Dalvimart は、トルコ人は四季のうつり変りにしたがってしばしば衣服を変えるが、それはファッションではなしに、エチケットにしたがってのことなのだ、と指摘する。Dalvimart のここでの表現はやや間接的であるが、ファッションが存在しないという認識は、西欧人のオリエント服装にたいする見方に共通している。この認識はすでに、1648年に刊行された Chappelle の〈Recueil de divers portraits de principales dames de la Porte du grand Turc〉にも、「これらの国々の流行の変化は我々の場合とはちがう。現在彼らの着ているものは、150年まえに着ていたものとおなじなことは、たしかである」[CHAPPELLE 1648:



写真1 Mapol による“Thés de la Porte chinoise” 1895

preface] とある。そもそもファッションの存在は、西欧人にとっては、彼等の文明意識ともむすびついていとみとめられるふしがある。したがってかならずしも西欧社会と非西欧社会という分けかたでなく、都会と地方の差別意識のなかに、習俗のファッション性の有無をみる態度は、ルネサンス期からみとめられる。1567年にパリで刊行された〈Recueil de la diversité des habits, qui sont de présent en usage, tant es pays d'Europe, Asie, Affrique & Isles sauvages, le tout fait après le naturel〉のなかで、Barbares とならんで、ドイツ人やスイス人、また rustique française の衣服の、画一性が指摘されている [Recueil 1567: 22, 64, 67, 94]。

はなしを19世紀前半・中期の、われわれの問題としたい時代に戻せば、同様の指摘は、この時期の代表的な中国服装の紹介書 Alexander の〈The Costume of China〉 [ALEXANDER 1805: fig. 14] や、Grohmann の〈Gebräuche und Kleidungen der Chinesen〉 [GROHMANN 1800: Über China] や、また Beveren の〈Costume du moyen age〉 [BEVEREN & DUPRESSOIR 1847: 55] にもみとめられる。非ファッション性という観念は一応時間的不変化性とみてよいであろうが、西欧人はむしろ、地域的な、あるいは個人的な変化の乏しさとひとつに括っていたとかがえられる。そうした内容での不変化性を Dalvimart は、「なんの趣味のしるしもない」といい、Grohmann は衣服以外の職業・技術・科学その他文明全体に共通するものとして数世紀来ほとんどおなじ水準を保ちつづけてきたその停滞性を指摘している。そうした

画一性と無趣味な単調さを支える精神構造をあきらかに理由づけているわけではないが、Dalvimart は、ロドス島のすこし北方にある Simia の住民の衣服を叙述するくぐりつぎのような説明をしている。すなわち、かつてはこの島の人々の服装はとりわけ絵画的で、それが彼らによく似合っていることできわだっていた。しかし今その名残りはわずかしかない。というのは、(イスラム教に支配されて以後)、顔の下半分は隠してしまうようになったし、からだも同様で、そのためからだのかたちじたいがすっかりだめになっている、と²⁾。

さてつぎに、Oriental sensualism に関連する指摘を問題としたい。西欧人のオリエント観には、キリスト者の眼からみる異教徒という、宗教倫理的な忌避感情が——あるいはその裏がえしとしての憧憬が横たわっていたとみられる。衣服に関連するもっとも直接的な言及としては、Dalvimart がコンスタンチノーブルの女性ダンサーについてのべているゆるやかな着付がまずそのひとつである。おなじ時代の言語学者 Constantin F. de Chasseboeuf も〈Voyage en Syrie et Egypt〉のなかで、西欧の人々とアジアの人々の習慣の対比的なちがいのひとつに、「我々は短く、しめつけた衣服を着るが、彼らは長く、ゆるい衣服を用いる」とのべたという [BEZOMBES 1953: 52]。

また、肌のすけるような、とくに下着について、18世紀はじめの Le Hay は、トルコ人がごく薄手の肌の透けて見えるものをまた pyjama としても着る習慣のあったことを記録し [LE HAY 1714: fol. 33]、100年後の Pécheux & Manzoni による〈Costumes Orientaux〉でも、ハレムの女の説明中に、「その紗のシュミーズはごくうすいので、乳房が裸のように透けて見える」と書いている [PÉCHEUX & MANZONI 1813: pl. 18]。しかし衣服の個々の形成のこのような特色は、気候的環境もちがうし、一般的に用いられる衣服素材の条件もちがうから、これだけをもってオリエントの人々が官能的であるとは、西欧からの旅行者や研究者もいってはいない。西欧人にとってつよい異和感があったのは、むしろ肉体そのものについての考えかたであつたらう。

Dalvimart はコンスタンチノーブルの女性の美しさを語るなかで、つぎのような批判を行なっている。「トルコ女性、とりわけ Circassian や Georgian の女たちの

2) 西欧社会以外にファッションが存在するかどうかという問題は、むしろ最近になってあらためて問われはじめてきた。その口火のひとつは、Scarce の、〈Turkish fashion in Transition〉[1980: 144-167]であろう。

Baines は、オリエンタル・ドレスの場合、変化がないということがひとつの魅力ではあったが、しかしそれは正しくなかったといっている [BAINES 1981: 22]。

私の考えるところ、これらの議論では、スタイルの変化とファッションとの、それぞれの概念規定的な問題が、まずその前提として必要であろう。

美しさは伝説的でさえある。しかしその美しさは顔だけだといわなければならない。というのは、ソファに座るすわりかたのために、彼女らのからだはちぢこまり、歩くすがたも生気を欠いている。それにくわえて入浴、しかも高い温度の風呂にしばしば入ることと無為な生活による心のゆるみとは、ほんらい顔とおなじような美しさをもっていたはずのからだのかたちを、だめにしてしまっている」 [DALVIMART 1804: pl. 16]。トルコ人の入浴は早くから西欧人のあいだに有名であって、 Turkish bath そのもの以外にも、 Turkish towel, Turkish slippers, あるいは ottoman (sofa) など、入浴に関連する風習のいくつか、ヨーロッパにもたらされていた。そしてそれらはおおむね、肉体のくつろぎとむすびつくもので、 oriental idleness ないし indulgency という、西欧人の固定観念を支えるのに役だっていたといえよう。

ところで、こうした無為な生活の結果が肉体のかたちをだめにするという考えかたは、西欧人のオリエント人観のなかにねぶかく存在し、かつそのことは、西欧人の肉体についての意識の一面を告白する結果となっている。

オダリスクの画題で知られているように、西欧人の想いえがくオリエントの女のイメージのひとつは、ソファにからだを横たえるけだるげな姿である (写真2)。Schweiger の大著 <Die Frauen des Orients> (1904) でも、その巻頭には水ぎせるをくわえてソファに横になっている女性の写真が掲げられている。姿勢についてのこうした批判については、中国の女性の場合でも同様である。中国女性が横たわる姿については、とくに阿片吸引の習慣と関連づけてみているとも考えられる。また中国女性の場合には、纏足の習慣は早い時期から西欧人に比較的よく知られていたもので、そのことと関係させて、歩行姿勢の悪さを指



写真2 Le Hay から“トルコの女性”

摘している例もある [MALPIÈRE 1825: vol. II 63]。

ともあれ、ルネサンス以後の、“世界の女性”ないし“世界の服装”というたぐいのスタイルブックを見ると、事実西欧女性の姿勢のよさは否定できない。姿勢のよさ——そういういいかたが許されるなら、直立性——は、西欧におけるコルセットの態様を無視しては語れないだろう。第3章でのべるように、19世紀の後半、イギリス・アメリカを拠点に、いわゆる Dress reformation の運動があるていどの影響力をもった。女性の服装についていえば、その主たる攻撃の対象はコルセットだった。この運動の提唱者にはかなりの割合で、医師がふくまれていて、衛生学的な立場からコルセットの常用が内臓や循環器系にあたえる障害の危険を唱えている。ただし同時に、治療のためのコルセット (corset orthopédique) の必要性は忘れられていない。「コルセットはたんにコケットリイのためばかりでなく、整形治療の目的でも用いられてきたのである。著名なイギリスの詩人 Pope も、虚弱なからだであったため、女中が毎朝つけてやるコルセットに支えられて生きていた」[O'FOLLOWELL 1905: 204]。当然のことながら、この整形のためのコルセットと美容のためのコルセットとは、区別の明らかなものではなく、外科医は矯正するだけでなく、美しくなるための器具を考案し、また患者にもすすめてもきたのである [O'FOLLOWELL 1905: 206]。コルセットを擁護する立場から書かれたパリのコルセット業者 Leoty の〈Le Corset: à travers les ages〉には、服装改良運動の行なわれていた当時でも、むしろ“常識的な”多数意見だったとおもわれる、さまざまな立場の識者の擁護論が集録されているが、それまでの約20年間にコルセットの構造についての特許が70件もでていて、その形や構造についていかに工夫が凝らされてきたかを指摘し、「コルセットは若い娘たちが、健康に害のあるような姿勢に陥らないですむよう、彼女らの身を守るためにぜひ必要なものである」と、結んでいる [LEOTY 1893: 115]。

姿勢はもちろん、コルセットだけに終る問題ではない。肉体の変形を嫌う西欧人の感情はよりねぶかい文化にかかわっているのであり、たとえば猫背の癖のある子供の日常的な矯正、訓練のための correct chair のように、生活のなにげない部分にもそうした意図はゆきわたっていた。

くりかえしているのが、こうした西欧人の正しい姿勢、そして正しいからだのかたちの尊重は、なにかにつけてオリエントとの対比においていわれ、かつそれが文化の他の部分との、より広範囲で、ベーシカルともいえる部分との関連においていわれてきた。19世紀後半のイギリスの、すぐれた美術批評家であり、服装改良運動とも関係のあった Haweis は、その〈The Art of Dress〉(1879) のなかでつぎのよう

にのべている。「——からだを保持し、かたちを良くするためのある種の close-fitting garment の必要は否定しない。どんな種類のコルセットをも身につけないと、非常にだらしなく (slovenly) みえることになる…… dull harem life を哀れまれる東方の女性は、無知にもとづいて、我々のコルセットを悪いもののようにかんがえているのであるが——。ローマの女性はあの時代としてはより賢明だった。彼女らの用いたバンドは、姿のだらしなくなることを防いでいる」[Haweis 1879: 35, 38]。

sloven ということ、またからだのかたちの悪さということの具体的な条件のひとつは、腹部の膨らみ、あるいはたるみということである。男女ともに、コルセット使用の美容上の目的は、腹部を細め、これと対比的に胸郭、女性であれば乳房を強調することである。そしてこのようなシルエットをキリスト教文化の精神主義のしるしとする考えかたもあった。Haweis とおなじ時期に、衣服についての文明史的な議論を展開したフランス人の Blanc は、〈L'art dans la parure et dans le vêtement〉(1875) において、つぎのように論じている。「彫刻や絵画作品から判断すると、中国人は腹の突きでることをすこしも抑えようとはせず、むしろ満足して見せびらかしている。西欧の人々は、その精神主義のゆえに逆三角型の体幹での胸郭の立派さを尊重し、腰部は細く、内臓部分はゆるみなく締まっていなければならないとする……(肉にたいする精神の優位というキリスト教の思想は、ギリシャの情感をそこなうことなく) 西欧諸国においては、消化器官にたいして呼吸器官をより上位に置いたのである。精神 (esprit) という語じたいが、呼吸するという動詞 (souffle) に由来することを忘れてはならない」[Blanc 1875: 167-168]。

中国では、肥満した人物が敬意をもってみられるという説は、中国服装の当時としてはもっとも正確な紹介書にもべられているが [Mason 1800: pl. 31]、そういう俗信はかなり尾をひいたらしい [Biggers 1963: 216]³⁾。

正しいからだのかたち、という観念は、衣服に適用されたとき、ひとつには構成の明確さをさしめずことになる。胴部は胸部、袖は袖、スカートはスカートと区分しその境界をあきらかにすることは、肉体の量感に忠実な衣服構造上の当然の結果ではあるが、16世紀以降の西欧衣服のひとつの特色である。すでに16世紀のスタイル書において、たとえば1550年の Vecellio da Cesare のもの、ほぼ同時期の 〈Habillement

3) 「しかし中世には、正しい姿勢とは、下腹を突出して肩を落すことだった。16世紀でさえ、胴の下部は前方につきでて、胸をうしろに引いている。コルセットが普及した17世紀になって、はじめて女性はまっすぐに立てるようになった」[Tabori 1961: 92, 93]。男性の場合は16世紀にとくにそのような傾向があった。

de diverses nations>⁴⁾, 1568年の Nicolay のもの, あるいは Boissard の〈Habitum Variarum Orbis gentium〉 [BOISSARD 1581a] のなかで, 西欧圏と対比してのオリエン特服装の特色といえば, 装飾の乏しさのほかに, 袖つけの単純さと, pointed waist line がみられず, そのみかウエストの切換じたいがはっきりしないこと, そのため衣服全体が, ふくらんだゆるいヒダに覆われる傾向のあること, などであろう。

これらの特色のうち, いま特に袖つけに問題をしばって考察したい。

写真3, 4は, いずれも16世紀末期の西欧人が頼りない資料をもとにして描いた中国人である。写真5は, 18世紀末に描かれたと推測される Ledoux の作品である。これらにえがかれている中国人の衣服でとくに奇異な印象のひとつは, 袖つけである。中国服は袖つけの袖の側にゆるみをとるという方法をとらない。また袖つけの位置じたいがショルダー・ポイントをはずれるドロップ・ショルダーないしキモノ・スリー

ブであって, その点日本衣服と共通している。したがって袖つけにギャザーを生じることはいずれも, ギャザーあるいはいせによる膨らみもない。その点西欧人はきわめて自然に, この部分をギャザーや, 筋肉のもりあがったような形状の, 膨らみに描く癖があり, 奇異感のひとつの原因となる。写真6は, 1805年刊の Alexander の著書の挿絵で, 原画は17世紀のものである。ここでは中国の大使とその従者たちの肩の表現が, 注意しなければほとんど見落してしまうほどではあるけれども, 中国服らしくなさの, 大きな理由になっている。このことは, 中国人の描いた中国服との比較によって容易に納得されるはずである。(写真7)



写真3 Linschoten から
“舟遊びを楽しむ中国の高官”

4) Bibliothèque nationale de Paris, Est. Ob. 14 pet-fol. 扉に下記の如くあり。Anonymus Trachtenwerk in Radierung, Ohne Titel. Deutschen Ursprungs (Augsburg?) um 1580-1600.



写真4 Houtman から“中国人の重立った商人”

袖つけに関連してさらにつけ加えたいのは、まえにもその名をだした Vecellio da Cesare の〈Degli Habiti antichi, et moderni di diverser parti del Mondo〉(1550) 中の解説である。本書では folio 473a-477a が Chine にあてられているのであるが、そのうちの fol. 473a (写真8) の解説はつぎのとおりである。「中国の貴族の既婚婦人について——この2枚の衣服の外には、真珠や宝石を美しくほどこしたえり巻のようなものをよそおい、胸もとを飾っている。幅のひろい袖は、その胸に、ふたつのおなじ形の、刺繡のバラをつけている」⁵⁾。ここでは、身頃と袖とが、いわばひとつのもののように扱



写真5 Ledoux による“La vue”

5) 参考のために、原文掲げる。

Sopra esse vesti baueua à guisa di stola vn fregio ornato di bel lauoro, e riccamoto di perle, e gioie, il quale gli ornaua il petto, e le maniche larghe della veste con due rose dell'istesso riccamo di quà, e di là dal petto. [VECELLIO DA CESARE 1550]



写真6 Alexander から“L'ambassade de la C. D.”



写真7 仇英による“寧王妻妃”



写真8 Vecellio から“中国の貴婦人”

われるという、中国・日本型衣服構造の特色がとらえられている。

すでにオリент服装全体の観点から中国服装にも触れてきたのであるが、中国服装そのものについての西欧人の言及をつぎにとりあげよう。19世紀の前半に、数種類の中国服装の紹介書が相ついであらわれるのであるが、それ以前の西欧における中国

衣服観は、Giffart の〈L'état présent de la Chine en figures〉(1697) に負うところが大きいであろう。それはここに載せられた 129 葉の挿図が、その後の中国紹介にくりかえし転載利用されていることから、想像できる。

Giffart も、19世紀の、例えば、Ferrario [1827: 304] も指摘する中国服装の特色のひとつは、その威厳 (dignity, gravity) であったらしい。Baines は19世紀の西欧社会において、男性はかつての気楽なインディアン・ガウンのような部屋着を失った、といているが [BAINES 1981: 160], その小賢しく実利的な市民社会において、dignity などという感覚もまた、old-fashion なものであったかもしれない。

中国服装のそうした dignity の所以は、ひとつにはその被覆性であろう。中国人の眼からみると、西欧の男女の衣服は、からだのかたちを露わにしすぎ、慎みのあるものではない。そして慎み (modestie) と重々しさとは、中国人だれしにも共通するものであるという [FERRARIO 1827: 304]。

こうした被覆性は、とりわけ暑い季節などには、窮屈で、はなはだしい不愉快を忍ばなければならぬ破目に陥る [MALPIÈRE 1825: Mandarin en costume ordinaire]。しかもこの被覆性は、例のオリエント世界に共通する女性隠蔽の風習とも関係する。Malpière は、中国女性が、じぶんの姿を他人に見られることを怖れるあまりほとんど外出することなく、彼女らが装うのは、装うことじたいの愉しみのためである、ともいっている。

中国女性の纏足の習慣は、西欧人にとっては大きな関心の的であった。したがってこうした女性隠蔽と纏足とをむすびつけて考える意見もあったようである。

中国服装の特色として dignity が指摘された理由には、西欧人が接した清帝国の宮廷と官僚組織の印象もあわせて考えられる。服装についていうなら、冕服や龍袞の繁瑣な規定であるとか、そのシンボリズムが紹介され、西欧人の中国服装観に影響を与えているとおもえる⁶⁾。

衣服の個々の特色についての西欧人の認識は、Grohmann (1800), Mason (1800), Grasset de Saint-Sauveur Jacques (1806), Alexander (1805), Breton (1812), Malpière (1825), Ferrario (1827) と、内容の質の差はともあれそれなりに具体的な情報を盛った中国服装書が継続的に刊行されている19世紀初頭を境に、当然のことながら幾分かのちがいが生じてくる。西欧における18世紀の中国人および中国服装は、Boucher や Watteau におけるような風俗画の題材であるとともに、あるいはそれ

6) 中国と19世紀の清帝国が、西欧の大衆レベルに与えていた漠然とした印象は、Carlo Gozzi の〈La Turandot〉(1762) から、Lehar の〈Das Land der Lächeln〉(1929) までをふくめて考えれば、さほど親しみのあるものではありえなかったのではないだろうか。



写真9 Boucherによる
“La Réveuse”

にもまして工芸装飾模様のひとつのジャンルであるシノワズリーのなかの、点綴要素でもあった。その中にえがかれた中国人は、さなきだにのどかなこの世紀初頭の *fête galante* や、後半の田園趣味が加味されて、*oriental indulgency* のけはいを一層ふかめている。衣服は個々の点については、かなり勝手な想像で描いているふしもあるが、全体に共通して、衣皺のゆたかな、*loose gown* としてとらえられ、交領一打合わせ式の衿がしばしばみとめられる。清朝以前の中国では交領も垂領も併存したのであるから、その点やや古い資料に依拠したものであろう。その結果一見すると、日本のきものと見紛らわしいものがめずらしくない⁷⁾(写真9)。

袖つけのギャザーについては、オリエント全体についてのべた箇所ですでに触れた。ギャザーを、布の一部分をしぼることによって他の部分をふくらませる手法、と理解すると、袖つけ、袖口、衿もと、腰など、17・18世紀の、西欧人の描く中国服が中国

7) 18世紀の、とくにフランスのシノワズリー装飾図案集のなかで、上記の衣服の特色の整理のため参照したのは、下記の資料である。

BELLAY and HUQUIER

Premier Livre de Panceaux et Fantasies propre à ceux qui aiment les ornemens. Paris: chez Huquier

BOUCHER, F. and F. RAVENET

1740頃 *Recueil de diverses figures étrangères.* Paris: chez Huquier

BOUCHER, F.

Recueil de diverses figures chinoises du cabinet. Paris: chez Huquier.

MONDON LE FILS and Antoine AVELINO

1736 *Quatrième livre de formes ornées de rocailles cartels figures oysaux et dragons chinois.*

PEYROTTE, A. and HUQUIER

Second livre de cartouches chinois.

PILLEMENT, J.

Recueil des fontaines chinoises.

Recueil de plusieurs jeux d'enfants chinois.

Petits parasols chinois. Paris: chez le père et Avaulez.

1770 *Cahier de six baraques chinoises.* Paris: Levier.

Recueil des tentes chinoises. Paris: chez le père et Avaulez.

1758 *Livre de chinois.*

Cahier de parasols chinois. Paris: chez Dabnourue.

Caille de diverse sujet de figure peijssage et ornement chinois et François.

Etudes de différentes figures chinoises.

1752 *Différentes figures chinoises.* Paris: chez Levn's.

服らしくない原因の大半は、これら各部分でのギャザリングの表現であるように観察される。この常套的な様式は、19世紀にはいっても終ってはいない（写真10）。

しばって膨らませることによって、布は丸みのある量感をもつ。それは繊維素材の *incarnation* ともいえる。写真11, 12, 13はおそらくおなじソースからのアレンジとおもわれるが、*incarnation* は、13においてもすすんでいる。しかし、11においてさえ、肩のあたりの量感は、中国服装とは異質のものであろう。

19世紀はじめは、中国の服装を紹介する書物が数多く出版されたが、1820年代とそれ以後は、美術史の にも社会的風潮のうえで



写真10 “Le renard de feu”



写真11 Ferrario, Jules から
“女性の服装”



写真12 Hottenroth, Friedrich から
“中国の婦人”

もロマンチズムの時代にはいる。遠い国の風俗はそのエキゾチシズムの情感のゆえにもとめられ、実際の服装がどうあるか、といったことはさほど問題ではなかった。しかもこの時期のファッションは、いわゆるアワー・グラス・シルエットの、胸・袖・腰各部のまるみをことさら強調したものであった。いわば、Restoration-Biedermeierの女性を、異国的背景のなかにおいてみるとか、そのファッ



写真13 Adam による“中国の婦人”

ョンに中国風の要素を加味するという態度のものであって(写真14)、人気のあった通俗イラストレーターたち、フランスについていえば、Aubrey-Lecomte, Vidal, Régnier, Jacques Louis Schaal, Louis-Nicolas Sch 1, そしてとりわけ甘美な Grévedon, Devéria の諸作品中の東方の女性は、おおむねそのような性質のものであった。



写真14 Grévedon による“日本の女性”

2章 造形作品における認識

本章では、西欧人の描くキモノの、奇異性の理由を分析する。しかしそれにさきだって考えておかなければならないいくつかの問題がある。

和服を西欧人がえがいたからといって、すべてが奇異であるわけではもちろんない。逆に日本人が描いても、とてもキモノとはみえない奇妙なものもある。要は、キモノのかたちをどこまで正しくつかんだかにかかるといえる。正しくつかめないのは、ひとつには写生の技術が不十分であるためであり、他のひとつは、キモノのかたちについての理解が乏しいこと、あるいはキモノの正しいかたちの認識を妨げるようなべつの *mannerism* をもちすぎているためであろう。

写生力と理解とは、ある程度たがいに おぎないあうことが可能である。一般的にいえば、デッサン段階から相当の観察を経てえがかれる油彩画の場合——しかもその多くは職業的画家の手になるのであるから——そのモデルの着方の側の問題はべつとして、奇異感是比较的少ないものである。

彩色画でのキモノは、当然のことながらその染織作品としての効果でとらえられ、その結果“面”的な構造的性が強調される傾向はある(写真15)。しかしそれは対象のとらえかたの問題であって、とらえ誤りとはいえない。私がここでいう奇異性とは、キモノの要素からみて、完全に誤解であるような認識から生じた、キモノらしくなさを意味する。

したがってそれはまた表現様式の問題でもない。この厄介な点についてつぎに触れてみよう。

衣服そのものではなしに、西洋画の表現様式の技法的特色が、「本人の眼になじみにくく、奇異感のひとつの原因にはなりうる。写真16はありふれた硬いペン・タッチのイラストである。西洋服的な観点にたてば、衣服にはどんな直線部分も平面部分もありえないのであるから、ほとんど渦巻状といってよいこのような様式化したタッチも、許される範囲内であろう。しかしどちらかといえば張りのある素材を用いた、直線にちかい部分をもつ構造体にたいしては、こうした丸みのあるタッチじたいが、奇異感をうむ可能性は、じゅうぶんある(写真16,17)。近世の欧風



写真15 Breitnerによる“キモノの Meisje”



写真16 Thomson による“クリスタル・パレスの土曜日の午後”



写真17 “灯籠のまつり”

日本画家——たとえば亜欧堂田善のえがく人物の一種の奇妙さのひとつの原因も、そのあたりにあるかもしれない。

とはいえ、とくに陰影表現においてのこのようなタッチの性質についての、あるいは陰影表現の有無そのものについての奇異感⁸⁾は、むしろ浮世絵版画から日本画にいたる、やや抽象的な線の構造に馴らされたわれわれの眼の側の mannerism に起因するところが大きいのではないだろうか。かりに西洋画的技術をもってえがいたにせよ、衣服そのものについての理解に誤りがなければ、もし強いて奇異感を唱えるにしても、それはあくまでも“変った描きかた”であって、“へんなキモノ”ではない。写真18がその作例であって、日本画の様式からいえば、この時代の冬の綿いれ小袖のもこもこしたかんじは無視されるのがふつうであるが、本作品ではそういう質感もふくめて、正確にキモノの態様をつかんでいるといえる⁸⁾。

曲線的なタッチや、丸みづけのための陰影表現が、キモノの描写にむいていないことは、もちろんいえないのであって、非キモノ的結果の生じるのは、その曲線や陰影感をもちいて表現しようとする作者の認識内容によるのである。

8) 明治以前の厚綿のはいった着物のもこもこした外観は、とくに版画ではほとんどあらわれていない。しかしそのやや不格好な印象は、西欧人の眼にはとらえられている [VARENIUS 1975: 164]。



写真18 渡辺イウによる



写真19 Legamey による
“煙草をすう若い女性”



写真20 春信による

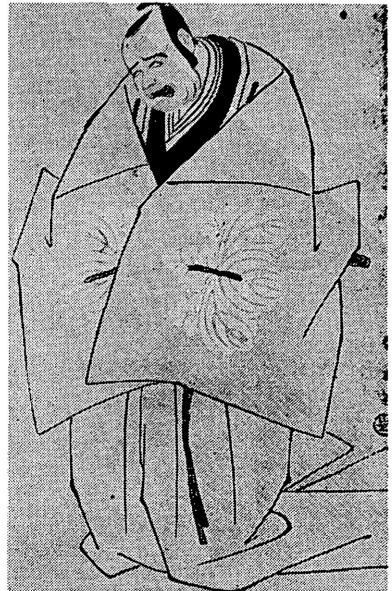


写真21 春英による



写真22 Tilke から“日本の俳優”



写真23 “主人の調髪をする従者”

たとえば写真19のフランス人 Legamey のえがいた女性は、ほぼ線のみであらわされた描写という点では、写真20とかわりないし、ほとんど曲線による構成という点でもちがいはないのであるが、Legamey の眼が、女性の着衣の内側に肉体の量感を認識しすぎていることによって、いくぶんか奇異な印象を生んだようだ。

写真21と22とを比較すると、浮世絵師春英の、毛筆の打込みや肥瘦を生かしたつよい様式性をもつ表現にたいし、Tilke の長袴の描写のリアリズムは、あるていど包まれた肉体を感じさせる。じっさいの舞台上の大紋は、おそらく写真22にちかい状態に視覚的にはとらえられるだろう。しかし日本人の多くは、写真21の方により異和感をかんじないかもしれない。ともあれこのふたつの絵は、その認識と表現の様式においてべつの種類に属するとはいえ、誤りといえるような奇異性をもつものではなく、いずれもこの章での分析の対象外である。

* * *

写真23は、村垣淡路守一行が、ワシントンのウイラード・ホテル滞在中のスケッチである。おそらくあわただしい観察によるものであろう。不自然な点としてもっともめだつのは、かみそりを使っている中間の右袖である。衣服素材についての西欧人の



写真24 Shohei Kikuchi による
“What, no zipper?”

経験は、ウールの材質感が大きな比率を占めているにちがいない。この袖の描写は、構造についての無理解はべつにしても、やや厚地の毛織物のふくらみに近い。

西洋の衣服のもつ丸みの原因は、肉体表現という理念の側からの要素以外に、ウール素材のもつ物理的性質とその扱いにもとづくところがあるであろう。

これにたいして写真24は、日本人の作品であるが西欧人的な眼でキモノをとらえた極端な例のひとつとして示す。写真19の Legamey の方向がさらに誇張されている。



写真25 Ziegler による
“彼女たちは互いによびかわした”

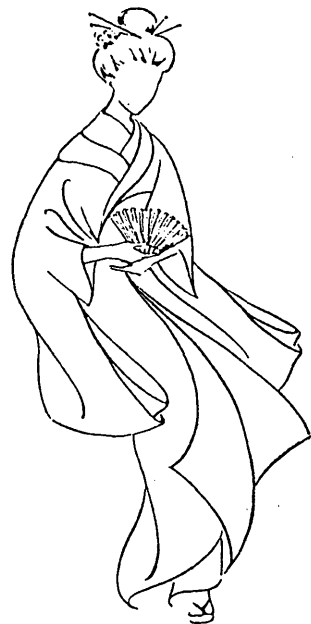


写真26 Hillhouse による
“Japanese kimono”

* * *

写真25は、日本をテーマとした Watanna の小説のうちのひとつに添えられた、屏絵である。1906年当時はすでに、キモノはさほどゆるくはなくなりはじめていたが、西欧人の認識においては依然ゆたかなドレープをもった loose gown だった。こうしたドレープの表現に、Ziegler はギリシャ風の衣皺法を用いている。“rikisha”をはじめとして、車夫の姿など、他の部分は納得のゆく描写をしながら、車上の女性ばかりが異様である。キモノのドレープ性を重くみて、“graceful grecian fold” といった人もあるが [NORMAN 1908: 195], ほとんど無縫衣である古代の wrap と堅い縫込みをもつキモノとを同じようにみるのは誤りである。

写真26は、デザイン教育者の Hillhouse が、“fluid rhythm” の例にあげたイラストレーションである。ドレーパリイとしてのキモノは西欧人のイメージのなかでこのような方向をたどり、第4章でのべるようなキモノ・ファンタジーへと発展する場合がある。この例にみられるような傾向のキモノ認識は、実際のキモノから、という



写真27 Legamey による“ミカドとその属従たち”

よりも、浮世絵の印象からの影響がつよいものと考えられる。その意味では、浮世絵のある様式——たとえば懐月堂系に代表される衣服は、しばしば、このイラストとおなじように“奇異”である。

* * *

これまででは、どちらかといえば表現のスタイルに関する問題であったが、このあとはキモノのかたちそのものに関する問題を取りあげよう。

写真27は狭義のキモノではないが、狩衣である。この例では狩衣の放ち袖がエポレットと誤認されている。detachable の袖はヨーロッパではめずらしくはなく、むしろそのために袖つけの庇構造が存在した。Legamey が狩衣の袖

の離れていることをみとめたときに、そこまでの連想がはたらいたであろうか。写真28は娘の肩揚げをフリルのあるエボレット状に描いている例である。未婚女性の肩揚げについては、日本人の習俗を考察するうえで西欧人にとってもさだめし興味あるものとおもわれるのであるが、その点に触れた文献は乏しい。長期間日本に在住し、日本人の生活をじゅうぶん理解していたはずの Wagman でさえもこのような表現をしているところをみると、西欧人は一般に女性の肩揚げを飾りとみていたのであるか。結婚を眼のまえにした女性が揚げのある衣服を着ている、という観念は、理解しにくかったのかもしれない。



写真28 Wagmanによる“舞踏会の芸者たち”

なお Wagman は、左端の芸者の袖を bishop 風にもえがいている。18世紀以来西欧人は、中国人または日本人のゆるやかな袖を、ビショップ風か、あるいは逆に dalmatica 風に描く傾向があった。日本人の場合はたもとの存在のために、ダルマチカと認識されるのがふつうである。また仮に、たもと状の部分を描いても、振りの手首の側を開放する構造に描くことが多い。写真29もその一例である。この例にはささげがみとめられる。

* * *

写真30では衿、の部分か異様に大きくえがかれている。とくに座っている女性の方は、肩揚げの誤認と、いっしょになっているのかもしれない。衿もとの重なりは、浮世絵の表現ではかなり誇張され様式化するので(写真31)、構造についての誤解にもバラエティがある。男性は衿にスカーフをまくという Steinmetz の記述 [STEINMETZ 1860: 151] も、そうした誤解にもとづくのかもしれない。重ね衿であると衿のうしろが幅ひろく見えることになるためか、写真29のように、扇形に描かれることがある。Giafferi による日本服装の紹介はこの時代ではもっとも詳細なもののひとつであるが(かつもっとも不正確なものであるが)、キモノの衿はショール・カラーである、と



写真29 Yarwood による
“Japanese dress”



写真30 Josse から
“Ancient warrior in armour”



写真31 栄昌による



写真32 R. D'oylc carte による
サボイ劇場におけるミカド公演プログラム



写真33 Gallois による

している [GIAFFERRI 1927: 11]。写真32の男性の場合、羽織は背広風のノッチド・カラー、キモノはショール・カラー風である。この例はコミック・オペラ *Mikado* の宣伝ポスターであるので、誤認というよりも、応用・展開例であるかもしれない。女性のキモノは、すべてやわらかいショール・カラー風にデザインされている。

写真33は、西欧人の手によってかかれた数すくない日本服装史のひとつである Gallois の著書からである。Gallois のキモノについての説明は、ほとんど Baret に依拠し、彼じしんによる挿絵は奇妙な点が多い。この例でもいくつかの欠点は指摘できるが、もっとも眼につく問題は、かたちとしての衿をもたないことであろう。そのために肩口から衿もとにかけての線が、こんもりと盛りあがるだけの状態になっている。もしここにあるていど抜き衿をしたかたちの広幅の衿を描きこむと、帯の高さもいくぶん低目にならざるをえない。(Gallois が典拠とした写真は、比較的新しいものである。) この点の理解のために、写真34をとりあげる。



写真34 Oliphant より“日本の夫人とその娘”



写真35 “横浜美人”

本図は母親も少女も衿はあるけれども、たとえば母親についてみれば、衿よりも肩の方がめだつ。その点で写真33とおなじである。写真34と、よく似たポーズが写真35である。このふたつを比較してみると、実際の女性のキモノの垂直にちかい角度で立っている黒朱子の衿が、肩の印象に優越していることがあきらかである。

* * *

写真36は、現代風の着付と髪型をした芸者である。着付が現代風にみえることのひとつは、写真37の明治風着付と比較するとわかるように、胸がかたく合わさっているためである。これだけ胸の合わさりめが高い場合には、それにしたがって帯も高くしめなければ、胸のあたりがまがぬけてみえる。写真38は、現代風着付でこころみたおなじポーズの着装例である。西欧人の描くキモノは、一般に帯の位置の高すぎるのがふつうであるから、写真36の例はめずらしいケースにはいる。

帯の高さの問題にふくめて、写真39-A, B をくらべよう。B は、A の帯の位置を



写真36 Scott から“芸者”



写真37 写真36の参考例

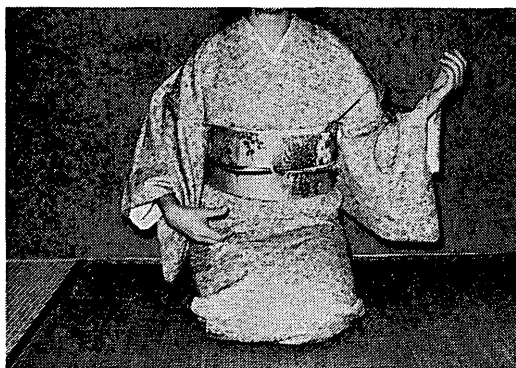


写真38 写真36の着装例

低くしただけである。男性のキモノの帯はとりわけ低いところに結ばれるので、その点でまず西欧人の描く男性キモノは奇妙な印象をうむのがふつうである(写真62参照)。本例はほかに、衿や、袖のかたちなど、修整を要する箇所はのこるが、帯の高さの変化だけでもかなりキモノにちかづいた、といえるだろう。

* * *

写真40も、衿については写真33の場合とおなじである。このキモノではそのほかに、下半身がややふくらんで、しかもプリーツ・スカート状に描かれている。裾がふくらんでいるかたちは、キモノがもっともキモノらしくない印象をうむ確実な条件のひとつ



写真39 Expo. universelle, Paris (1878)にて



写真40 Gallois による

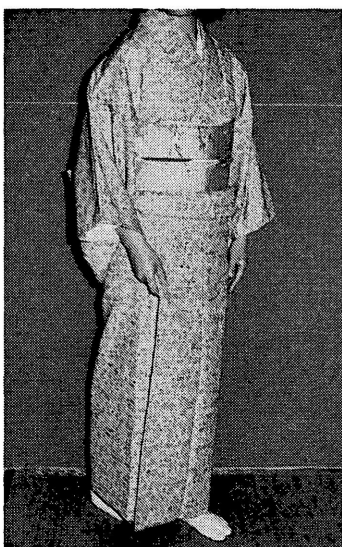


写真41 写真40の着装例



写真42 Thunberg から“日本女性”



写真43 Shoberl から



写真44 Humbert から“雛祭”

つではないだろうか。写真41は同一ポーズの着装例である。明治以前のキモノ図の場合は、おそらく当時のヨーロッパにおける女性スタイルの影響のためにとりわけその欠点がめだつ。写真42および43もその例であるが、ふつう日本人がこの種の表現をみると、衿、袖、帯などのちがいに注意を惹かれがちで、スカート部分の印象の重要さには気づきにくい。

* * *

明治中期まではふつうの家庭でも祝いの日などには曳裾をしたし、花柳界にはずっとのちまでこの習慣がのこる。微妙なことのようにだが、クレポンのえがいた写真44では、袂にかくれかかったあたりの裾がふくらみ加減になっている。写真40で説明したように、西欧人の描くキモノの下半身には、こうしたスカート風の描写が多いが、キモノではこうしたふくらみが生じえないことは、曳裾の場合でもかわりない。

なお写真45の、明治末期の芸妓の出しの衣裳とを比較すると、クレポンの画では、左肩口が筋肉状に波うっている。この点についてはあとで触れたい。これらを勘案して修正したのが写真46である。

* * *

写真47の女性では、袖口が単純なダルマチカ風であること、および一見、胸のあた



写真45 Challaye から
“町風の装いをした若い娘”



写真46 写真44の修正例

りがひどくだらしく見えることが眼をひく。しかしだらしくみえる原因は、胸よりもむしろ肩と袖にある。和服の素材の張りは、肉体の肩・腕とはべつの構造線をつくる。上半身については、この構造線の有無が、和服らしさの重要な要素である。写真48を参照して修正したのが写真49である。参考例の女性の胸もとがもうすこしゆるめてあるのは、この女性がおそらく水商売のひとつであるためであろう。

キモノの構造的シルエットを考えるために写真50の男性の服装を例にとる。ここにえがかれた羽織は、紋つきの背広にみえる。紋の



写真47 Depping から



写真48 写真47の参考例



写真49 写真47の修正例

高さ、袴の紐の位置、袴の丈、そのほか奇妙な点はほかにもあるが、決定的なものは袖山の線である。この点を修正した写真51は、着こなしの点ではいくぶん滑稽な、しかし和装の羽織袴であることには問題ない。修正図の袖山には、折目線がはいっている。折目一たたみ皺は、和服の印象における欠かせない要素であるが、西欧人の描くキモノは、陰影表現がむしろこの線の印象を弱めやすい。

小袖のあの一種のかたさをもった、線的な張りの要素は、浮世絵版画の描線の単純化・抽象化のためのプラス要因であったろう。逆に、浮世絵版画のあの表現主義的手法にすでに馴染んでいた西欧人がはじめて実際のキモノを見て、描かれたものとその芸術的表現との結びつきを納得する場合もあった[BEARD 1929以降: 55]。

*

*

*

構造線の問題をさらにおしすすめて考察するために、古い例ではあるが、Montanus <Atlas Japannensis> 中の挿絵を例にとろう。情報をうることの悪条件を考慮してみれば、モンタヌスの絵は、近世前期の日本服装の特色をよくつかんでいる場合も



写真50 Legg による“日本の服装”



写真51 写真50の修正例



写真52 Montanus から“高官外出の態” 1670

ある。写真52の4人のなかで、右端の男以外、ことに左側の高官の袖が、芋虫様のふくらみをもつ。このふくらみは、写真23にも、また写真50にもみとめられ、キモノらしくなさいの主な理由のひとつになっていた。もっとも、写真50と、写真51との比較か

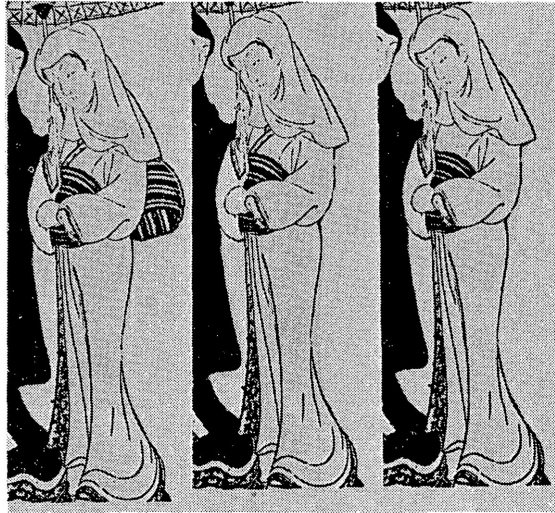


写真53 写真20のバリエーション例

ら、広袖の袖さきと鱗状のたもとによって構成される袖下のゆとりが、キモノの印象をうむ主因とみる見方もあるだろう。しかし事実、羽織にも長着にも、留袖もなぎ袖もある。写真53は、写真20の右側の女性の、段階的の修正であるが、帯の結びめと胸の打ちあわせの消失したあたりにゆきつくまでは、これがキモノではないという議論はおこりえない。それにたいして写真52は、個々の条件はほぼ具備しているにもかかわらず、キモノとしては奇異なのである。

キモノの構造線——むしろ線的構成感は、絹という素材性とむすびついているのではないか、とも考えられるが、袖の稜線は仕立ておろしの絹ものだけではない。着ふるしたふだん着の木綿着物の場合、かっきりした折目線は生じにくい、肩から袖口にかけて、いくつかの三角形を組合わせたような効果を生むヒダの集合が、からだに添ってない布地のいわば自律性をあらわしている⁹⁾。写真56は、写真55にもとづく54の修正である。なお原図の右側の女性の裾は、まえに指摘したようなふくらみに描かれている。

* * *

写真57の女性のキモノで、特に奇妙な点は、これもまた帯から下の部分の大きすぎることであろう。写真58の中央の女性にもとづき、まずこの点を修正し（写真59-A）、つぎに袖の一部と襟とに手を加えた（B）。これまであまり触れなかったのであ

⁹⁾ キモノのヒダのこの特質を、現代のファッション・イラストレーターは、“布まかせのシワ” [長沢 1979: 101] と表現している。



写真54 Oliphant より



写真55 写真54の参考例



写真56 写真54の修正例

るが、西歐人のえがくキモノの衿は、寝てしまう傾向がつよい。キモノの衿が原則として折るかえしをもたないため、西歐人はこれをまるで裁ち端の仕末ていどにしか扱わないのである。これに反して写真35や写真48にみるとおり、キモノの衿は場合によってはかなりの角度をもって肩口に屹立する。西洋服の場合、服全体が肩で支えられるとすれば、キモノは印象的には衿で支持されている。このことは、アクセントのつよい幅広の掛衿が、肩口まで押



写真57 Humbert から
“横浜の駕籠かき”



写真58 写真57の参考例



A
写真59 写真57の修正例

B

しひろげられてかかり、しかもそれと平行してこれも眼を惹く半衿ののぞく、明治和服においてとくにいちじるしい。建築用語を比喩的に用いるなら、キモノは固い衿と、それを下で受ける帯とによって支えられる柱構造といえることができるか。

* * *

写真60は日本人の眼には奇妙であるが、西欧人のかいたキモノ・イラストレーションには多い類型である。この例では、写真30の系列の衿の認識がみられる。その点と、前例で考察した衿と肩の力関係の違いが、このイラストの奇異感の主要な原因であるので、この点を修正したのが写真61である。なお、袖つけの下の部分にも理解にくるしむ方形の布がある。想像するに、著者の Doeley はドレスデザイナーで、キモノ・スリーブが身頃から裁ちだしてであることをよく知っているため、その部分と振りとの関係がわからず、いわば苦しまぎれにこうした処置をしたものとおもう。それでこの部分についても多少手を加えた。

この結果、×印のショルダー・ポイントは消滅し、首から袖先にかけてはむしろ衿と袖つけ線がアクセントになっている。長沢が、「肩が子供のように小さく見えるドロップショルダーといった味で、あの袖つけの線をよく見て描くのは、和服スタイル画のコツでもある」[長沢 1979: 102] と説明しているのはこの点であろう。近代以前の中国画や、日本の浮世絵の慣習的な描法では(写真31)、女性の肩突はほとんど無視される。キモノの場合は男性であっても、うえにのべたような衿と袖の優越のた



写真60 Doeley による“日本の服装”



写真61 写真60の修正例

め、一見撫で肩となり、他の一、二の点の観察を誤ると、ひどく女性的な男性キモノになる(写真62)。西欧人が、キモノには男女の区別がなく、日本人は男も女性的であるようにみる傾向があるのは¹⁰⁾、こうしたことにも関係があるかもしれない。

* * *

写真63および64は、衿にたいしてショルダー・ポイントの優越する写真60と同様の例であるが、その他に胸もとの表現に問題がある。明治和服がモデルとなっているイラストの場合、帯の位置が比較的低いため、胸の打合せのあたりが単調になりがちで、ことに写真63のように帯が細目であると、性別不明のキモノになる。帯の低い場合、

乳のあたりのゆたかさ、あるいはゆるさが、重要なアクセントになる。写真65は写真



写真62 McDaniel による



写真63 Le Monde illustré より



写真64 “日本を救うアメリカ人”

10) Luis Frois にはじまり、[PUMPELLY 1870: 77; チェンバレン 1969: 154; MORSE 1939: 325] がある。



写真65 写真64の修正例



写真66 Ferrard による
48による修正。



A B
写真67 写真66の修正例

* * *

写真66は浮世絵風であるが、明らかに衿の構造がまちがいであるから、その点のみに手を加えたのが写真67-Aであり、さらに袖に修正を加えたのが同Bである。袖の修正においてもっとも重要なのは、肩・袖山の、やや堅い線であろう。写真68はその袖と衿の修正のための参考としたものである。肩・袖山線は、この女性の場合、眼でみえる具体的な一本の線をなしてはいないが、その構造的な存在感はあるからである。

* * *

写真69のイラストは、衿のほかに、西欧人の描くキモノにありがちな欠陥を示している。このキモノは日本人の眼からは、長襦袢のようにみえる。参考の写真70は、現



写真68 写真66の参考例



写真69 Picken による“キモノ”



写真70 写真69の着装例

代風のふつうの着付であり¹¹⁾、写真69より帯の位置はむしろ高めであるが、それでもヒップの張りはほとんどめだたない。イラストのモデルは現代風キモノか、アメリカ人の着用したものであろうが、もし、明治和服であると、帯の位置は下って、骨盤にかかる状態になるので、なおさらヒップの張りは失われる。あるいはヒップの張りをめだたせないことが、帯の位置が低かったひとつの理由であったかもしれない。しかしこの点は、西欧人の眼からみると、女性の体型の美的規準には一致しなかった。たとえば日本人の衣服を、デザイン的に細かく観察したイギリス人 Davidson は、「帯のような幅広のバンドをうまく巻けるのは、もちろん日本の女性だけで、それは生れつき彼女らのからだか、まっすぐで、ヒップもないに等しい——」[DAVIDSON 1907: 323] からだ、といている。



写真71 “天主耶穌論善悪殊報像”

西欧人によるキモノの造形的認識について、不十分な例数ではあるけれども、その通弊のおおよその傾向は、つかみえたと信ずる。ここにあらわれた具体的問題は、他の観点からえられた問題とあわせて、第5章において総括して論じたい。本章のさいごに、参考までであるが、ひとつのケースを追補する。それはいままでの分析とは逆に、キモノに馴れた日本人がとらえた洋服の、造形的表現である。

そのまえにまず、中国人の描いた洋服を分析しよう。例としてとりあげるのは、明の崇禎13年(1639)、湯若望の署名のある、<進呈書像>で、新約聖書の中国語訳である。

11) この写真では念のため、日本人としてはかなりヒップの張りのいちじるしいモデルを使用した(W-62, H-90)。

本書に描かれた衣服の特色は、まずドレーパリーの場合、肉体の形態的实在感が消滅し、そのためにドレープ線が無機化している場合が多いことである。聖書には当然のことながらドレーパリーが多いのであるが、そのドレープ線として、等間隔でかつ平行に走る線がしばしばひかれている。現実のヒダではこういうことはありえないし、布のダイナミズムが失われる結果にもなるのである。一般に描線が、鬚か糸でも置いたように見える。そのため布の弾力性があらわされない。また陰影表現を行なわないわりにはタッチが多く、パッカリングのような印象になっている。この点はウールより、木綿的素材感に近いといえる。

ここに掲出した《天主耶穌論善悪殊報像》についてふれる。人々は全体としてあるていどボリューム感のあるルネサンス風衣裳をまとっている。ただし、エポレットがあっても、明瞭な張りだしあるいはふくらみをもたないため、そのエポレットの存在感がはっきりしない。似たことがウエスト部分や、haut-de-chausse のかたちについてもいえる。その結果、衣服としての構造感、あるいはほんらいエポレットをはじめ、この時代の衣服の意図していた、padding や puffing によるスタイル感が無視される結果となり、かたちがくずれているのである（写真71）。

洋服がもの珍しかった時代の日本人の描いた洋服は、いわゆる長崎絵・横浜絵といわれているものを中心に、相当の量がのこされている。しかしそのほとんどは、表現主義的な伝統的手法による浮世絵版画の様式であって、そこから衣服じたいの認識をみてとることは、やさしいことではない。きわめて概括的な傾向としては、つぎのようなことがいえるのではないだろうか。



はっきりした誤認といえるのは、

写真72 芳員による“外国人子供寵愛の図”



写真73 芳幾による“英吉利”

女性に多い和服風の打合わせである。誤認とはいえないがその他に、全体として描線がきわめて柔かく、波うつように表現されること、そのためクリノリンでも、中に風をうけてうごいているように描かれるものがある。腋のした、および男子の場合であるとずぼんの裾の部分にシワがたくさん描きこまれる。とくに動きの状態を観察したのであればリアルな表現といえるが、洋服の場合ここまで強いシワはあらわれないのがふつうで、むしろキモノや袴のヒダを洋服にかきこんだのではないだろうか。

体形的観察の点では、男女とも胸や肩が貧弱である。男性は肩、女性は乳房の隆起はほとんど表現されな

い。そのために、骨格と筋肉による肉体の構造的量感が欠ける。女性のウエストは、ずん胴であることが多い。

袖つけのふくらみはまず無視されることとあわせ、肩から腕にかけては、ただ丸く描かれるのがふつうである(写真72, 73)。

3章 記述的認識

1) 時代区分について

100年をこえる西欧人のキモノ観の過程では、観察する側にもされる側にもそれなりの変化があったはずである。第2章の造形表現では、彼らの描いたモデルがはっきりしない場合が多いために、とくに項目としては時代わけをしなかったのであるが、記述表現を対象とする本章においては、観察者と被観察者とに負わされた条件の客観的な変化を考慮して、つぎの三つの時期にわけてみたい。

I. 開国期

II. 明治和服期

III. 昭和和服期

開国期はここではおよそ開国以後、1870年前後までの時期である。それはすくなくとも民衆段階でいえば、外国人の眼にたいして、じぶんたちが守ってきた風習について身構えのとぼしかった時期であり、あるいは、身構えるべき具体的なポーズがまだ与えられていなかった時期でもあった。東京府の場合、1872年（明治5年）11月8日に布達された違式註違条例が文明開化の風俗のうゑに画期的な意味をもつことについては、すでに指摘がある〔熊倉 1979: 576〕。横浜の場合であると、開港地という土地柄のせい、東京よりちょうど一年先んじて、大体同趣旨の条例が布達されているのであるが、とくに裸体については、その後もくりかえし県庁からの触れが公布されている〔神奈川県庁 1976: 673〕。「裸でいると、お巡りさんに罰金をとられる」という“恐怖心”も、新しかりに劣らずこの時期の風俗を急激にかえた要因ではあったろう。

II期とIII期の区別を、まず和服の側からのべる。和服そのものについていえば、幕末～明治前期和服は、明治30年代から大正期にかけて、綿入れ・重ね・曳裾・掛衿といっためだった特色を失い、帯や下着にもあたらしい工夫が生れ、これにともなって着付けにも変化が生じた。昭和にはいったころには、そういうまのあたりに見た変化を指摘する人もすくなくなかった¹²⁾。水上の指摘するように、この着付けの変化は、概していえば着付けが“美的に進歩し”，つまりうまくなると表現することも可能である。したがって明治風の着付け写真を現在の和服を着馴れた人々に見せると、一樣に、だらしがない、あるいはへた、と評する。しかし明治期のふつうの女性はそのへたな着こなしで着物をすっかりじぶんのものとして、その魅力を生かしきって生活していた。この経緯については、私は前報告でのべたつもりであるが〔大丸 1979〕、要するに、そこには美的な基準からいえば、ふたつの和服があるとしかいいようがない。

いうまでもないことであるが、こういった変化のある時期で区切ることではできない。そこでひとつは明治前半期を標準点とし、他のひとつは太平洋戦争のあとの現代を標準点として対比させる。

つぎにこれらのキモノとその周辺の日本人の衣習慣を観察する西欧人の側の変容を

12) 「最近では、若い婦人の洋服を着こなすことが非常にうまくなって、まったくイタについた洋装を多く見うけるようになった、それと共にキモノを着こなすことも非常に美的に進歩して、一樣に一つの共通した型が出来た様に思われる。(中略)

この型は、例えば帯の位置、胸や襟あしの形、裾さばき、たもとの長さ、などに現れた時代性である」〔水上 1936: 9〕。

のべよう。アメリカ人の Miriam Beard がその〈Realism in Romantic Japan〉のなかで、日本人をふくめてアジア人を見るじぶんたち西欧人の側が、一昔前にくらべると基準を失ってきていると書いたのは、1930年頃であった [BEARD 1929以降: 120]。Beard のことばは謙虚さのあらわれとだけうけとる必要はない。第一次世界大戦をはさんでの20年間は、ファッションにおけるアメリカン・スタイルと、それを支える文明構造としての American way of life の、世界進出の画期的な時期であった。日本開国のすこし以前から、アメリカを中心としてヨーロッパに影響を及ぼした、いわゆる dress reformation の運動がある。“健全な”社会からは白い眼でみられ、漫画の材料であり、社会の微勢力でしかなかったこの運動の理念には、キモノの態様にかかわる部分もふくまれていた¹³⁾。しかしその理念は、改革者の考えていたのとはいくぶんべつの構造と態様とで、1920年代以後の半世紀に、西欧人の生活意識にあるていどの変革を余儀なくさせた。かつて訪日西欧人は街頭での日本人の裸姿を指弾したが、現在ではシャツの胸をはだけて街を歩くのはむしろ西欧人である。サンフランシスコの講和会議で、吉田茂全権以下の日本代表団だけがモーニング姿であったのも有名である。

西欧人の側の衣習慣のこうした変容は、和服の側に比べればドラスチックであった。しかしそれとてもおそらく、第一次世界大戦の前後で、おおよその線が引けるかどうか、という程度であろう。そこで本稿では、1900年までに書かれた文献を第Ⅱ期の、1920年以後に書かれた文献を第Ⅲ期のそれぞれ基本資料とし、問題に応じて、その中間、ときには他の時期の資料をも考察の対象とした。

2) I. 開 国 期

初期の日本訪問者は公的な立場にあるものが大部分だったし、行動範囲には制約が

13) ドレス・レフォメーションには、いくつかの系統があり、具体的な ideal dress の観念には多少矛盾しあう部分もある。それらのなかで、もっとも歴史的な意味をもっているのは、いわゆるブルメリズムの系統であり、その起伏を経ながらの女性服装改良運動のなかでは、パンツとやらんで、テイラード・ジャケットの着用がすすめられている。しかしイギリスを中心に1920年代末におこった、men's dress reform party では、ネクタイとともに、そのテイラード・スーツも、批判の対象となった。19世紀中ば以後の、ヨーロッパでの服装改良を支えた主要理論は、医学的発想であって、そのためにつねに、からだを拘束しないゆるやかな衣服という理念が一方にあったのである。その意味では、キモノも、理想服にちかいもの、とみる見方があり、Baret などの意見にはあきらかにその立場がみとめられる。しかし第1章でのべたように、“東方的”衣服には、“西欧的”抵抗があった。服装改良論者のアメリカ人 Woolson は、1874年の講演で、未開（東方）の女性がより自由な衣服であるのに、文明のすすんだ我々が体を苦しめる衣服を着ているのは理解にくるしむ、という一方で、しかし我々は、男性に見られるために生きている東洋の女性を真似するわけにはいかない、ともいっている [WOOLSON 1874: 130]。

あり、観察対象もかぎられていた。またその人々の多くは中国人との接触の経験をあらかじめ持っていたので、中国ないし中国人との比較によって、乏しい観察からえられた日本人の印象を、きわだたせようとつとめたとおもえる。

日仏条約調印の一行中の Chassiron は、日本人が中国人と比べて外国人にたいして好意的であることに感銘をうけている [CHASSIRON 1861: 17]。また北京駐在のフランス派遣軍の軍医将校であった Rennie は、中国人は勤勉さに欠け、身持ちもわるい。ヨーロッパから学ぶことについても、日本人の方が熱心だが、商才は中国人の方がすぐれている、と指摘する [RENNIE 1864: 318]。おなじくフランス人で、調印使節一行中の通訳だった Moges は、日本人は、あの卑劣で狡猾な中国人とはちがう。日本人は誇りをもっている民族であるといっている [MOGES 1860: 333]。アメリカ海軍の旗艦ミシシッピ号の乗組員だった Spalding は、やや乱暴に、日本人はあの“pig-tail neighbors”とおなじ系統であるかもしれないが、よりすぐれた人種である、と断定している [SPALDING 1855: 377]。

19世紀の中頃から、アメリカ合衆国は、主としてサービス分野にかなりの量の中国移民を迎え入れていた。ことに奴隷解放後は、その数がにわかに増加することになる。アメリカ人が日本人を中国人と比較するのはたんに周遊旅行のせいばかりではなく、上記のような理由で、アメリカの民衆にとって中国人はすでにじぶんの住んでいる町のなかで親しい存在でもあったのである。とはいえ Spalding のこの口ぶりには、そのような中国人への一種の差別感情もみてとれる。

日本人についての西欧人の共通の認識のひとつは、日本人のきれい好き、ということであるが、これも中国人との対比でとくに意識されたのかもしれない。Moges は、「中国人はおそろしく汚い。日本人は奇蹟のように清潔だ——」 [MOGES 1860: 334] といっている。

まえがきでのべたように、日本人はあくまでもオリエンタルのなかでの日本人であった。中国人との比較にしても、ある広い面積の中から特定の点を認識するための比較、といえるのではないか。したがってまえに紹介した Habersham のような見方や日本人の弱々しげな外貌を、例の東洋的怠惰に帰因せしめようとするイギリス人 Tronson の見解 [TRONSON 1859: 11]、日本人に一面としての東洋的保守性をみいだす Steinmetz [1860: ix]¹⁴⁾、またあの“無趣味な”オリエンタルに共通するものを日本人にもみようとする Chassiron [1861: 7] など、いずれも彼らに共通する

14) Steinmetz じしんは訪日していないらしい。Kämpfer を軸にした、いくつかの日本の旅行記のアンソロジーであるが、その風がわりな挿図とともに、彼の註釈の見解は一読には価する。

態度の一端を示すものであろう。

さて日本人のきれい好きについてはすでに江戸時代の観察者も指摘していることで、いまさらではないが、当時の香港教区の司教であった Smith は、短期間の日本滞在中の見聞によって、つぎのようにいっている。すなわち、なるほど日本人はよく入浴し、からだは清潔であるが、着ているものは汚い。一枚の着衣を何か月も洗うことなく着ていることがある。低層の人々の場合は、入浴は洗たくの面倒を省くためではないだろうか、と [SMITH 1861: 89]。Smith 師はその立場から日本の宗教と宗教者についての記述が中心なのであるが、日本人の清潔さの実際については、正しく観察している。“the cleanest people on earth!” ということばを、日本人になげかけた人類学者の George Scott も、そのあとで「日本人は入浴への passion をもっている」と指摘し、日本人がからだを洗うために入浴するというより湯につかることじたいが好きなのだという、もうすこしあとの時代でつくられる定評をすでに暗示している [SCOTT 1886: 167-170]。

日本人の personal な清潔さへの疑念のひとつは、その入浴法についてである。たとえ家族のあいだでも、なん人もがおなじ湯のなかにつきつきと入浴することは、一部の西欧人には清潔であるとはかんがえられなかった。ごく最近のことであるが、ある知日家のイギリス女性が銭湯にはいるのに、湯舟につかるまえにからだを石けんですっかり洗うのをみて、日本人がはずかしい思いをした、という文章があった [田中 1983: 8, 9]。他人とおなじ湯にからだを浸すことへの感覚は、平行線のまま今日に至っているのであろうか。

personal な清潔感についてのもう一つの批判は、Smith 師の指摘した衣服の汚れについてである。ハーバード大学教授で地質学者の Raphael Pumpelly は、いわゆるお雇い外国人として開化期に滞日した。彼は日本人の衛生について、毎日の入浴による保健上の効果も、下着をひんぱんにとりかえる習慣のないことによって減殺されている、白い下着というものは“rank of a Buñio”より下の階層の人には存在しない、という [PUMPELLY 1870: 138]。同趣旨のことを、世界旅行家ですどい観察者であった Walter del Mar はつぎのようにいっている。「日本人はからだや衣服や、また家の中のことについてきれい好きであるし、日常のことがらについてさえ芸術的な本能というべきものをもっている。にもかかわらず、日本人はめったに洗たくをしない。だから洗たく女などというものは、日本ではやっていけないだろう。下着類でさえ、洗ったり干したりしてあるのをあまり見かけない。外に着るものとなると、滅多に、あるいは全然洗わない——そのためあれだけの入浴の習慣がありながら、日本

人の人混みの中では、おなじようなヨーロッパの群衆の中に較べて、鼻に快い匂いがするとはいえない] [MAR 1902: 322-325]。衣服の干してあるのを見かけないという Mar のことは、洗い張りという洗たく法を彼が知らなかったためでもあろうが、和服は一般に言えば、Mar の指摘どおり、清潔さを保つほどに洗たくをすることはなかった。Mar はその理由を、洗い替えがないため、と考え、Pumpelly もそれを仄めかしている。彼らよりも和服を知っているわれわれは、和服の構造や、着かたなどからくるべつの理由もあげることができるが、しかし同時に、一枚の着物を、冬は綿いれ、春は袷、夏は単にしてすごすような人々が、幕末期の現実の和服の生活者だったことは心にとどめておく必要がある。Pumpelly はとくにその時代の日本について語っているのであるから、彼が当時日本人のあいだに蔓延していた皮膚病と、この入浴・不潔な衣服のシステムとを関係づけて考えていたことも、むげに否定することはできない。ただし、Mar の記述は明治30年前後、日本人の着衣の“異臭”について Mar と同趣旨をかきのこしている Vines の場合は昭和にはいつてからである [VINES 1931: 16]。彼らが日本人から嗅いだ異臭は、それをかならずしも着衣の汚れによる匂いとうけとる必要はないのではあるまいか。

Smith 師はまた、日本人が女性もふくめて、裸のからだを平気で人目に曝すことに触れ、これはアジア的基準で考えるべきでヨーロッパ的基準をあてはめるべきではない、といている [SMITH 1861: 89]。日本人の裸体への無関心さは、Luis, Frois の時代からよく知られていた [FROIS 1965: 524; KAEMPFER 1977: 12]。家の門口で、人眼も気にせず行水をするといったことや、混浴の習慣ともあわせ、これらが日本人の innocence の根拠ともまた immoral の評判の根拠ともなっていた。

中国駐留軍への物資補給の可能性を調査する目的で香港から長崎に派遣されたイギリス人 Fonblanque は、日本人の清潔さと高い趣味性を知って、まちがいなく文明のしるしと書きしるす一方で、日本人のモラルの低さにきびしい批判の眼をむけている。まず彼は銭湯での混浴について、噂では聞いていたが、それが全くの真実であったことを知り、日本人には羞恥心のかけらもないと書く。つぎに或る8、9人の家族が、“stark naked”で居て、じぶんたちのそういう姿にはなんのはじらいもなく、一同がじぶんの方を大きな眼をあけて、訝しげに眺めていたといい、一体、ディナーのときには、彼らも衣服をつけるのだろうかと考えるのである。しかも Fonblanque は、日本賛美者のなかにはこうした日本人のすがたを、primitive innocence のあらわれという人もあるが、じぶんは日本人がけっしてイノセンスなどではないことも知

っている、といい、若い娘もみている当時の芝居や、おもちゃのたぐいにもゆきわたっている日本人の娯楽の性質からみれば、日本人はあらゆる意味で、頹廢的で、官能的で、卑猥である、とまでいっている [FONBLANQUE 1862: 29, 46, 132-135]。すなわち彼によれば、イノセンスとみえるもの、ないしそういわれているものは、実は日本人の不道徳性の、楯の反面にすぎない、ということになる。

そうはいうものの、公然と売られている春画やある種の見世物におけるような卑猥さと、眼を丸くして外国人を眺めている女性たちの覆われていない肉体とを、おなじ不道徳性で包括することには、Fonblanque にも躊躇があるにちがいない。日本人はけっしてイノセンスではないと彼のいう意味は結局のところ、日本人は肉体の性的意味を知らないほど子供ではないという、至極判りきったことを強調しているだけのことになる。幕末～明治和服の開放性や、裸そのものを目撃した西欧人が、“好意”からイノセンスといったのは、ある点ではたしかに幼児的状态だった日本人を、みくびりすぎた見方であった。

ともあれ、からだをみせることと性的放縦とが、相手をえらばないという点で、同一の不道徳の観念に含めて、うけとられたのである。

日本人、ことにその女性の子供らしさについては、開国期のみならず、西欧人がくりかえし口にしてきたところであった¹⁵⁾。あるいは日本女性の気楽さ (easy to live) [HÜBNER 1874: 221] であるとか、なれなれしさ [LONGRAIS 1927: 13]、さらには陽気さ、と指摘される性質¹⁶⁾ のなかにあるものまでもふくめ、そのこととこれもまたくりかえしいわれてきた日本人、とくに女性の性モラルの低さ¹⁷⁾ とは、西欧人の日本女性観のなかで融けあったひとつのイメージだったはずである。貞淑か不徳道か、イノセンスかそうでないかという議論は、日傘とキモノ姿で、桜の木の下に立つ日本女性のイメージをめぐる、その後も延々とつづく。こうした西歐的な価値基準の枠づけにたいし、そうした基準からはなれた分析を試みるようになるのは、第一次大戦後のことであろう¹⁸⁾。

15) Hübner [1874: 319], Field [1883: 410, 411], Tyndale [1910: 122] など、枚挙にいとまない。

16) coquett nonchalance [PIN 1868: 78] といった表現もふくめて。しかし、大正期に入ったころから、その印象は急に消滅している。

17) 日本女性が純潔の観念をもたない、という認識は、近世初期のキリスト教宣教師の報告による影響が大きいであろう。近代では、吉原の存在ことにその人身売買の問題が日本観察者の関心事であった。そのほか、公然の妾の存在、家庭内での雑居に関する問題、そして結婚の態様も、そのことに関係していたといえる。

18) その研究史的展開については、Lebra, T. S. <Japanese Patterns of Behavior> [LEBRA 1976: 18, 140-] が参考になる。

まえにもふれたようにこの時期の外国人の観察は、行動の制約のせいもあって、皮相的にならざるをえなかった。その点は彼らじしんが認めている [LINDAU 1864: 15]。キモノについての一般的認識も、その色や大体のかたちについての印象ていどがふつうである。アメリカにおける日本熱のきっかけのひとつであった¹⁹⁾ Talbot Watts の著書のなかの、日本人の一般的衣服は、

short upper garment, with wide sleeves and a complete gown underneath, fastened around the neck, and reaching quite down to the feet [WATTS 1852: 163]

とある。日本を訪れた経験のない著者であるので批評のしようもないが、この説明であると、西洋服のデザイン的一种をもさして、キモノの特質に触れてはいない。そしてもっとも単純で、つまり一般的なキモノの記述は、こののちも 1) loose long gown, 2) large sleeves, 3) fastend by obi, という3点に要約される。

これに較べると、一年ていどの滞在であったらしいが、イギリスの軍人 Jephson と Elmhirst は、実際に日本人のキモノを体験したらしく、「じぶんたちの固定観念からみればもちろん風変わりであるけれども、便利であるとともにエレガントでもある」といい、最初の着なれないかんじもやがては賞讃にかわるとして、その着心地のよさを保証している [JEPHSON and ELMHIRST 1869: 7, 377]。

3) II. 明治和服期

フランス公使であった Hübner は、その世界旅行記のなかで、「日本に上陸しての印象といったものが、この10年ほどのあいだに、どのくらい沢山書かれただろう。フランス語、英語、ドイツ語の新聞・雑誌はすべて、日本人をあざやかな色調に、塗りたててきた。」といている [HÜBNER 1874: 319]。多分読書家でもあったのだろうが、彼によれば、すでにその頃には、日本人やその風習についての、およその通念は、この多くの情報によってできあがっていたという。たとえば、日本人は礼儀正しく、愛想がよく、洗練されていて、陽気で、温和で、そして子供らしい、と。

西欧人が心にえがく、日本人のイメージについては、たとえば Schwantes の、アメリカ人のもつ日本のイメージの歴史的展開の分析がある [SCHWANTES 1957: 13-21]。しかし Schwantes もこの中で、「ラフカディオ・ハーンが書いたものは、文章が優れているので、ロマンティックな日本というものについての米国人の紋切型な考え方に恐らく最も大きな影響を及ぼした単独の貢献者だろう」[SCHWANTES 1957: 17]、といているように、研究者的段階での分析と、キモノ認識の背景であるよう

19) Cecil [1947: 19] による。

な、紋切型で大衆的なイメージとは、いくぶんちがう様相のものであろう。第Ⅱ期としては比較的早い時代（明治19、20年）に日本を訪れたイギリス人 **Caine** は、その娘と、知人夫妻の四人で新橋から宇都宮へ人力車でむかう途上の風景を、故国の《**Barrow-News**》紙に、つぎのように書き送っている。「たいていの家々の庭さきには、菊の花がいっばいに咲きみだれ、低い奇妙な枝ぶりの木、小さな滝や池、そしておもちゃのような橋や小舟。こういう情景のあるものは、まさに **Willow pattern plate** そのものだ」[**CAINE** 1888: 160]。

日本人のイノセンスについての議論や、田舎ではいまでも、人眼につくところでの行水の習慣がのこっている、といったことへのしつこい興味²⁰⁾は、たしかにこのような明治の日本にはまだそうめずらしくはなかった牧歌的情景のなかで理解されなければならない。

日本の女性についてのイメージは、東南アジア・インドの研究者で、その文化の紹介者だったフランス人 **Chauvelot** の描く「——小さいからだ、細い眼、唇のほほえみ、大きな袖とふくらんだ帯をもったキモノにくるまれ、つやつやした鬘をのせた大きな髪型、扇子を手にして、カラカラ鳴る木のはきもの——これが日本の女性であり、われわれの昔からの憧れの的であった極東の優雅さのシンボルである」[**CHAUVELOT** 1923: 89] というポートレートに代表されている。

日本の女性への **Chauvelot** のというような憧れというものが、いわゆる、“異国の女”に共通する刺激以上のものであるかどうかはわからない。しかし、たしかに西欧人の書いた中国やインドの女性の記述に較べると、西欧人の書いた日本の女の記述は、“**Geisha**”への関心のつよさもふくめて、より大きな量になることは否定できない。またとりわけ、イギリスの日本協会の副会長だった **Diosy** のいうように、おなじ極東でも、中国や朝鮮の女性の印象は、非常に漠然としているが、日本の女性の姿は、西欧人に親しまれていた、[**Diosy** 1898: 235] ともいわれる²¹⁾。

それではその日本の女性とはどんなふう理解されていたのだろうか。モラルの低さ、子供らしさ、あけひろげな陽気さ、といった性格については、すでに指摘した。日本人、とくに日本女性について繰返されるこのような特性は、明治和服の態様とも関係がある。中等の生活をしている女性であっても胸をだすことになんのためらいももたないことにたいしては²²⁾、西欧人はつねに関心をもっていた。

20) 明治末年に至るまで、この種の言及が旅行記に散見される [GUERVILLE 1904: 103; WATSON 1904: 256-261]。

21) 中国服と比較して、日本の女性のキモノの方がうつくしい、などという意見 [DICKSON 1889: 16] は、好みの問題もあるから、参考にはならないが。

22) [BOUSQUET 1877: 86; DHASP 1893: 209; NORMAN 1908: 178]。

また、憧れの日本女性についての“一枚の絵”を描いてみせた Chauvelot は、そのあとに、「——日本の女性の多くは、流行という暴君も知らず、その *costume national* を忠実に守りつづけている」、そして「この国で、モダニズムと西欧化に抵抗しているふたつのもの、それは女性と花とである」、とも書いている [CHAUVELOT 1923: 89-90]。Chauvelot の目撃した大正中期の日本では、女性の洋装はごくわずかで、一方で男性の洋服姿はすでにごくあたりまえであったから、そういう型での二つの文化の併存、そして古い文化に忠実な側の女性、というイメージは、たしかに印象的であったにちがいない。

このような日本女性の保守性、そして従順さは、卑屈さともなり、個性の乏しさや、例の不道徳・無節操とも関係する人間性のなさにも通ずる、と指摘される。たとえば Pettit は、日本の女性は、「大人しくて、可愛らしくて、清潔で、注意ぶかく、“主人”に対しては信じられないくらい献身的——要するに、良い犬の性質だ」[PETTIT 1905: 11]、と日本女性の貞節の内容をいう。また日本女性の賛美者であり、日本人の洋装を、政治的理由にもとづくものとして反対した Norman も、日本女性の美德の中心が服従であり、女性の教養の中に、人間性の向上をはかるようなものがなにひとつないことを訝かっている [NORMAN 1908: 179]。日本人の個性の乏しさは、なにも女性にかぎっていわれることではないが²³⁾、女性の場合、キモノや髪型における変化のとぼしさ²⁴⁾、とりわけ、当時の練白粉を顔から胸にかけてべっとりと塗る化粧法は、非人間的な印象を西欧人にあたえたらしい²⁵⁾。

王室地理学会会員で日本協会のメンバーでもあった Brownell は、その〈The Heart of Japan〉のなかで、女性がたんなる“もの”ではなしに、一個人格であるという思想は洋服とともにはいってきたとし、進歩の象徴としてのファッション論を展開する。

桜の花の下に立つキモノ姿の日本女性にこのようなマイナスイメージもあるにせよ、

23) [LOTI 1953: 44; BELLESSORT 1918: 179]。

24) キモノがかたちにおいて、個人的ななんの好みも反映していない、ということはひとつの事実であるが、西欧人の場合は、そのことと、ファッションがないということとを、同じことか、そうでなくとも非常に深い関係のあることと考える。なぜなら、ファッションは、個人的な選択によって、おすすめるものだからである。

またキモノにあまり男女の区別がないということ [PUMPELLY 1870: 77; チェンバレン 1969: 154; MORSE 1939: 221] もキモノの単純な画一性を彼らに印象づけたであろう。

色や柄に関しては、明治前期の一般の日本人のふだん着は地味な紺系統に集中し、しかもその多くは縞柄であったから、キモノが *sombre* であるという指摘がしばしばあり [CHASSIRON 1861: 7-; ギメ 1977: 23; ARNOLD 1892a: 197; LONGRAIS 1927: 14; QUENNEL 1932: 124]、このことも没個性のあらわれとみられよう。

25) [CURTIS 1896: 378; QUENNEL 1932: 124; DEKOBRA 1934: 80]。

日本の女性がキモノを捨てて洋服になることに賛成する西欧人は、この時期に関しては、ひとりもいなかったといえるのではないだろうか。その理由は日本人の体型や姿勢が洋服には不向きであるから、ということであって²⁶⁾、キモノじたいの美しさを惜しんで、これをのこしたいという気持は、すくなくとも発言の上からは、日本人じしんにくればれば多くはない。

それでは、西欧人がキモノそのものをどのように認識していたかについて、Isabella Bird の〈Unbeaten Tracks in Japan〉(1881, 1907) と、Dr. Baret の〈Le Costume et la Toilette au Japon〉(1892) を中心に考察したい。

Bird の著作は、1881年にニューヨークの G. P. Putnam's Son 社から刊行された計199頁にのぼる2巻ものと、1907年にロンドンの John Murray 社から出版した336頁1巻の改訂版とがある。当然後者は、前者を大幅に削除しているのであるが、じつはその削除部分に、Bird の齒に衣をきせぬ観察がみられ、資料的には重要である。Bird じしんは、ほかにアメリカ合衆国西部や南太平洋の旅行記も書いているイギリス人旅行家であって、自序で、日本の地方をひとりで旅行したさいしょのヨーロッパ女性である、といっている。

彼女は割合 “ugly” ということばを無雑作に使う人で、日本人の肉体的欠点は、そのことばをつかっての酷評の対象になっている。これは1907年版にも残された箇所であるが、日光旅行の帰途、腰巻と半纏だけの女性たちに会い、もしこの連中が眉毛を剃らず、齒も染めていなかったなら、男か女の見分けもつかなかつたらうといい、じぶんがいま “civilized Japan” にいるなどとは、信じられない、と書いている。この Bird のキモノ観察は、滞在期間の短さからすれば、よく見ているといつてよい。すなわち、「キモノは、綿または絹の、巾約15インチの真直なきれで作られ、ま・ちも肩の縫目もない。アームホールは単に縫目をあけはなしただけである。袖はこの衣服のもっとも重要な部分で、踊りや物語りの中では大事な役割を果たすが、おなじ素材の、単純な3フィートから10フィートぐらいの長さのきれである——。キモノはからだにフィットせず、肩からだらりとたれさがる。また前の部分は広くてゆるやかなので、たくさんの品物がここにはいる——。日本人はぬげやすい下駄やぞうりをはいているために、その用心が、彼らの臆病そうな歩きかたをうんだ——。女性の衣服はけっして優雅ではない。肩のあたりがだらしく、腰のまわりも我々同様きつくしめ——裾

26) Lecomte [1893: 147] にはじまり枚挙にいとまないが、日本人の体型の問題への批判ないし嘲笑のほか、住居との関係を指摘する意見が多い。政治ジャーナリストの Bland のように、洋服を安直視し、からだへの fit に無関心な日本人の洋服観を批判している例もある [BLAND 1921: 228]。

が長いため泥んこの道では難渋する——。頭が大きすぎる日本の女性が、小股でよるめき歩くのは、どうにも救いようがない——」など [Bird 1881: 37-39]。

この中で Bird が肩口の縫目について触れているのは、いわゆるキモノ・スリーブに関連するおそらく西欧人の最初の言及であろう。

つぎに Baret の見解を紹介する。彼は医師として、衛生学的な立場からキモノを考察し、おおむねこれに肯定的である。Baret の関心は、とくにキモノのもつ、肉体に絶対的な自由さを与えているという点にむけられる。「いかなるきつい紐も、胸や腹部を圧迫するコルセットも、静脈瘤の原因となるようなガーターベルトも、子宮後屈をひきおこす高いヒールも存在しない。幅広い帯は乳房をささえ、寒さから消化器官を守る。日本の女性は、妊娠中でさえ、そのふだんの衣服のまま、楽にしていることができる。」

そしてまたべつの箇所、キモノが通気性と透湿性を確保していること、その形態においては、基本的に *vêtement flottant* であって、ヨーロッパでいえば、部屋着として考えるべきものであること。着装法としては胸で打合わされるが、胸の一部は露出される——。一本の帯でからだに添わされ、大きな袖をもち、袖の下部分はポケットの役割をもつ——、と説明する。しかし Baret はキモノのこのような解放性は寒い季節には不向きであることを指摘し、そのためとくに戸外で働く人のためには、近年外国から *tricot* や *gilet*, あるいは *caleçon* の類が輸入され、急速に普及しつつある、とのべている。

キモノがからだを拘束もくろみこみもせず、より自由な、(したがって健康的な)衣服であるという指摘は、すでに Luis Frois の時代からあるが [FROIS 1965: 507], それはまたつねにあの、日本人の、裸についての慎みのなさにむすびついた。ドイツ人の Exner はそれについて、「キモノがからだをすこしも拘束せず、手も足も自由になるから、洋服にくらべてはるかに健康的であることは、疑う余地がない。いわば理想的な、夏の室内着である——。キモノがかつて、慎みぶかいレディにふさわしいものではなく、日本の近代文化とは相容れないものだったという説もあるが、私はかならずしもそうは思わない。なぜなら、着る人のからだの形を強調するために、さまざまの方法をめぐる洋服にくらべ、軽いキモノは着重ねが容易であるから——」 [EXNER 1891: 97] といっている。

Exner の最後の弁護はいくぶん見当外れの感もあるが、ともあれキモノが自由で、ある意味では自然であるという考えは、それがいくぶんか西欧的上品さの規準に外れるところがあるにせよ、一部の西欧人の認めるところだった。そのことはこの時期の

ヨーロッパやアメリカにおける、前にのべた服装改良運動、ないしそれを生み育てた思想との関係をぬきにしては、語るができない。それと関連してここで指摘する必要があるのは、キモノを、ギリシャ服装になぞらえる見方の、あったことである。

キモノをギリシャ、ローマ服装になぞらえることのもっとも熱心だったのは、Emile Guimet であろうか [ギメ 1977: 11-]。しかしギメは、キモノじたいを即物的にみている、というよりも、美術史家としての詩的感興が優先しているようだ。これにくらべると、イギリスの元砲兵将校 Knollys はより具体的に、日本人が「キモノを drape している」といい、それをまた Grecian robe とよぶ [KNOLLYS 1887]。また Loonen はキモノを、manteau national とよんで、一種の外套ないし上っ張りとしているが [LOONEN 1894]、あるいはこれは打掛をさしているのかもしれない²⁷⁾。これらのひとつとは、キモノのもつ非拘束性に着目し、あるいは古代服装とのダブルイメージによって、ややこれを理想化して考えているのであるが、そうした理想化の、手掛りにせよなりえたのは、明治和服のゆるい着付けであったにちがいない。ことにギメの場合、彼がその美しさを嘆賞した船頭たちは、ふんどしの上から細帯一本の着かたであった。

しかしこういった見方とは反対に、ゆるさというおなじ事実をだらしなさ (trumbling off) とみる Bird のような見方もありうる。しかも Bird によれば、そのだらしなさの一方で、キモノは帯をきつく締め、またその裾の部分のかたちと着付けかたのため、歩きにくい、と批判する [BIRD 1881: 39]。

Baret や Exner の賛美した、キモノのもつ自由さと、Bird の批判とは、矛盾するようであるが、いくらかの部分的なそれぞれの側の誤解をべつとすれば、これらの観察は全体として、明治和服の実際をさし示しているのではないだろうか。Bird の見たように、当時の女性のキモノは家の中では裾を曳く機会が多く、寒いときは綿の入ったものを重ねて着た。帯の締め様のきつい緩いをべつにしても、このようにからだに添わない布の量と重さとは、“自由”であるかどうかは、生活——とくに運動の態様と着ている衣服のかたちにたいする着る人の自覚によって大きく変る²⁸⁾。ギメはとくに、船頭や労働者の、からだの大部分をむきだしにしたような無雑作な着流し姿を、古代のドレーパリーに譬えているのであるが、キモノは、畳の上に拡げたときの

27) キモノのドレープ性をとくに指摘した人としては、“long graceful Greek fold をもったキモノ” といった Norman [1908: 195] や、Ayrton [1879: xii] がある。また Klein は〈Lexikon der mode〉のなかで、‘mantelartiges’ と形容している [KLEIN 1950: 207]。

28) からだに添わない衣服は、運動を妨げ、したがって拘束的である、という考えかたは、ヨーロッパではむしろ常識的である。たとえば、ICOM コスチューム委員会作成の〈Vocabulary of basic terms for cataloguing costume〉において、英文の、with shaping for arms—Coat、の仏文は en degageant les bras—Manteau となる。Musée de l’Homme (Paris) の〈Vers un système descriptif du vêtement〉(1981) も同様である。

形では同一で、前で打合せて帯でしめるという粗い表現でならなんの変りもないが、着ながし姿と、Bird が主に接触した上流階級の女性のキモノとは、あるいは別の種類の衣服と考えるべきかもしれない²⁹⁾。

Bird の指摘した、キモノの裾が歩行の妨げになるという点は、西欧人よりもふつうは日本人が問題とする点であった。この時代には前の合わさりが、現代和服にくらべて浅いため、戸外ではすこしの風でも裾が翻り、女性はたえずそれを気にしていなければならない。西欧人の視線はどちらかといえば、胸もとの慎みのなさに奪われがちであり、歩きにくさの点については、履物についての関心が、おそらくそのもの珍しさのせいもあってつよいようだ³⁰⁾。

歩きかたをふくめて、日本女性の姿勢のわるさは、西欧人のみならず、明治・大正期を通じての日本の識者、とくに教育関係者の大きな関心事だった³¹⁾。西欧人の指摘するところが日本人の観点といくぶんニュアンスを異にする点といえば、彼らがしばしば日本人の体型の悪さ——すくなくともじぶんたちのそれとはちがう奇妙さ——内股・短足・平らな胸、などの点を口にする³²⁾、およびキモノのかたちの奇妙さ——とくに羽織のしたに帯をした姿のふしぎさをいうことなどであろう[DAVIDSON 1907: 324; 他]。

明治の著名な女子教育者三輪田のいうように、姿勢のわるさは卑屈さにも通じる。日本人のふかぶかしたおじぎの習慣は、多くの日本旅行記のたぐいに、写真入りで紹介されているが、とくに日本女性の姿勢のわるさは、このおじぎにかかわる心理と無関係ではあるまい。当時の日本女性がめったに外出せず³³⁾、畳のうえでのどちらかと

29) 明治末の大阪市郊外伝法村の風俗について、「市の附近にありとも覚えざる野蛮不潔の地なり一冬季は婦女人帯をせめて往来をせず、夏は男女とも大抵赤裸なり」という記事が《風俗画報》にある[霞蝶園主人 1905: 21, 22]。しかしこうした姿は、戦前の日本では、夏の夕方のある種の地域では、めずらしいことでもなかった。その一方で、「和服は端正なる感を吾人に与ふ、これ端正高雅の礼容を尚ぶ我が国人の精神的要求に適合するものであろう。然しながら洋服にはこの要素を具備せない」[石沢 1922: 100]、という自覚がある。洋服の場合、protocole に則った装いであれスラムの酔漢であれ、結果としての外観に、ここまでの差異があるだろうか。

30) [GIAFFERRI 1927: 11]。

31) 姿勢の悪さの指摘はなにも女子教育者や、服装関係者のみによるのではない。姿勢の良し悪しはその人の精神にかかわるものとして、国粹主義の立場からの慨嘆もみられる[三宅 1891: 157]。女子教育の立場からはむしろ、日本の女性の体格の劣っていること、体質の虚弱なことから、女子体育振興の方向に伴うものとして、姿勢についての言及のなされる例がふつうである。そしてその場合直接関接に、西欧人との比較や、国際社会での日本女性という観念が、目標としておかれている[槇山 1932: 35, 39; 渡辺 1905: 72; 小林 1904: 137; 三輪田 1897: 103; 上原 1929: 7; 巖本 1892: 104; 桜井 1889: 71]。

32) [HÜBNER 1874; BIRD 1881; CURTIS 1896; WATSON 1904; TYNDALE 1910; LONGRAIS 1927; GIAFFERRI 1927; VINES 1931; QUENNELL 1932; HUMPHREYS 1948]。

33) 大正期でも、日本女性がほとんど家の中で生活していることに、西欧人は注目している。[ANDERSON 1914: 109; FOREST 1923: 19]。Forest は、日本の家屋は戸締りが悪いために、主婦が家をあけにくいのだらうと、想像した。

いえば不活発な時間を多くすごしたことも姿勢のわるさの原因であるという、忠告もあった [チャタム 1908: 40-42]。姿勢のわるさというものをいわばこうした精神生活の面からとらえるならば、ものとしてのキモノも、ふたたびまたあの、桜の下で日傘をさしている日本女性のイメージのマイナス面に立戻ることになる。森田たまは戦後の随筆のなかで、「外人が着物を着る時、そこにあるものはただ『美』を尊び『美』をよるこぶ純粋な気持だけである。異国情調を味わい楽しむ遊びだけである。封建の匂いは彼等の着物にはない」 [森田 1957: 79] と書いた。しかし彼らがいっしょにそれを着るかどうかはべつとして、“封建の匂い”は、キモノを着た日本女性をいとおしむ西欧人のなかのある人々には、じゅうぶんとらえられていたのではなかったか。なおこの問題については、第Ⅲ期を扱う次節で再説する。

Bird はまた、日本の女学校で行なわれている裁縫教育の単純な実用主義的内容についてふれている [BIRD 1881: 136]。この点に関連するのは、明治の日本女性の生活ぶりをアメリカ人の眼でとらえた、Alice Bacon の報告である。Bacon は当時の日本の妻たちが、蚕の飼育にはじまる“着られるかたちをつくる”というその実用的目的のために多くの時間を費し、アメリカの女性が楽しんでいるような fancy needlework を知らない、と指摘している [BACON 1891: 95]。刺繍や造花、編物といった手芸はやがて女学校の教科にもくみいれられてゆくのであるが、キモノ中心時代の家庭の女性たちが、家族の衣類の解き洗いと縫い直しに追われていたことは、事実である。Bacon のこのような指摘は、キモノは縫いあがったものを見てもじぶんたちにはできのよし悪しの判断がつかないといっていることや、西欧人が早くから気づいていた縫製のステッチの単純なこと³⁴⁾、とあわせ、日常のキモノのもつ無趣味さを印象づけられていた人もあったらしい。もちろん Guimet をはじめとして、日本人の生活のなかの芸術性に嘆賞のことばを放つ人は少なくはなかったのだが [GUIMET 1880: 157]。

4) Ⅲ. 昭和和服期

昭和にはいるころから、キモノについての西欧人の認識は、日本人および日本の社会をより構造的にとらえた結果と関連してうまれてくる場合が多くなる。日本はすでに、そのめざましい近代化によって、海外では評判になっていた。そういう時期になって、むしろ日本人の日常生活の貧しさへの言及がふえている。その傾向は、1930年代とそれ以後において目につく。

34) [FISSCHER 1978: 118; GUNSAULUS 1923: 45; CHALLAYE 1905: 12]。

日本人の貧しさの問題は、とりわけその住居の様相について、西欧人の関心を惹いている。かつてはほとんど触れられることのなかった汲取り式便所への批判も、この時期になってにわかにならぬ [PATRIC 1944: 42-]。

戦争前夜に訪日し、結局交換船で帰国したアメリカ人 Joseph Newman はつぎのようにのべている。「アメリカの学校で教える日本についてはなしは第一に、日本人の清潔さである。日本人は家の中にはいると靴をぬぎ、ハナがでるといちいち紙でかんで捨てる、と。しかし事實は、日本の子供は黄色いハナを長く垂らしていても、拭いたらからだにわるいといつてそのままにしている。そして一つの小さい部屋の中に5人以上、ときには8人もの家族が、喰べて寝て、また遊ばなければならない——」 [NEWMAN 1942: 14]。とくに1940年前後の日本を見聞し、記録を書きこしているアメリカ人には、いわゆる親日家が多いのであるが、しかも彼らは Newman の場合のように、wet blanket の役割をたいていはつとめている。それはひとつには、かつての、桜と芸者の国の甘美な通念にアンチテーゼを提供することが、著書のひとつの売りものとなるような段階にきていたためであろう。そこで Newman はまた「色どり豊かなキモノや、(芸者の) pretty doll face に心を奪われたくなければ——外国人はまずこの《日出ずる国》の貧しさに眼をむけるべきである」ともいい、日本人の住む家は“shack” (掘立小屋) であるともいっている [NEWMAN 1942: 13]。

その shack での日本の家族の雑居性に眼をむけたのは、もちろんこの時期がはじめではない。日本人の co-sleeping behaviour について学問的な関心がむけられるようになったのは第二次大戦後であるにしても、たとえば明治中期に日本を訪れたフランス人 Dhasp は、日本人の家族が信じられないような雑居生活をし、入浴はなんんかがいっしょにし、部屋は見通しで中で行なわれていることを子供の眼からも隠せない、と書いている。彼はこうした習慣に、日本人の特色である、もの静かな無関心さ、悪気のない無遠慮を関係づけた。そして衣服についての、西欧人的な意味での羞恥心の乏しさも、これにむすびつけた [DHASP 1893: 215]³⁵⁾。

ふたたび Newman の文章に戻ろう。1940年前後の日米間の緊張が高まっていた当時、アメリカ人の中には、たとえ日本がアメリカを敵にしようとしてももしアメリカから輸入している夥しい“舶来”の物資を失うなら、日本人の生活はなりたたなくなるにちがいない、という楽観論があった。これにたいし Newman は、舶来文化といったものは日本人の現在の日常生活にとってなんら本質的なものではなく、「フェ

35) 人ままで着がえをすることの平気さについて、あるアメリカ人旅行者は、高野山の麓の宿屋の広間で、下山した三人の女性が、こちらに背をむけただけで、華やかなべつちのキモノに着がえた、と感心している [FRANK 1924: 96]。

ルト帽が流行しても、日本人はそれを、絹のキモノと下駄、あるいは草履といっしょに用いている。革靴をはいても、多くの日本人は紐を結ばずに、下駄をはくときのように足をすべりこませる。日本人が靴のうしろをすぐ潰してしまうのはそのためだ。なにかという靴をぬぎたがる日本人には、足にぴったりした靴は不愉快なのだ。舶来のネックタイ、シャツそして背広姿の日本人も、畳で夕食をとるときには、よりきごちのよいキモノになるために、それを脱いでしまう」[NEWMAN 1942: 205]、といい、舶来文化がきわめて表皮的に、日本人のむかしからの生活パターンの構造をほとんど変えることなく、いわば併存的にうけいれられているにすぎないことを指摘する。したがってもしかかりに舶来の文化が失われたとしても、衣食住に関するかぎりは、彼らはたいした不便もなく祖先たちの簡素な生活に戻ることができるだろう、とむすんでいる。

1940年前後の来日西歐人、ことにアメリカ人の日本観察記の文脈には、日本文化の特質としていい古されてきた単純さを、貧しさのひとつのあらわれと見て、しかしその貧しさを日本の強さとみる [PATRIG 1944]、そのような認識がうかがえるのである。日本の家庭に泊り、日本の若い女性の生活や意見を直接見ききしたアメリカ女性 Mears は、キモノの着かたに fixed order がなく、その時その時でかわる——雨降りのときは裾をはしよるなど——を見て、ひとつのものをいろいろに着こなさざるをえないのは貧しさのため、と書いた。またかの女は、若い娘の晴着のけばけばしい色あいもまた、日常の生活の貧しさの反映と考えるのである [MEARS 1943: 37]。

さてこの時期、西歐人が過去にくらべて一段とキモノの実態およびそれを支える日本人の生活に肉迫した結果、キモノ論としては日本人のそれと変らない問題を提起し、また日本人とちがわない観点でその魅力をとらえた意見もすくなくない。しかしそれをのべるまえに、もっとも西歐人的なキモノ観の紹介をすませておきたい。

桜の木の下で日傘をかざすキモノ姿の日本娘のイメージは、依然として日本を訪れる観光客にとっては、罪のない憧れの対象ではあったけれど、その前近代的側面もまたじゅうぶん認められてはいた。“kimono-mind” であるとか、“kimonoedmaid” とかいう表現が、たんに即物的ではない意味内容をこめて用いられるようになるが、それはどちらかといえば日本女性の、マイナスイメージにちかいかい意味で使われがちである [RUDOLFSKY 1966; NOËL 1939: 77]。いわばシンボリックに用いられるキモノということばが、漠然と日本なり日本人なりを指しているだけであるなら、今日でも、たとえばアメリカ映画《Shogun》の L'Express 誌 [1980・12・1号] での紹介が、L'Amerique en Kimono となるように、頻繁に眼にする。しかしたとえば、John

Paris の小説〈Kimono〉(1921) の場合、すでにのべたような前近代的な女性像と、さらに西欧人からみた日本人そのものもつマイナスイメージとが重複し、ミステリアスな非人間性の象徴として、このタイトルが用いられている。

たしかにキモノは、日本人じしんにとっても、よかれ悪しかれ古い日本（過去の日本、または伝統的日本）を象徴するような性格をいろいろな意味で担っていた。フジヤマが日本を象徴する、という意味ばかりでなく、キモノの生産、キモノの流通、キモノのかたち、そしてキモノを着ることについてのさまざまな約束ごとが、日本の文化の全容の細部の事象にまで執拗なつながりをもっていた。（もちろん著一本でその文化全体を説明するというのもやりかた次第では可能であろうが——）。したがってさらに、キモノこそが日本女性の“びくついた哀れな小動物”めいた人間性からの向上を妨げているのだといった、感情論もあらわれる³⁶⁾。逆にキモノを着ることが国防意識を高揚するといった思想も、戦時中には滞日西欧人の耳には聞いていたらしい [FLEISHER 1941: 112]。このように次第にイデオロギー化の方向を辿るキモノのイメージであったが、西欧人の認識に関するかぎり、その理解するイデオロギーの内容に、肯定的な部分は少ないであろう³⁷⁾。

象徴としてのキモノをはなれ、ここで私はより即物的内容をもったキモノ論に考察をすすめよう。

昭和和服の分析を代表するものとしては、Charlotte De Forest の《The Woman and Leaven in Japan》(1923) および、Boye de Mente の《Faces of Japan》(1960) をとりあげたい。私はこの時期のキモノ論がしばしばきわめて日本的であるといったが、ここに紹介する Forest も、日本で生れて少女期を日本ですごした女性なので、西欧人のキモノ認識という点ではあるいは問題があるかもしれない。

キモノについての Forest の指摘のひとつひとつは、きわめて生活的で的をえたものである。ところでじつは、Forest の意見のほとんどは、Arthur Lloyd の〈Everyday Japan〉(1909) と非常によく似ている。Lloyd は東京に25年在住したミッション・スクールの教師であったから、のちに神戸女学院の院長になった Forest は、Lloyd の意見からある程度影響をうけているとも考えられる。

Forest, Lloyd がともに指摘する点で、前の期間と違った様相を示している意見は、キモノの窮屈さ、キモノの高価さ、そして日本の家屋構造のための服装の二重生活に

36) [DEKOBRA 1936: 84]、ただしこれは、ある日本人の意見を Dekobra が紹介したもので、彼じしんはこの意見に賛成していない。

37) 私はここで和服のもつ感性的部分をいっているのではない、ということを強調しておきたい。和服が過度にイデオロギー化したことは和服の美にとっては悲しむべきことである [大丸: 1980]。

関してである。

明治和服についての西欧人の眼がその時代の日本女性のくつろげられた胸もとにむけられていたことはなんだか指摘した。胸あけの問題はこの時代にも消えたわけではない。しかしその多くは授乳の女性についてである。しかも肉体の露出についての西欧的伝統も第一次大戦後は変わりつつあった。tolerantia (寛容) だけではなしに、西欧人じしんの方が露出的ではないか、という反省もみられるのである [DEKOBRA 1936: 93]。

これにたいしてキモノの窮屈さの指摘は、明治和服にはほとんどみられない。Dekobra は昭和初年の日本の市井の人々の生活と意見を丹念に拾いあげているが、「キモノは首からかかとまで閉じていて、顔と手足以外はだすことができない」 [DEKOBRA 1936: 93] といっている。こういう認識が、街頭での観察と矛盾しなかったということは、そのころのキモノがすでに明治和服とはべつのものであったことを示している。また Street も、「キモノをもっともひきたつように着ようとすれば、見た眼ほど着心地のよいものではない。胸は平らにきつく抑え、腰のまわりも動かないようにしっかりと固定する。その上に帯は、きつくしめつけてきれいにさせる」 [STREET 1921: 36]、と観察している。まさに現代和服である³⁸⁾。こうした方向は、かつてのずんぐりしたキモノを“眼にこころよい”かたち [CLOSE 1935: 336] へと変える努力のあらわれだった。“delight to the eye” という表現をつかった Close はそのあとで、西欧の日本への期待は、日本人が “becoming western minded and modern minded”³⁹⁾ といっている [CLOSE 1935: 359]。

キモノの高価さという問題はいくぶんか多面性をもつ。現在、日本人にとって和服は高価なものという通念がある。しかし和服が日常的なものであった時代には、和服は一般的なものであれば、それほど高価なものではありえなかったはずである。キモノが高くつくという西欧人の指摘もこの期間以前にはみられない。そしてなぜそうなのか、という点について Forest は、「キモノは裁断こそ変らないが、生地も、色も、模様も、シーズン毎にかわる」 [FOREST 1923: 27] といっていて、これは日本側の証言とかわりない³⁹⁾。流行を追えるようになったのは、日本人の富の向上であった。現在キモノに流行が少なく、おなじものがいつまでも着られる、という事実があるとすれば、日本人のキモノへの関心の低下ということになるであろうか。

38) 日本側の証言を一例だけ示す。「先ず美しい襟足を惜しげもなく出してゐるのは単に美観の上からいっても誠に結構であるが、昔のやうに襟を自然に合はせずピッタリと皮膚に喰ひこむ位に合はせてゐるかのやうである。切角白い襟足を露出して皮膚鍛錬を企ててゐるのに、かう締めつけては誠に苦しいことであらうと思ふ」 [藤原 1938: 129]。

39) たとえば、[石沢 1922: 102-113]。

日本人が日本家屋に固執するかぎり、外での洋装、家でのキモノという、二重生活を避けることができないというのは、多分、日本人の生活をよく理解し、第二次大戦中には教育勅語まで生徒に読んできかせたという Forest の実感だったろう。しかしそういう女性であるだけに、見当違いの意見もないかわりに、これらの意見のどのひとつをとってみても、さほど啓発的とはいえない。

欧米人のキモノ認識の最後として、キモノのデザインをとりあげよう。他の問題でもそうだったように、ここでもまた“日本人的な眼”が、キモノの魅力をとらえるようになる。衿足の魅力について、第二次大戦後の来日西欧人が口をそろえて語ることもそのひとつである⁴⁰⁾。

しかし西欧人のキモノ・デザイン論の中心は、結局その肉体表現の可能性に関する点ではないだろうか。キモノの構造が肉体と無関係であるということから、キモノが日本人の体型のわるさをカバーしている、という意見は、日本人にもあるように、西欧人にももたれてきた⁴¹⁾。しかし日本人にみられない意見は、Browne [1904: 58] の、着重ねによって、着る人のからだの線が失われるという意見であろう。日本女性のからだはかたちをもたない [CURTIS 1896: II 250] とか、regularity of feature を欠く [HÜBNER 1874: I 321] とかいう表現は、肉体のいわば美学的な規準とその発展としての衣服という原則への固執を感じさせる。キモノをドレーパリーになぞらえる人もあったが、古代地中海世界から中世ヨーロッパにかけての wrap, mantle 系ドレーパリーは、素材の性質もあって、キモノよりも“肉体的”といえよう。そのためか、西欧人はキモノを、wrap ではなく、tunic と理解しているふしがある。キモノの構造分析をもっとも精細に行なった Norman は、つぎのようにいっている。キモノの欠点は、歩行の自由が妨げられがちで、さもなくば、あしがみえてしまうことであろう。そのため、短いキモノと、袴を用いる案があるが、ギリシャ風のゆったりした長いヒダの線がそれでは失われてしまう。そこでじぶんとしては、キモノの裾を、足をじゅうぶん覆えるようにもっと広くするか、あるいはギリシャの diploidion のように、頭からかぶって着る、袋型にできないものかと思っている、と [NORMAN 1908: 195]。頭からかぶるキモノなど、日本人の理解するキモノとはまったく相容れないものであるけれど、西欧人のキモノ理解には、数は多くないとはいえ、このようにキモノの打合わせを、さほど重視していないようにみえる例もある⁴²⁾。

40) [MARAINI 1959: 340; SCOTT 1960: 101; FORBIS 1976: 64]。もちろん、かつてもそのことに触れる人が、なかったわけではない。

41) [STREET 1921: 31; VINES 1931: 103; HUMPHREYS 1948: 21; FORBIS 1976: 64]。

42) 戦後の代表的な専門辞典である、Leloir [1951], Kybalová [1966], Yarwoō [1978] がその例にはいる。またキモノの端的な印象からいえば、打合わせであるか、Vネックであるかは、あまり問題にならないものである。

西欧人の認識では、キモノはむしろ poncho, ないし tunic であって、肩から吊られ、その結果染織工芸品としての素材性が優先し、肉体、ないしセックス・アピールは後退する。

日本人がなぜ衣服のセックス・アピールを育てようとしなかったかについて、やや社会学的な説明を試みたのが *Mente* である。彼はある専門家の説として、つぎのようにいっている。「日本人は長いあいだ、人を個人としてよりも、彼のおかれた、社会的立場で見られるように教えられてきた。性はたしかに、家族または社会の中でその人の立場をきめる基本的要件ではあるが、しかし一旦その立場が確定すると、それが性そのものに優先する。一部の職業的女性をのぞけば、女性は一般にじぶんたちの性を強調しようなどという気をおこさない。むしろ、彼女が女であることを deemphasize しようとするのだ」[*MENTE* 1960: 100]。

この *Mente* の指摘は一見もっとものようであるが、掘って立つ事実認識の点での誤りがある。すなわち、*Mente* のような日本型社会は、それが今日消滅したという意味ではないにせよ、前近代的な、べつのことばでいえば過去に属する日本であるのたいして、彼の理解しているキモノは、昭和和服以外のなものでもないからである。

Mente はキモノを、non-sexualness というのであるが、明治和服の場合は、その露出性を、西欧人によって不道徳とまで言われ、くりかえし指摘された。衿もと、袖口、襟からこぼれるセックス・アピールは、もとより non-sexual などではなかった。キモノの場合、皮膚露出はあっても、衣服の構造的露出というべき体形露出が欠けるという考えもあるが、明治期の日本の男性の股ひきの tight-fitness が、裸体と同じような意味で、日本の賛美者までをもふくめて、西欧人の眉をひそめさせていた事実を想起すれば⁴³⁾、その考えも必ずしも当たっていない。キモノの“無性化”は、その儀礼化にともなう現象である。昭和和服のもつセックス・アピールの乏しさ（西欧人の眼からみての——）によって、日本人の服装全体がセックス・アピールを欠いているとみなし、そこから日本社会の固定的な役割構造へと議論を展開させるのは、いくぶん無理であろう。*Mente* のこの議論の粗さは、西欧人のキモノ論に多い、あるいは物質文化論が一般に陥りやすい態様分析の甘さがもたらす結果である。生活的な態様分析を欠いた場合、たとえば衿がなんのためにそのような構造をとらねばならないのかという理解さえ不十分なものとなり、ひいては、その構造の理解によっても強調されるはずの、かたちの認識もまた崩れることになる。西欧人のキモノ論や日本服装史

43) [GARDINER C.1892: 41; KNOX 1880: 86, 87; REIN 1888: 488; SLADEN 1903: 5]。

が往々にして、染織工芸の紹介以上になりえないのも、そのあたりにひとつの理由があるのではないだろうか。

4章 西欧におけるキモノ受容の態様 —イギリスを中心として—

まえがきのなかで私は、本論で用いる「西欧」の概念について、いくぶん曖昧ながらその枠づけを行なった。しかし単に観察する立場にとどまらず、対象をじぶんのうちにうけいれる段階の分析になると、受容者の具体的態様によりふかくかかわることになるので、考察の対象をさらに限定して、全体を鳥瞰するてがかりとすることにとどめたい。

4章の1, 2節でとりあげるのは、イギリスである。その理由は、受容の態様も、日本理解の内容との対応のうえでとらえてゆくべきである以上、もっとも多量の日本紹介文献をのこしてきた、英・米両国に、まず眼をむけるのが当然であるとおもえるからである。ただしアメリカについては、西欧型衣の文化の伝統という点では、旧世界とはまたべつの問題をもつため、必要に応じて、イギリスとの対比においてのみとりあげることにする。

なお、それに加えて念頭におかねばならないのが、kimono とよばれる衣服の実際の形状である。この点についてもまえがきのなかで枠づけをしたのであるが、西欧人の日常生活のなかでの個々の衣服について論じる段階では、さらに具体的な、区分的配慮が要求されよう。金銀糸でぬいとられた総模様の綿いれ絹小袖と、手拭染の安直な木綿のゆかたとでは、特別の知識のない西欧の家庭でも、同列にあつかうことはありえない。それにもまして問題となるのは、日本人が見てとてもきものとは考えられないような、あるいは考えたくないような、最初から輸出を目的として、というよりスーベニア・ショップでのお土産を目的としてつくられたキモノ、あるいは日本以外でそれらしく作られた、キモノ風ドレスの類である。

残念なことに、以下とくに一般的受容の項で扱う資料の多くは、記述者の示しているキモノが、上記のものうちのどれであるかを、あきらかにしてはくれない。このことをじゅうぶん考慮のうえで、論述をすすめる必要がある。

1) 一般的受容

イギリス人の日常生活のなかにうけいれられたキモノのもっとも代表的なかたち

は、*dressing-gown* であった。Wilcox が〈*The dictionary of costume*〉(1969) の *kimono* 項のさいごに、“Worn as a dressing gown by Western women” と書いているのは、そのもっとも明快な一例である。実際、今世紀になってから日本を訪れた西欧人の眼には、「日本はドレッシング・ガウンとスリッパの国」[MAR 1904: 326] であるとか、「あなた方がドレッシング・ガウンとして知っている (キモノ)」[DAVIDSON 1904: 322] であるとか、「ドレッシング・ガウンとしてヨーロッパ人に親しまれているキモノ」[GUNSAULUS 1923: 44] といったことばが示すように、じぶんたちの見馴れたドレッシング・ガウンとしての先入観のもとでキモノを見、そのうえでべつの様相をも発見する、といった視角もあったかとかんがえられる(写真74)。

それではイギリスにおけるドレッシング・ガウンとは、どんな性格の衣服であったか。このことばを字義どおりにうけとれば、化粧着である。第1次大戦以前の時点であれば、フランスにおける *peignoir*, アメリカにおける *wrapper* がほぼ同一の概念だった [Joy 1907: 45]。しかしながら日本人の衣生活にはほんらい存在しない化



写真74 “la parisienne japonaise”
Stevens による

粧着といった日本語におきかえるよりも、ドレッシング・ガウンという呼称のまま、そのより広範囲でつかみにくい性格を理解しようとする方が賢明であろう。ドレッシング・ガウンの性格を端的にいうなら、ディナーのためのドレスアップ以前の、広義の *lounging wear* といえようか。そのもっともプライベートなものとしては、*bath-robe* もふつうこれにふくめる⁴⁴⁾。一方、時代はややさがるのであるが、ある *etiquette book* において、ドレッシング・ガウンには二つの種類があり、そのひとつは上述のような実用的なバス・ローブであるが、もうひとつは、レースやプロケイド、

44) バス・ローブは人前にでたり、これで外出のできるものではないので、日本のゆかたとは性格がちがう。しかしその一方で、寄宿舎の学生などの *study-wear* として愛用され、テイラード仕立やしゃれたデザインのものもあるから、単なる湯あがりの汗取りではない。

朱子やビロード製の華やかな外観の衣服で、「あなたはそれを着て、ホテルの廊下を“calm dignity”をもって歩くことができるでしょう」と書かれてあるような性格のものである[MOORE & MOORE 1932: 58]。1898年の資料にも、「ドレッシング・ガウン, tea jacket は、今日もっとも金を費す衣服である。その人の衣服に可能な経済的なゆとりがここにかけられるので——」[*The Lady at Home and Abroad* 1898: 186] とある。

このようなおしゃれ着としてのドレッシング・ガウンは、引用した文献ではそれとはいっていないが、むしろ *afternoon-dress* やつぎにのべる *tea-gown* にちかいものといえるかもしれない。

ドレッシング・ガウンの実態にこれだけの幅があることは、この章の冒頭でことわった、キモノの側の幅との対応を、われわれに考えさせる。木綿のゆかたやその周辺の、安もののキモノは、バス・ローブやそれに近い目的——*bedroom garment*, あるいは *night-wear* として用いられうる。この種のキモノ・ガウンは、その構造の単純さからして、ドレスメーカーの初歩的訓練のための格好の教材であったが (p. 793), おなじ理由から、手ごろなねだんのバラエティに富んだ既製品がつねに存在しつづけてきた (写真75)。

ところでこうしたくつろぎ着としてのキモノ型ドレッシング・ガウンの効用については、第一次大戦前後の代表的大衆むけ裁縫指導書であった *<Cassell's Penny Book of Dressmaking>* のなかで、つぎのようにのべられている。「疲れた手足を休めるのには、かるくひと風呂浴びたあと、堅いツイードの衣服のかわりに、うす地のやわらかい *rest-gown* をゆるくからだにまとうのにまさるものはない」。そしてキモノのかたちで作られた参考例について説明し、前打ちあわせの形式が、この種の *easy wear* にとってもっとも重要な点であるとむすんでいる [CASSELL & Co. 1912: 51-53]。



写真75 1911年の部屋着



写真76 Whistler による
“孔雀の国の姫君”

後述するように、西欧人の生活からとらえたいくつかの構造的な問題点はあったにせよ、結局この系統のキモノ、ないしキモノ風スタイルが、西欧人の日常のなかにもっとも浸透し、それは現在に及ぶまで変わっていない。

一方、おしゃれ着としてのキモノを代表するのは、第一次大戦以前の時代のティー・ガウンではないだろうか。写真76はWhistlerのよく知られた作品であるが、19世紀末から今世紀初めにかけて、このようなドラマチックなキモノを描いた作品が相当数のこされていいる。ところで、これらの衣裳が日本から、ときには由緒ある旧家のふるい葛籠の底からもたらされたものであろうことはわかるとしても、それが西欧人の生活のなかでは、衣生活のどんな部分を占めていたのか、ほとんど

顧慮されることがなかった。せいぜい、絵のモデルとしての“仮装”でもあろうかといった、漠然とした推測のあるていどだったろう。じつのところ、仮装は西欧社会の衣服デザインングにとって、小さくない影響力をもっていたことはたしかであって、fancy ball のさかんだった第一次大戦前のこのよき時代には、数多くの fancy costume に関する手引書が刊行され、そのなかのいくつかのものが、日本のキモノについてのデザインや着こなしの具体的な解説を行なっている⁴⁵⁾。

45) このことについては、下記文献中の指摘箇所を参照されたい。

SCHILD, Marie (ed.)

1881 Characters suitable for Fancy Costume Balls. (London) Samuel Miller.

p. 31: Fitzo, a Japanese juggler's costume.

1914 Schild's Fancy Costumes... (London) M. Miller.

p. 62: The Geisha.

BAYARD, Marie

1887 Weldon's Practical Fancy Dress. (London) Weldon & Co.

p. 92, 93: Japanese Lady.

HOLT, Ardern

1896 Fancy Dresses described; or, what to wear at Fancy Balls. (London)

Debenham & Freebody.

p. 140, Fig. 26: Japan.

1898 Gentlemen's Fancy Dress: how to choose it. (London) Edward Arnold.

p. 38: Japanese.

しかし Whistler や Manet のえがいたキモノは、それが生活化されうるような環境に恵まれていた。それは19世紀の半ば以後イギリスで社会慣習化し、大陸にも、またアメリカにも普及した afternoon tea party という場である。

アフタヌーン・ティ・パーティについて、ここで詳細な説明をする余裕はないのであるが、つぎのことは指摘しておかねばならない。それはその集いの雰囲気、ぜいたくでしかもカジュアルな、そしてとりわけ Lady たちの話題と趣味性に支配されていたという事実である。アフタヌーン・ティ・パーティは、原則として午後5時から7時ごろまでのあいだのことであるので、five o'clock tea とよばれるし、drawing room をつかうのがふつうであるから、やや古いいかたとしては drawing room tea とよばれることもある。このさいごの呼称は、ビクトリア朝の女王への謁見形式に Drawing-rooms とよばれるものがあり、大衆のあいだ、とくに地方の人々からは、ドローイング・ルーム・ティといえばこの royal acceptance とまぎれ、なにか非常に華やかな、あるいは高貴なものででもあるかのようけとられていたということである [ARMSTRONG 1889: 111]。しかし、実際貴族の私邸でひらかれる私的なドローイング・ルーム・ティは、バッキンガムから退出したばかりのその家の hostess が、宮廷衣裳の最新のファッションを客たちに観賞させる機会でもあったので [ARMSTRONG 1889: 112-115; A MEMBER OF THE ARISTOCRACY 1902: 150]、ドローイング・ルーム・ティとよばれる場合は、一般のファイブ・オクロック・ティとはニュアンスのちがいがあったかもしれない。

19世紀末から第一次大戦以前のイギリスの社交界ではまた、“At Home”というさりげないいいかたが、ファイブ・オクロック・ティーのレセプションをさすのに好んで用いられた。これは文字どおり、その家の女主人—hostess が、一週間のうちのきまった何日かの午後を在宅して客をもてなすという意味である。

アフタヌーン・ティは、このようにおもに女性たちによって構成される女性的感覚の集いであったから、男性客の閉口するような俗っぽいゴシップ・パーティでもあったし [AU FAIT 1896: 138; KLINKMANN 1903: 17]、また華やかなおしゃれの集いでもあった。

かつ、この集いはほんらい非公式で、親しい人々だけの内輪の団楽の場である。し

PEEL, C. S. Mrs.

1905 Design for Fancy Dresses. (London) Beeton & Co., Ltd.,
p. 8: Chrysanthemum, p. 1: The Geisha, or Japanese Girl.

DABNEY, Edith and C. M. WISE

1930 A book of Dramatic Costume. (New York) F. S. Crofts & Co.
p. 145-148: Japan.

たがって服装についても、イブニング・ドレスとはちがい窮屈な約束ごとからは自由な [HOLT 1901: 298], 冒険と個性の主張がゆるされる場であった——「five o'clock tea は、最新の衣裳を着てゆくすばらしい機会である」[DAVIS 1881: 35], 「アフタヌーン・ティや At Home には、あなたはあなたの持っているなかで、いちばん美しい frock と帽子とを身につけるのです」[ONE OF THE ARISTOCRACY 1902: 28]。そしてそういう衣裳を代表するものが、ティー・ガウンなのであった。

ティー・ガウンがイブニング・ドレスと区別される性格のちがいについては、まえに引用した文献に、さらにつぎのようにある。すなわち、「ティー・ガウンは、想像力と芸術的趣味性をより生かすことが可能である——その選択の基準は、あるていどまではイブニング・ドレスのそれと変るところはないが、ティー・ガウンは濃厚な色調の固めの素材であるため、アクセサリ類との調和がむずかしく、金もかかる。イブニング・ドレスは灯火の下であるので、うすい色調でもうつくしいが——」[*The Lady at Home and Abroad* 1898: 186, 187]。

ティー・ガウンのすがたをもっとも魅力的にうたいあげたのは、Pritchard であろ

う。かの女はその〈The Cult of Chiffon〉のなかで、ティー・ガウンのために十数頁を割いているが、ティー・ガウンは女性ドレスのもっともよいもののなかの理想であり、午後5時の室内の“garment of poetical beauty”である、とまで讃えている。

そのうえで Pritchard は、ティー・ガウンはほんらい、日本——あの美と色彩の絢爛たる国——からもたらされたのではあるまいかと推測し、現在のファッションが、とりわけそのかたちと色調の魅力から、日本の芸術にあこがれていることを指摘するのである [PRITCHARD 1902: 23, 24]。

Pritchard がここでいっているのは、ティー・ガウンという衣服形式の生まれたことにたいする日本の芸術の影響



写真77 “The tea-gown Japanese”
Pritchard による

であると思われ、かならずしも、キモノそのものがティー・ガウンに直結しているといっているにはうけとれない。したがって“*The tea-gown Japanese*”として掲げた挿絵も、われわれにはとくにキモノ的にはみえない(写真77)。

これにたいして、〈*Oxford English Dictionary*〉(1933)の *kimono* 項の引用する〈*Daily Chronicle* 1902. 1.11, 8/3〉には、「柔かいスカートの外に絹のキモノをまとるのが、*new-looking tea gown* となっている」とあって、この場合はまさに *Whistler* や *Manet* のえがいた情景を髣髴させる。

おそらく、“*original kimono*”, あるいは“*genuine kimono*”という意識や、まして忠誠心が、ファイブ・オクロック・ティーをたのしむ女性たちにそれほどつよく存在していたわけではあるまい。17世紀以降、とくにロンドンの社交世界においては、*tea-drinking* は、オリエンタリズムの香りをたちのぼらせているスノビズムとイマジネーションの場でもありつづけた。したがって、ティー・ガウンとしてキモノ、ないしキモノ風のものがうけいれられた理由は、オリエンタルで *something curious* であり、さらに好みのうるさい女性たちの細部的穿鑿の批評に耐えうるようなものであることによって、条件の過半がみたされるためである。しかし他方、キモノのほんらいの形態が、ティー・ガウンとしての要請に比較的合致したという事実もみおとせない。

さてこのようなティー・ガウンは、第一次大戦以後、徐々にファッションの表舞台から後退してゆく。この状況はまず、ティー・ガウンの着用される機会が、*At Home* やアフタヌーン・ティといった習慣の衰えとともに失われたということからもつくられた⁴⁶⁾。しかしここではとくに、ティー・ガウンのスタイルそのものの問題をとりあげよう。

ティー・ガウンはその名の示すとおり、ウエストの比較的ゆるく裾を曳きぎみにしたガウン型式が、一般的なスタイルである。しかし1915年にかかれたエチケツト・ブックのあるものには、現在はこういうガウン・スタイルのアフタヌーン・クローズは、好まれていないとのべられている [*SEYMOUR* 1915: 39]。西欧でのその時代の身近な伝統からいえば、ウエストのゆるいガウン形式の対極にあるのは *princess dress* で

46) 女性の社会的進出の機会が多くなるにつれ、訪れるかどうかかわからない客たちを待って着飾って家にいるといったことを好む女性は、少なくなったのである [*BURLEIGH* 1925: 28-32]。また若い客たちや男性の人気をかちえるために、軽いアルコールもてなしのうちに加え、カクテル・パーティに近づくことによって、かつての女性たちの世界という雰囲気を持ったこと [*FORESTER* 1935: 36; *TROUBRIDGE* 1939: 93-99], *tea* にダンスを伴ったパーティが好まれるようになったこと [*POST* 1931: 64] なども、古風なファイブ・オクロック・ティが時代遅れになった理由である。

あって、一方でティー・ガウンの魅力を唱える人であっても、肉体に完璧にフィットしたプリンセス・ドレスの高貴な美しさには賛美を惜しんでいないし [OLIPHANT 1878: 69, 70; THE LOUNGER IN SOCIETY 1881: 178], そのかたちはフォーマル・イブニングの装いの基準でもあった。しかしこの時代に、ガウン形式の午後の装いにとってかわったのは、女性服装の伝統のうえからいえばガウン形式よりもむしろ新参者であるといえる *tailored suit* であり、*street wear* だった。

すでに1897年に、「2時から6時までの訪問では、男性は必ずフロック・コートを、そして女性は *stylish walking toilette* を」 [What to Do 1897: 59] とのすすめがみられる。たしかにティー・ガウンは、ドローイング・ルームで客を待つ側の *hostess wear* にこそよりふさわしいもののようなではあるが、*afternoon calling* の女性が徒歩でくるといふことなど考えられもしなかった19世紀には、主人側と来客たちとの装いに、それほどのがちをうむ理由は、とくになかったのである。午後の集いにストリート・ウェアであるテーラード・スーツを愛好したのは、まずアメリカ女性であった [WINTERBURN 1914b: 193-200; FORESTER 1935: 35]。しかし Forester は1925年の著書のなかでは、フランスの中流階級の女性はもっとも最新のモードを *street outfit* のなかでえらんでいると指摘し、ここでもすでに、室内でのゆったりと裾をひいての装いが、女性のおしゃれの主要な関心ではなくなったことを暗示しているのである。

前述のごとく、ティー・ガウンという世界に展開したキモノは、自由で大胆な変形を蒙っていることがふつうであったろうが、その原形を辿ると、どちらかといえば高級な工芸染織品が中心であったかと推測される。そしてその西欧の地での開花は、華やかではあったが比較的短期間で、バス・ローブやベッドルーム・ガーメントのような永続性のある生活化はついにみられなかった。

ところで、結果的にはどのような具体的な結果をうみだすにせよ、西欧人がキモノを生活的に受容する場合、かれらはいったいどのようなものをキモノと理解し、かつまたどのような方向にその *adaptation* をはかったであろうか。

アダプテーションの問題は、製作する者のデザイン・イメージによって限界のない多様性をもつのであるから、それらの方向を一般的に概括することは、不可能といってよいだろう。したがって、ここではその代表的ないくつかの例をとりあげて、全体のまとめの参考とするにとどめる。

A) Guerre, Lavigne の〈*Dress Cutting*〉(1914) は、ティー・ガウンの華やかな

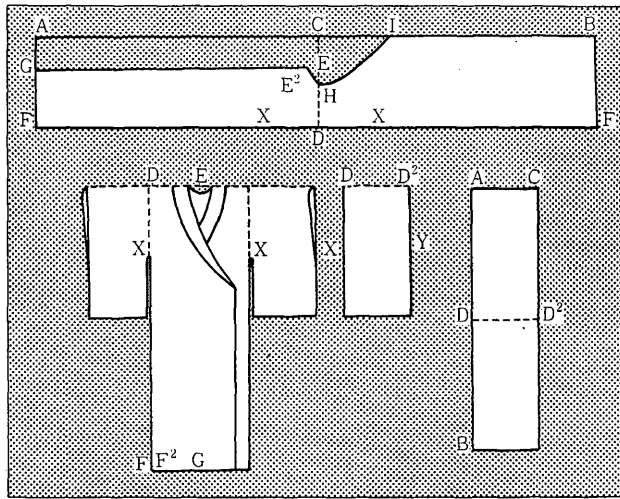


図1 [GUERRE-LAVIGNE 1914: 123] 参照

時代に、エキゾチックなイメージにもとづいた、特色あるデザインを提供したことで知られている。その一部に“Genuine Japanese Kimono”（本物の日本のキモノ）として、図1に示す diagram を伴った製作の解説がある。キモノとキモノ・スタイルのドレスリング・ガウン、あるいはネグリジェとを区別して考えることは、すくなくとも専門家のあいだでは、すでにこの時代にはふつうのことであって、著者はここでは明瞭に、本物の日本のキモノとことわっている。その本物のキモノの製図を一見してなによりも奇妙なのは、衿が曲線で、shawl collar に裁ってある点であろう。ショールカラーはキモノのような打合わせの surplice closing にともなうのがふつうであるためだともおもえるし、加えて西欧のドレスメーカーの眼から見ると、いかにも不器用げで理解にくるしむ三つ衿を、彼らなりに“解釈”したものであろう。

本物のキモノを製作しようという意図は、すくなくともイギリスのドレスメーカー・ブックには、他にほとんど例がない。しかしファンシー・コスチュームや舞台用衣裳の手引書に、乏しいながら例がある。そしてそれらのえりのかたちは、ショール・カラー、あるいはショール・カラー風であることが多い（写真78）。

B) Harmuth 編〈Fairchild’s Illustrated Women’s Wear Code〉(1921) 本書は、アメリカの有力なファッション情報機関フェアチャイルド社が、商品の通信連絡のために45,000の衣服関係概念ないしフレーズをコード化したものである。その中に



写真78 Peel による“芸者”



写真79 Jackson による Yum-Yum
“Mikado” のためのデザイン

2,200件の衣服全体、または細部のイラストがあって、その呼称とコードがついている。これらのイラストのうちには歴史的服装もあるが、この企画の目的からして、きわめて up-to-date な、実用性のあるスタイルが中心になっていると考えてよい。

さてこのスタイルのなかには、キモノに関連をもつものがいくつかふくまれている。

i) Kimono: types of negligees 項 [p. 331] ネグリジェは前述のドレッシング・ガウンとほぼ重なる概念であった。肩から袖にかけての構造、帯の高さとそれにとまなうヒップのふくらみに関しては、2章の735頁、736頁で触れたのとおなじ状態にとらえられている。加えて、本図では裾に一種のフリンジをもつ。おそらく、襷（ふき）の誤認であろう。しかし裾のフリンジは、どちらかといえば、本物のキモノをねらった西欧人のモノ・デザインに見かける機会が比較的多い。写真79もその一例である。

ii) Nightgown 項 [p. 368, 369] キモノがナイトガウンとして愛用されていたと

いう事実を前提に、そのスタイルを検討する。本書には35のスタイルがあげられ、その中には *Nightgown-kimono sleeves* [p. 368] とよんでいるものもある。重要なことは、これらのうちに前あきの形式のものが1点もないことである。*two-piece pajama* 項の *upper part* には、キモノ風をふくめ前あき形式が多いのであるから、ガウンで前あきを嫌うのは、裾が割れることに問題があるものと解釈せざるをえない。

なお打合わせの裾に関連していえば、写真80の T. Marjollet によってデザインされたマダム・バタフライの衣裳は、裾が両前とも曲線に *cut-away* されている。ワンピース形式の場合、裾のあしへの絡まりを避けるためになんらかの方法で裾の部分をとりのぞくことは、最近のキモノ・ドレスでも一般にみられるところである(写真81)。しかしむしろ、とくに戦後の西欧化したキモノは、*Happi coat* に代表されるようなショート・ジャケット化の傾向がいちじるしい。



写真80 Marjollet による蝶々夫人の衣裳



写真81 前裾を *cut-away* した
キモノ・ドレスの例

C) 第2次大戦後、若い世代への国際理解を目的とする活動の一環として、簡単な舞台衣裳としての民族服の特色を解説した〈Let's Dress Up〉のなかで、キモノの色調がつぎのようにのべられている。「キモノ・ドレッシング・ガウンという西欧のファッションがあるために、あまりに多くの improvisation が日本のキモノについては行なわれている。しかしこの種のもは、大人の女性がけっして身につけるべきではない。なぜならそれらの色はじつに悪いし、形も概してよくない—bright colour は、日本では 'bad' women だけが着ているのである」 [Let's Dress Up! 1949: 44]。

西欧の観察者は、日本人の着ているキモノの色調の sombre さをくりかえし指摘してきているのであるが⁴⁷⁾、一方で西欧むけの輸出マーケットにみられるキモノの bright colour にも馴れていた⁴⁸⁾。そして後者のたぐいの桜の花を機械刺繡したようなキモノが、西欧の衣料小売店でも安ものとして扱われている現実も [KNEELAND 1925: 49] 知っていたはずである。そのためこのような低調な西欧の大衆の表皮的な趣味に迎合したデザインが、和服の芸術性を毒してゆくのではないか [RITTNER 1904: 47] という懸念の表明もあったのである。

しかしこの問題は二者択一のような単純なものではない。キモノの地味さがかならずしも本物のキモノを代表するともいえないし、刺繡や草花の自然表現と結合した bright キモノが、洗練の可能性をもたないとはいきれないからである。

2) いわゆるキモノ・スリーブの展開

kimono sleeve または magyar sleeve とは、身頃と袖とがワン・ピース構造、つまり袖が身頃から裁ちだしになっているスタイルである (写真82)。表3-1にあらわれたとおり、アメリカではマジャー・スリーブといういいかたはせず、フランスも le manche au kimono である。イギリス、アメリカでは、ほかにもいくつかの呼称をもつが、つぎの点は注意を要する。ほんらいの日本のきものは、キモノ・スリーブではなくドロップ・ショルダーというべきであるという点。また、キモノ・スリーブを、日本のきものの特異なもとをさしている場合もあるという点である [GORDON 1903: 90; HARMUTH (ed.) 1921: 339]⁴⁹⁾⁵⁰⁾。

47) 脚柱24)参照。

48) [HOLT 1896: 140]。

49) 後者の例では、たもと風の袖を Japanese kimono sleeve, cut-in-one の袖を kimono arm hole [HARMUTH (ed.) 1921: 337] とよびわけている。

50) わが国では、キモノ・スリーブをフレンチ・スリーブとよぶことがあるが、これはわが国だけの習慣である。英語圏でフレンチ・スリーブといえば、タイト・フィットした袖をさす。

表3-1 英国図書館所蔵の1912年以降刊行の, kimono-sleeve もしくは magyar-sleeve に関し言及したドレスメーカー・ブックについての参照事項

刊行年	資料 記号	KIMONO	MAGYAR	OWC	刊行年	資料 記号	KIMONO	MAGYAR	OWC
1912	e97	*		ES	1930	D135	*		ES
1912	e173	*		ES	1930	e30	*		NK
1912	e228		*	ES	1931	e55		*	OI
1912	D56		*	ES	1931	e58		*	ES
1913	e212	*		NC	1932	e29	*		NK
1913	e46		*	ES	1932	e65		*	ES
1914	e175	*		ES	1932	e67		*	ES
1914	e169	*	*	ES	1932	e71	*		NK
1914	e90-D3		*	ES	1932	e34	*		ES
1914	e90-E1		*	ES	1933	e70	*		ES
1916	D52		*	ES	1933	e86	*	*	ES
1916	D76	*		NK	1934	e53	*		NK
1917	e167, D72	*		ES	1934	e69	*		ES
1917	D66		*	ES	1935	e56	*		NK
1919	D67		*	ES	1935	e59		*	ES
1919	e90-D4		*	ES	1935	f 12	(*)		NK
1919	e90-E2		*	ES	1936	D171		*	ES
1920	e284		*	ES	1936	D197	*		ES
1921	e284 bis1		*	ES	1936	D199		*	ES
1921	e215	*		NK	1937	D183		*	ES
1921	e226	*	*	ES	1937	D185	*	*	ES
1922	e224	*		ES	1937	D191	*	*	ES
1922	e231	*	*	ES	1937	D134		*	ES
1923	D59		*	ES	1937	D204		*	ES
1923	e284 bis3		*	ES	1938	D174	*		NK
1924	e241	*		NK	1938	D178	*		NK
1924	D6		*	ES	1938	D182	*		ES
1924	D61		*	ES	1939	e12	*		OI
1924	D65	*		ES	1939	D125		*	ES
1924	e284 bis4		*	ES	1939	D168	*		ES
1925	e176	*		NK	1939	D189	*		ES
1925	e230		*	ES	1940	D176	*		NK
1925	e284 bis5		*	ES	1942	e22		*	ES
1926	D110		*	ES	1943	e8	*		NK
1927	D118	*	*	ES	1943	e11		*	ES
1927	D126		*	ES	1944	e289		*	FX
1927	D152	*		NK	1944	e3		*	OZ
1927	e284 bis6		*	NK	1944	e5	*		NK
1928	e57	*		ES	1944	D143	*		ES
1928	D87	*		NK	1949	f 14	*		NK
1928	D111	*		NK	1949	e153	*		NK
1928	D118	*		ES	1950	D235	*		FX
1928	D131	*		NK	1951	f 17	*		NK
1928	D133	*	*	NK	1951	D206		*	ES
1929	D105		*	ES	1952	D229		*	ES
1929	D108	*		NK	1952	D243		*	ES

1953	D211	*	*	ES	1964	e276	*	ES
1953	D213	*		ES	1964	D144	*	ES
1953	D219	*		NK	1964	D193	*	NK
1953	D230		*	ES	1965	f4	*	NK
1954	D232	*		ES	1965	e244	*	ES
1955	D228	*		ES	1966	D96	*	ES
1955	D231	*		ES	1967	D80	*	ES
1956	e180		*	ES	1968	f19	*	ES
1956	e198		*	FX	1968	e287	*	ES
1957	e202	*		ES	1968	D147	*	ES
1958	e264	*		ES	1972	f1	*	ES
1958	e275		*	ES	1972	f2	*	NK
1959	e165	*		ES	1972	f8	*	NK
1959	e263	*		ES	1973	f7	*	NK
1960	e239	*	*	ES	1975	f20	*	ES
1960	e283		*	ES	1975	f16	*	NK
1960	e286		*	ES	1975	f9	*	ES
1961	e184	*		NK	1976	f21	*	ES
1961	D248	*		ES	1976	f6	*	ES
1962	e277	*		ES	1978	f3	*	ES
1962	D207	*		ES	1978	f15	*	ES
1963	e279		*	ES				

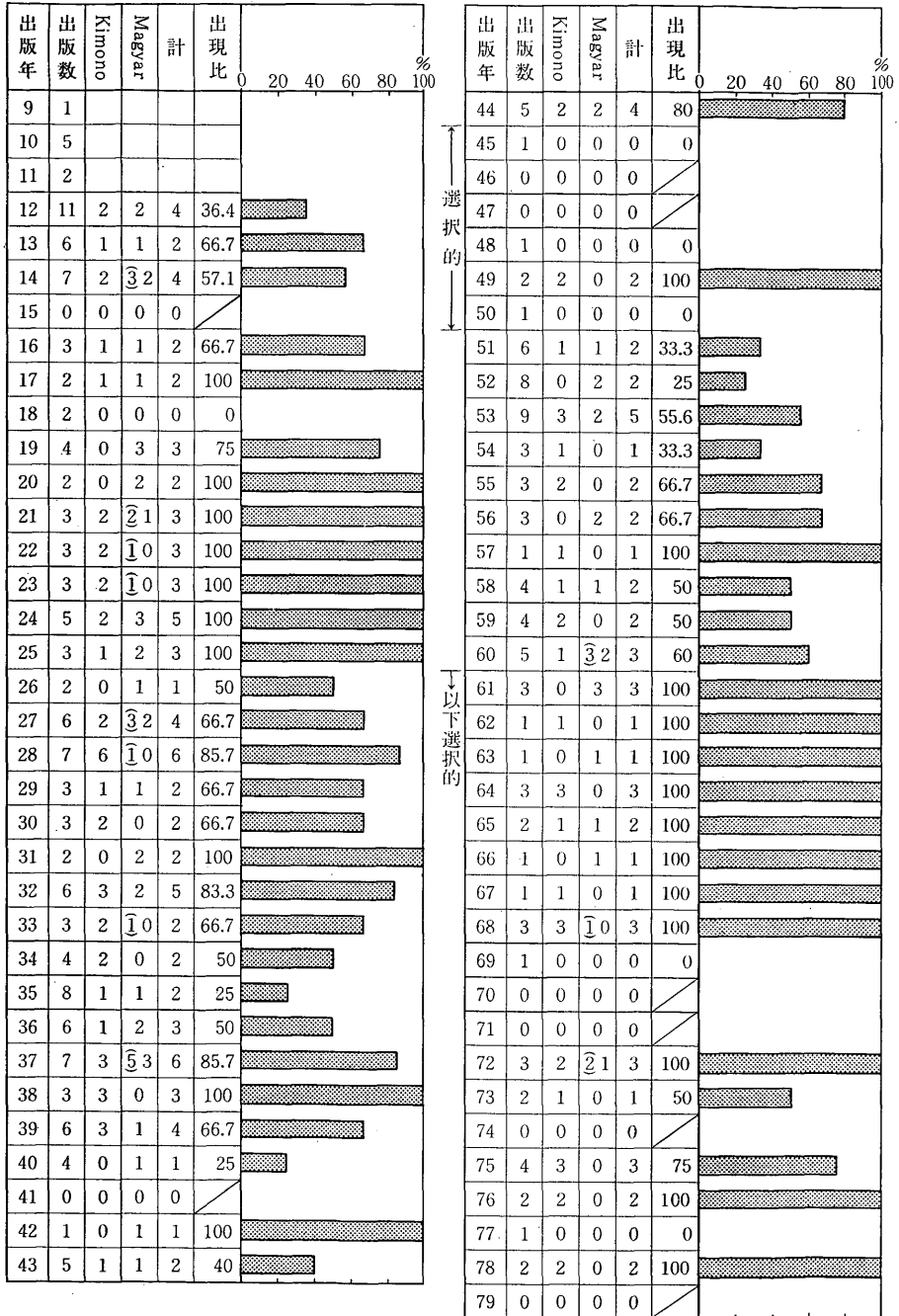
(注) 資料記号は4章-1の文献表と対照のためのもので、個人的なものである。

* 依拠資料については脚柱51) (p. 788) 参照。



写真82 現代のキモノ・スリーブの例

表3-2 英国図書館所蔵の1909年以降刊行の、全ドレスメーカーング・ブック。およびそのうち、kimono-sleeve, magyar-sleeve への言及のあるものの実数と、全体との比率



キモノ・スリーブがどのていど日本のきもの影響のもとにあったかについては議論の余地があるにせよ、キモノの名で呼び慣らわされたこのスタイルが今世紀の西欧服装の展開に関連してもつ意味は、小さくないものがある。この点について、1885年以降1979年までに刊行され英国図書館に所蔵されているイギリスのドレスメーカー・ブック約400冊の内容を分析して、以下にのべる結果を得た⁵¹⁾。

表3-2は、キモノあるいはマジヤール・スリーブを章または項目タイトル中にふくむか巻末のインデックスに挙げている本と、ドレスメーカー・ブック全体の比率である。

キモノ・スリーブ風の袖構造は、もともと袖つけとしてはもっとも素朴な方法といえる。イギリスのドレスメーカー・ブックの中では、1912年に Reeve が〈The Element of Dress Pattern-Making Magyar Dress-Cutting……〉 [REEVE 1912a] を著したのがキモノ・スリーブの最初の紹介であろうが⁵²⁾、その翌年に Riley は、このタイプはプリミティブで Old pattern revived である [RILEY 1913: 46] といっている。

いわばキモノ・スリーブは時を得て——なんらかの理由によって再発見され、にわかに展開の方向を辿ることになった、といえる。そこでその展開を、まず技術的方面から要約してみよう。

キモノ・スリーブのもっとも単純な形式は、図2-A, B に示される。どちらもショルダー・シームをもたない。これらの形式はのちに straight magyar [KELLAND 1925: 31], original magyar [MASON 1937: 90], あるいは classic kimono [THE BUTTERICK PUBLISHING COMPANY 1975: 278] とよばれることになる。キモノ・スリーブはこの初期の段階では、簡単にできるということがなによりもの魅力であった。肩がわになっているため縫う箇所もすくなく、肩さがりのない場合は布地も無駄がない。ただし、とくにBの場合脇下にたるみを生ずることになり、Aは腕をあげるのが不自由である。全体としてゆるい仕立ての、かつ袖の短いナイト・ウェアとしてキモノ・スリーブが利用されているかぎりにはこれらの欠点はさほど問題ではないが、

51) イギリスの納本制度は1957年に一部改正されたが、1902年制定の原則と収書方法のうえでは大きな変更はなく、他の欧米諸国やわが国とほぼ同様である。

今回の調査で網羅的にとりあげたのは、1910～1945年、1951～1960年である。これをのぞいた時期については、無作為に所蔵冊数のうちの60～80%をとりだし、分析の対象とした。なお、本図書館は第2次大戦中に爆撃の被害をうけているため、納本された本のすべてが今日のこざれているわけではなく、網羅的という意味は、現在所蔵されているものについてである。

52) OED では、1911年4月5日の《Daily Colonist》の、マジヤール・スリーブをもつイブニング・ガウンの例を引いている。フランスでは、1909年の Napolitano, I. による〈Le secret de la coupe〉あたりが、その早い例であろう。

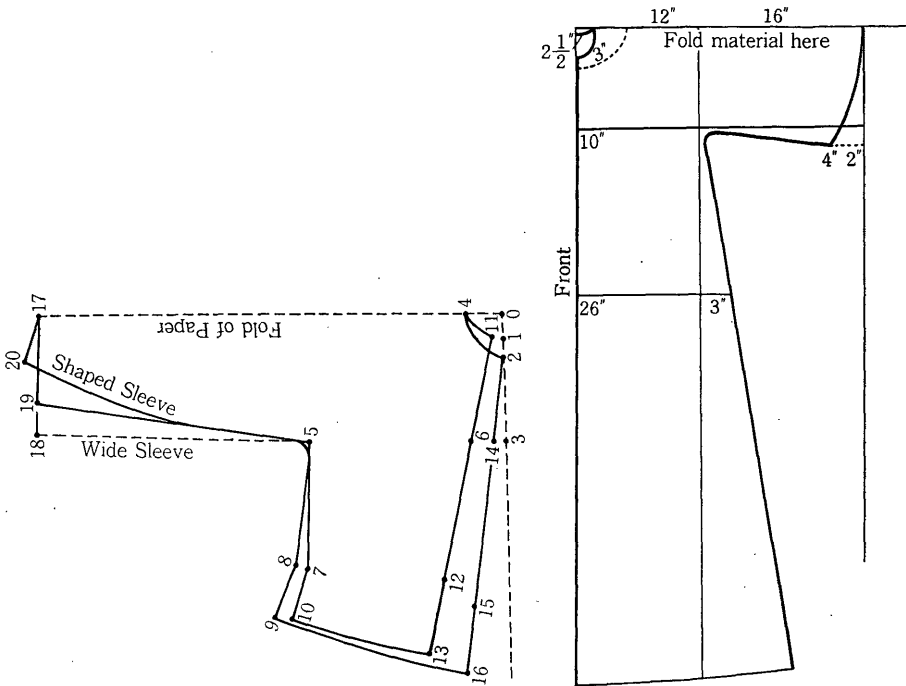


図2-A [Fox 1916: 10] 参照

図2-B [REEVE 1912a: 30] 参照

day-wear の領域に応用範囲がひろがるにつれ欠点の指摘も多くなり [BALDT 1917: 29; RINGO 1925: 24; POOLE 1927: 219], その解決の方策も工夫された。グラスゴウの著名な縫製教育者だった Joseph Fox がドレスメーカー・スクールで使用した1910年から1921年にかけてのテキストが、英国図書館に12冊のこされている。はじめてマジャー・スリーブのあらわれるのは1914年の2冊であるが、そのうち〈Manual of Coat Cutting〉の場合は脇下が round-off されているのみで、オリジナル・マジャーの形式である [Fox 1914a: 9]。一方、〈Manual of Dresscutting for Continuation Schools〉のなかの Magyar Blouse with long sleeve については、脇下にまちをいれること、および前後身幅に差をつけることによって、あるていど不必要なシワを除去する方法を示唆している [Fox 1914b: 10, 11]。彼はまたおなじこの箇所、脇下からネックにかけてカットをいれる可能性を示し、1919年版ではその具体的な展開図を掲げている。いうまでもなく、この方法は raglan cut であるはずなのだが、アームホール・シームをもたずにあるていだからだに添ったボディスをつくるという目的においてキモノ・スリーブをとらえ、さまざまな方法を試みていることがわかる。

Fox は1927年の〈Manual of Dresscutting〉において、はじめてショルダー・シームをもつマジャール・ジャンパーを紹介している [Fox 1927: 3]。キモノ・スリーブが前後身頃にわかれたということは、たしかに大きな展開であった。1925年に、Kelby-Kelland システムの創始者 Kelland は、肩にシームのないものをストレート・マジャールとよぶといったあと、この方法はナイト・ドレスには適しているがドレスとしては満足な結果がえられない、なぜなら肩と背に布地があまりすぎて、“bulky で ungraceful な” 外観になるといっている [KELLAND 1925]。

Kelland の指摘のように、ショルダー・シームによって、いせやのぼしの方法による肩の部分のフィット性も格段によくなる。そのショルダー・シームの位置、またくせとりの方法が、'20年代末から'30年代のはじめにかけていくつかあらわれる [BROWN 1927: 15, 138; BALDT and HARKNESS 1931: 112; MIALL 1933: 59]。

フィット性という点ではもっとも一般的な手段であるダーツの応用も、Baldt [1935: 92] 以後散見されるが、キモノ・ウエストにダーツをいれる方法はあまりたくさん例がない。

1930年代のドレスメーカー・ブックでは、キモノ・スリーブはもっぱらポータティなショート・スリーブをもっとも簡単に製作する方法として紹介され、アンダーアーム・シームのつれにたいする補強法や、襷のいれかたについての部分縫製の技術が、初心者むき風にくりかえし説かれる。この傾向は戦後もひきつがれるのであるが、たとえば、アンダーアーム・シームの縫代を割り、そこにバイヤス・テープをステッチし、しかもカーブの鋭い部分はテープを一度ねじるといった方法 [ELLIOT 1956: 86, etc.] は、わが国では一般に行なわれていないし、そこまで補強して腋にフィットさせる必要も理解されない。

製図の段階でボディにたいする袖の傾斜角を少なくする、つまり袖山を高くすることによりからだによくフィットしたドレスはできるが、運動量はなくなる。この矛盾はどんな袖の構造にもあるわけだが、キモノ・スリーブの場合構造が単純すぎてごまかしがきかず、とくに Magyar problem とよばれて高度な研究の対象となっていた。すなわち、まえにのべたシームの補強法のようなものは、おもにパターン販売会社やミンソンの手になる“だれでもできる”ホームソーイングを対象とした入門書が主として扱うのにたいして、Poole の〈The Science of Pattern Construction for Garment Makers〉(1927)、Morris の〈Ladies' Garment Cutting and Making〉(1936)、こえて戦後の Bray による〈More Dress Pattern Designing〉(1964) などでは、キモノ・スリーブのより基本的な構造的問題を追ってきた。

上記の著書のなかで Bray は、「キモノ、あるいはマジャーは、歴史的にはもっとも古いパターンで、布地をからだの形に添わず方法としてはきわめて単純かつプリミティブな裁断法である——しかしデザインとフィットの現代的な発想のもとにキモノは多くの変態をとげて、次第に複雑な pattern となった——キモノがファッションになると、デザイナーたちは非常な熟練と、裁断とフィッティングのさまざまな問題についての高度の知識があつてのみ成功するような効果をねらうのである」[BRAY 1964: 14] と、のべている。

Magyar problem にたいする現状でのもっとも妥当な答えは、おそらく裁断的にはサイド・ピースの適切な利用とシーム線の移動——といえるだろうか。

キモノ・スリーブの展開に伴ったこれらの技巧は、Magyar problem——ほんらいルース構造とむすびついていなければならないキモノの肩・袖の印象——の視覚的效果を失うことなしに最大限のフィット性を与える、という問題の解決を目的としてきた。

キモノ・スリーブの視覚的特色は、いうまでもなくセットイン構造をもたない点である。この点においては、キモノ・スリーブはラグランにちかい印象をあたえることになる。この、キモノ、ラグランに共通する印象については、じつはつぎのような一見対立する見解がある。Poole は、セットインスリーブがおおきな体格の人に適するのにたいして、キモノまたはラグランは肩幅を広くみせる効果があるという [POOLE 1927: 219]。おなじ見方は Ringo にもある [RINGO 1925: 24]。その反対に Hopkins は、丸い肩、平らな胸の人はキモノ、ラグランは似合わないといい [HOPKINS 1935: 107]、Goodman にも同じ意見がある [GOODMAN 1953: 24]。こうした意見は、いずれも経験に富んだデザイン教育者の実際の観察であろうが、この対立する意見の背後にはつぎのような共通の認識があるのではないだろうか。それはシームと袖つけ構造のないことが肉体の肩そのものを印象づける、という点である。したがって、一方ではからだのもつ自然な丸みが生かされると同時に、肩はある意味では強調され、“広く見える”という認識もまちがいはいえない。

キモノ・スリーブの単純な視覚的認識において、シーム線をもたないことは、セットイン構造によるふくらみを欠くこととならんで、重要な点である。まえにふれたように、キモノ・スリーブとラグランとは視覚効果上性格のちかいものとして扱われるが [BROWN 1927: 236; BALDT 1935: 8]、なんの区画感もないという点では、キモノ・スリーブの方が一段と徹底している。そもそも今世紀の衣服デザインの流れの中には、シームをできるだけ減らそうという傾向がみとめられる。複雑な切り換えをむしろ誇りぎみにデザイン線として生かしてきた19世紀までと較べると、ひとつの方

向転換があったとさえ印象づけられる。したがって、技術的展開でのべたサイドピースを使つてのフィット性獲得の方法でも、パネルの幅ができるだけ狭い方がよいし、アンダーアーム・パネルだけの方が見えにくいのでよりのぞましいという意見 [HANNA 1922: 86] や、前身頃だけを裁ちだしにするいわゆるセットイン・キモノ・スリーブの方法 [AMERICAN-MITCHEL FASHION PUBLISHERS 1938: 46-47] にも、そういう傾向のあらわれがみとめられる⁵³⁾。

キモノ・スリーブの視覚的効果ということを考えるとき、あわせて、そのドレープ性をとりあげなければならない。この点は、ほんらいからだにフィットしていないことから生ずる欠点とみなされ⁵⁴⁾、いわゆる Magyar problem の中心課題であったことは、すでにのべた。しかし一方、むしろそのドレープ性を肯定的にとらえる見方も育ちつつはあった。たとえば、1927年にあの精密な立体幾何学的製図論を著した Poole が、キモノ・スリーブにおけるヒダの扱いのむずかしさをのべたあと、「ともあれ、人はだんだんとこのようなヒダに眼が馴れる。そしてそれがないもの足りないようにさえ感じる」 [POOLE 1927: 219] とのべている。ここにもまた、いわば価値観の転換のいとぐちがある。しかしこうした認識は、当時のドレス・デザインの潮流を考えればとくに変わった見方ではない。2年後の1927年に Baldt が、その翌年に Eddy が direct modelling によるキモノ・スリーブのデザインに言及した著書を公けにするなど、1910年代以降の draping effect をドレスに積極的に生かそうとするアイデアは、ファッション・デザインングの主流のひとつとなりつつあったのである (写真83)。

magyar problem は、キモノ・スリーブのフィット性の問題だった。しかし、もしキモノ・スリーブがドレーピング・エフェクトにねらいを絞るとなると、fitted dress とはべつの価値基準を目的とすることになり、本章の前半でのべた技術的發展とはべつのかたちで magyar problem は解決するというより、そのような問題は存在しないといえる。こうした方向でのキモノ・スリーブ系スタイルが、dolman

53) 袖付線がないという点では、yoke sleeve が似た印象をもっている。また縫製が容易という点でもキモノ・スリーブに共通し、キモノ・スリーブが人気を得るまえには、ホームソーイングとしてよるこばれたらしい。とくにショルダー・シームをもたない American yoke は、Browne の1905年の著書では Shirts blouse のなかにふくまれているが、1908年の再版では、独立の一項目に昇格している。

54) 「ショルダー・シームのないストレイト・マジャールは、優雅ではない」 [KELLAND 1925: 31], 「ショルダー・シームのない pattern は形をもたず、like-nothing-on-earth-appearance」 [MIALL 1933: 59]。他に、「マジャールでは neat なドレスはつくれない」 [RICHARD 1937: 79] とか、キモノはラグランほど着心地のよいものではない、といった意見もこの点に触れているとおもえる。

sleeveであり、drop shoulder である。

ドルマン・スリーブがキモノ系スリーブの中で重く見られるようになり、あるいはキモノ・スリーブと同一視されるようになったのは、第二次大戦後である [JAFFE and RELIS 1973: 30; MELLIAR 1968: 44-44; NAYLOR 1966: 85]。また、ドロップ・ショルダ―への言及がドレスメーカー・ブックにおいてにわかになくなるのは、1960年代はじめ以後のことであるが、この傾向は '70年代～'80年代のbig dress につながるものであろう。

キモノ・スリーブは、キモノのもつ部分的特色を一種の誤解にもとづいて移植したスタイル、ということになる。その性格を、Parker は“soft careless elegance”と評した [PARKER & SETON 1951: 24]。キモノ・スリーブの流行期を表3-2、その他二、三の言及によってみると⁵⁵⁾、ほぼシリンダー・シルエットの流行期に重なる。かつまたその時期は、西欧のコスチューム・デザインの伝統的理念からいえば、非形象的傾向の濃い時期ともかんがえられる。その流れにキモノ・スリーブが棹さし、その造形理念がなんらかの役割を果たしたといえるのではないだろうか⁵⁶⁾。

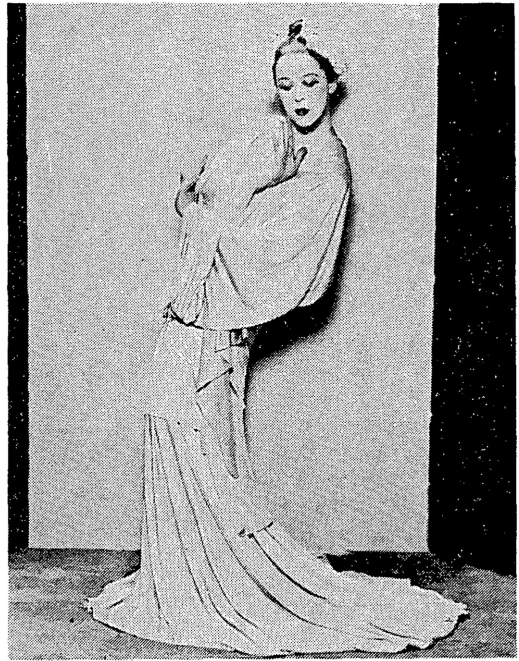


写真83 draping effect によるドレス
Murray の作品

55) ドレスメーカー・ブックにおける人気と実際のファッションとのあいだには、あるていどのズレがあると考えられる。1920年前後のキモノ、ラグランの流行については、[BANKS 1923: intro]。1950年代半ば以後については、[DELLAFERA 1952: 55; CLIFFE 1958: 43]。

56) キモノ・スリーブの人気には、ここで論じようとしているような観察的効果以外の理由はもちろんあった。Flemming は、とくにキモノ・スリーブをもった乳幼児服について、他の服の外から簡単に着せやすいこと、単純な構造なので作るのに手間がかからないこと、洗たくのしやすいこと、ギャザーがないのでアイロンがかけやすいこと、をあげている [FLEMING 1912a: 12, 13]。

キモノ・スリーブの紹介者が口をそろえていうのは、製作の容易さであり、その点にホームドレスメーカーの人気があったと思える。世紀末から第一次大戦にいたるこの時期、既製服の飛躍的發展があって、Streich は、1893年当時注文服の1/4であった既製服のシェアが、1913年には逆に4倍になったとのべている [STREIFF 1913: intro]。バラエティに富んだ既製服の普及は、ホームドレスメーカーの熱意も能力も低下させずにはおかない [GRIFFITH 1931: intro; EDDY & ELIZABETH 1932: vii-xi]。このような人々に、じぶんの手で作って着ることのできるよこびを与えたのが、キモノ・スリーブであったかと推測できる。

5章 まとめと補足

本章では、これまでの各章で紹介した、それぞれ特定の方面からのキモノ観をまとめ、三つの観点から、触れ残した問題の整理をこころみる。

1) 製作技術・素材の観点から

766頁で紹介したように、アメリカの女性 Bacon は、日本の家庭での針仕事について、外国人が嘆賞する日本のキモノの豪華な刺繍はすべて職人の仕事であり、日本の女性たちは家庭で、刺繍やアメリカ女性のような fancy work をたのしむことはほとんどない、と書いた。この点については、すこし時期はずれるが、今世紀はじめのイギリス、アメリカのドレスメーカー・ブックが証明を与えている。西欧における少女にたいする縫製教育では、雑巾刺しのかわりに、楽しみと創造性を重んじたステッチ・ワークが熱心に指導されている。イギリス、アメリカの場合、Sampler 製作の伝統も、このことにあずかって力があつたにちがいない。西欧の縫製作業においてファンシー・ニードルワークが発展した理由のひとつは、和服にくらべて布端のトリミングの丹念さが要求されたせいであろう。裁ち端のかがり、まつりといった作業は、単調で、根気だけの仕事のようにみられがちだが、むしろそれだからこそその単調さをまぎらすためのアイデアもありうるのである。肌着やナイト・ガウンの場合、トリミングはとりわけ大事な装飾性をもつから、can be trimmed most beautifully とか、can be trimmed in most original design [INNES 1913: 61, 163] といった助言がつねに行なわれる。この点は日本人もその楽しさを理解し、和服の下着の袖口などにレースのリボンをつけるといった習慣を、まもなくうけいれる。

ステッチ・ワークはもちろん、狭義のトリミングにとどまらない。小学校の裁縫教科教員を主な対象として書かれ、巻末には Instructions to H. M. Inspectors as to examination in needlework を付載している Walker の著書 [WALKER 1914] において、ナイト・ガウンやシャツの類の製作例では、徹底的にギャザー、タック、フリルがつけられ、楽しくもあつたろうが、少女たちにとっては相当な負担でもあつたのではないだろうかと思像させる。

ギャザーやフリルの重視は、もちろん裁ち端の仕末とはべつの理由があるはずである。このことと併せ考えられるのは、西欧女性の millinery への関心である。帽子への関心は、流行期とさほどでもない時期とで浅い深いのちがいはあるが、一般に製帽はドレスメーカー・ブックの一部ではないまでも、ごく近い関係で付帯するものと考え

られてきた⁵⁷⁾。Carter は、帽子製作指導の目的を少女たちに fanciful な創造の楽しみを与えるためとし、じぶんで作ったものを身につけることによって、おしゃれはすぐ手の届くところにあるのだと信じさせる刺激にもなりうるといっている。しかしそれと同時に、帽子製作は、とりわけ丸みづけの技術が必要であることに留意すべきだろう。平らな布に丸みをつけるというアイデアは、西欧衣服の基本のひとつであろうが、そのために必要な布のあつかいとニードルワーク——ギャザリング、ダーツ、のぼし、いせなどを、いわば“勝手気ままな”想像をたのしみつつ身につけられるのが、帽子製作であった [CARTER 1911: 3, 4]。

2) スタイリングの観点から

理念的認識——訪日西欧人のなかにも、キモノをドレーパリーとして見ようとする人はあった。しかしそれは、Guimet のようなやや過剰な観念の先行する知識人にかぎられる。キモノを美学的意味でのドレーパリーとしてとらえるのは、ドレスデザイナーをふくめたアーティストに多い。アメリカのデザイン教育者 Morton は、春信の版画“Two women in a spring breeze”にえがかれた風にひるがえるキモノの vigorous sweep of line のうつくしさを指摘し、一般に中国や日本の絵画におけるこのような“continuous line movement”をドレスの基本的構成要素であるリズム感のひとつとして重視している [MORTON 1964: 319]。これとほとんどおなじ見解は、これもデザイン教育者の Hillhouse にも“fruid rhythm”としてみとめられる [HILLHOUSE 1963: 46, 47] (写真25)⁵⁸⁾。

キモノにおけるこのような流線——flowing effect は、Norman の引用した McClatchie's の詩にも、つぎのように表現された。

To complete the fair picture of bright loveliness,
 Add to all this the charm of her elegant dress:
 Satin, crape, and brocade
 Here contribute their aid
 For the long flowing garments in which she's arrayed,
 Which hang loose from her shoulders, in fanciful fold,
 All embroidered with storks and plum-blossoms in gold;
 Next, a broad velvet girdle encircles her waist,

57) ドレスメーカーキング・ブックに、millinery の部分をもっているものもよく見かける。英国図書館の主題索引では、millinery は dress and dressmaking 項にふくまれる。フランス語の modiste が、製帽と婦人服製作とふたつの意味を歴史的にもっていることは、周知のことである。

58) 同様の指摘は、[BALDT 1916: 29, 46]。

Tied behind in a huge bow—her feet are encased
 In small spotless white stockings, which timidly peep
 From beneath her red *juŕpon*'s elaborate sweep;
 Add a hair-pin of tortoise-shell, dainty to see;
 On her brow place a circlet of gilt filigree.”

[NORMAN 1908: 190]

“flowing effect” とならんで、ドレーパリーの重要な美的要素であるヒダ—fold に関しても、おなじような過剰期待がキモノにかけられる。ヒダについては、とくにキモノを表現しようとした絵画に、その繁縷にすぎる描写がしばしばみとめられる（写真84, 85）⁵⁹⁾。

このようなドレーパリーとしてのキモノ観は、その点に触れる著者がたいていは注釈するように、多くは浮世絵のある特定の情景についてのイメージによるものであり、またその多くはギリシャの古典芸術にあらわれたドレーパリー表現との連想において



写真84 Robinson による

賞讃されるのである [BALDT 1916: 29; HILLHOUSE 1963: 47; MORTON 1964: 103]。したがってこうしたとらえかたのキモノは、所詮現実の、とくに昭和和服とは別のものであって、キモノのひとつの可能性を示唆するものでしかない（写真86）。

またこのようなキモノ観は、キモノ・スリーブにおける “soft careless elegance” という印象とたがいに強めあって、キモノのもつ柔らかさの面のみを実際以上に強調する結果ともなる。2章で観察したように (p. 730, 742), 西欧人によるキモノの形体的認識の誤りのひとつに、キモノの骨格の見おとしがある。ウールのもつ丸みのある素材感や、包まれた肉体の塊量感にとらわれすぎることによって、芋虫状のふ

59) 繁縷なヒダに関しては、中国服装あるいはさらにオリエンタル・コスチュームについてのイメージの影響が、とくに大きいであろう。



写真85 Newman より“桃太郎”



写真86 James による



写真87 Lorna Whittingham の作品より
(左側)

くらみをもつ表現に陥ることのほかに、キモノがとくに衿のかたさと素材の張りという、いわば骨材をもった構造体であることは、案外理解されにくい。そうした意味で、写真87の Whittingham のデザインした、chinese mandarin robe をアレンジした作品は、これがなぜキモノ的でないかという理由を、あきらかに示しているといえよう⁶⁰⁾。

機能的認識——19世紀の日本旅行者の観察のなかで、日本人のはだかについての無自覚さがくりかえしとりあげられたことは、すでにのべた。しかし、はだかというより肉体についての無頓着さを服装の性質との関連で考えた西欧人は、Mente など、ごくわずかの例しかない。

キモノ・スリーブの技術的展開の項で見たように、このスタイルのもつ、“soft careless elegance effect” を一方では生

かそうとしながら、しかもフィットネスを求めるために、高度の、あるいは曖昧な技

60) まえにもふれたように (p. 781)、現代では、西欧でも Japanese Kimono と kimono dress とは区別して考えるのがふつうである [PICKEN 1957: 193-194; 1939 年版も同一内容]。そのうえで、前者、すなわちほんらいの日本のキモノを表現し、手にいれようとする場合であっても、アーティストまたは需要者の態度にはかなりの幅が存在する。そのもっともキモノ・ドレスにちかいところに、たとえばスタジオ写真家の Puyo のような考えかたがある。彼の意見は、真の日本的なものを表現しようとするなら、日本へ行き、日本の女性をモデルとし、日本の環境の中で撮映するしか方法はない。しかし私の必要としているのは、歴史的な、または民族学的な正確さではなく、ファンタジーなのだということである [Puyo 1902?: 29] (写真88)。この主張は、kimono improvisation のもっとも明快な例であり、一般に映画・演劇関係コスチュームの考えかたである。しかもそれは、キモノ・ドレスとはちがう。キモノ・ドレスとはほんらい、より即物的な応用にすぎない。



写真88 Puyo の作品

術導入を余儀なくさせられた。西欧型衣服のそのような絶対的価値基準のひとつであったフィットネスとは、どういう内容のものなのか。そのひとつの理解方法としては、全体的にも部分的にも、衣服が肉体の代理機能をもつということではないだろうか。部分的な見方をすれば、ドレスの bust は breast のかたちを正確になぞり、それによって乳房そのものの美しさを表現する。ある意味では、ドレスのバストは乳房そのものになる。もし美しい乳房であるなら、ドレスのバストも美しいであろう。肉体をあらわすことが sexy であるならば、ドレスのバストも sexy である。同様に、肉体をあらわすことが不道徳であるならば、ドレスのバストも不道徳といわなければならない。

和服はドレーパリーというよりも、日常生活のなかでの現実の態様としては、robe volante というべきであった。すくなくとも明治和服にはその性質がある。けれども和服には、あきらかにドレーパリー的というべき性質がのこされてもいる。それは布地のある部分とつまれている肉体の部分とが正確に適合しないし、そうしたデザインの意図ももっていないことである。したがって、衣服のある部分がある時点では肉体のAという箇所に向かっていても、着る人の状況がかわったべつの時点では、多少とも距離をもったBという箇所に当る。和服が肉体の代理機能をもたないということは、衣服の各部分が皮膚機能的意味での肉体への部分固定性をさほどはきりとは持っていないということである。

西欧人の衣服観に関して、私は、彼らの正しいからだのかたちという観念は、ひとつには構成の明確さ、すなわち袖は袖、胴部は胴部という境界の明瞭さを意味するとのべた(p. 719)。キモノ・スリーブは、あきらかにその理念に合致しない。その意味では、セットイン・スリーブにおけるシーム線、いせやギャザーによるあるていどのふくらみ、そしてとりわけ puff sleeve は、からだの境界点の強調という点でもっとも西欧的といえよう。

和服が、衿で吊りヒップで支えるという保持方法をとっているのにたいし、西欧人のえがくキモノが、帯の位置の高すぎることから奇異感を生ずるのも、彼らが胴部における間接点である、ウエストのくびれ部分への伝統的固執を捨てないためであろう。

また、キモノについての西欧での常套的な定義として、“loose gown”ということばがある。けれども和服、とくに女性の昭和和服についてみれば、これをルースなどとはとてもいうことはできない。キモノがルースであるという意味は、サイズについてのゆるみということよりも、正確には人間のからだのかたちにたいするルースは、

いわば西欧衣服におけるフィットネスということばが示す *body fidelity* へのルースさ、ということではないだろうか⁶¹⁾。

3) 生活的観点から

キモノが西欧にもっともてはやされたのは、たとえばイギリスについていえば、日露戦争後の一時期に *fad* ともいべき現象があったらしい (O.E.D. *Kimono* 項 1908)。そののちの西欧人の生活へのキモノの浸透については、4章で略述したのであるが、彼らにとって“キモノ的”なるもののもっとも重要な点は、袖の構造であったと結論づけられるであろう。Picken も〈*The Fashion Dictionary*〉の“*kimono dress*”項で、“*Dress made with Kimono sleeve*”とのみ説明している [PICKEN 1957: 194]⁶²⁾。

それとくらべればはるかにかぎられた範囲であるが、ドレッシング・ガウンあるいはベッドルーム・ガーメントとして、あるていどの普及度を今日まで保ちつづけてきた。

ところで、このようなかたちで日本的なものが西欧型の生活にうけ入れられた場合、訪日外国人がしばしば近代日本人の生活について指摘したいいわゆる二重生活の問題は、彼らの側ではどのようなかたちになるであろう。

二重生活という概念は、わが国でいわれる場合非合理的な生活態様をさすものとして反省的に用いられるが、西欧人は、それを日本人の生活の豊かさをあらわすものとして、肯定的にも使っている⁶³⁾。

西欧におけるキモノのさまざまなかたちでの受容において共通に認められる態度は、彼らの衣文化の構造体系のなかで可能な選択の幅のうちのひとつのスタイルとしての受容、ということである。キモノのためにべつの衣文化の体系をつくるといったことは、一般にはありえない。日本人にとっての和服は、その製造工程から流通システム

61) 正しい観察者であれば、来日西欧人のなかにも、ルースな仕立てをタイトに着つけるキモノの特色を見てとった人々はもちろんある。「ヨーロッパ人がキモノをドレッシング・ガウンとして着るとき、裾をスカート状にみせるため、こっけいなヒダをうしろにつくり、全体としてかたちをダメにする。日本人は、けっしてキモノをルースにも *baggy* にも着ず、またヨーロッパ人がふつうするようなまえを開いた着方もしない」 [DAVIDSON 1907: 322]。

62) 前打ちあわせは、*surplice* として西欧では古くからうけつがれてきた方法で、ガウンに多くみられる形式である。キモノのひとつの特長との認識はあったが、キモノにとって必須の要素とは考えられていないと思われ (p. 771)、キモノをえがいた絵に V ネックのえりをみることは、それほどめずらしくない。

63) 〈日本人の姿態と外人のまなこ〉の引用する《被服》誌 1934年1月号の記事による。意見をのべた6名中3名が、和・洋装の二重生活を指摘し、しかもこれに肯定的である [被服文化協会研究部 1949: 20-23]。

の柔軟性のとぼしい連鎖につづいて、収納、手入れ、着つけ、そして身につけたうえでの“心構え”にいたるまで、洋服とはべつの体系がある。たとえば和裁教育は、家政系大学でも一般裁縫とは全く別の設備と教員組織とカリキュラムをもつ。また和服の洗浄を十分な方法で行なうためには、解体しての洗い張りを必要とし、縫い直しの費用をふくめれば縮緬の江戸褌で17,000~18,000円を要する⁶⁴⁾。

西欧においては、キモノも中国服やアノラックと同じように、生活のなかのある目的に応じて選択の対象となるスタイルのひとつである。ということはまた、ファッションでもあって、きわめて柔軟性と包容力のある衣文化の体系の中の、一時的な通過者にすぎず、その点では“洋服”じしんも例外ではない。したがって、キモノもそうした西欧型衣文化の体系を通過するときは、“和裁”ではなく、ドレスメーカーの対象として、ある点ではそのための変容を余儀なくされつつ、一方では体系にあたらしい養分を供給する。洗浄についても、洗い張りという技術は西欧にはないので、ドライクリーニングの新技术を生みださせる一方で、洗い張りの方法によらないでも型崩れせず、傷みの少ないデザイン、あるいはまたドライクリーニングで損われないようなかたちや素材感のあたらしい美意識をそだてることになろう。

謝 辞

本稿の作成について、つぎの方々のご協力とご好意をうけた。ここに感謝の気持ちをあらわしたい。

川西 嘉彦（京都外国語大学アジア関係図書館）

申 道子

野中 翠（マロニエ文化服装専門学院）

福富 芳美（明石短期大学）

藤津 滋生（関西外国語大学図書館）

森本千代子（神戸ドレスメーカー女学院）

写 真 出 典

- 1 クラシックポスター展（パルコ）、1982。
- 2 <Recueil de cent estampes représentant différentes nations de Lavent.>
- 3 Linschoten, J. H. van: <Itinerario. voyage ofte schipvaert naer Oost ofte Portugaels Indien.>
- 4 Houtman, C.: <De Eerste Shipvaart der Nederlanders-> (Rouffaer ed.)
- 5 musée royale d'art et d'histoire, Bruxelles.
- 6, 13 Alexander: <Costumes et Moeurs de la Chine.>
- 7 仇英, <絵図烈女伝> (汪庚 編) 1779。

64) 1983年8月、浜屋染物店調べ（横浜市西区西戸部町）。

- 8 Vecellio da cesare: <Degli abiti antichi, et moderni di diverses parti del mondo> fol. 473. 1550 (Venetia)
- 9 Boucher, F.: <Suite de figures chinoises.>
- 10 Gravure de la "China illustrata".
- 11 Ferrario, J.: <Le costume ancien et moderne Asie> 1.
- 12 Hottenroth, F.: <Trachten, Haus, -Feld -und Kriegsgräthschaften der Völker alter und neuer Zeit.>
- 14 Oeuvre de Grévedon. Bibliothèque Nationale de Paris.
- 15 Breitner, G. H.: Rijks Museum 662-A9.
- 16 Thomson, G.: <The Graphic> 23, April, 1870.
- 17 Bibliothèque des arts décoratifs, Maciet collection.
- 18 渡辺イウ: <大日本風俗漫画> 1888.
- 19 Legamey, F.: <Japon.>
- 22 Tilke, M. B. W.: <A pictorial history of costume.>
- 23 田中一貞: <万延元年遣米使節図録>。
- 24 Rosenberg & O'Neill: <For Men with Yen.>
- 25 Watanna, O.: <Japanese Blossom.>
- 26 Hillhouse: <Dress Selection and Design.>
- 27 Guimet, E.: <Promenades Japonaises: Tokio-Nikko.>
- 28 《Illustrated London News》3, January, 1844.
- 29 Yarwood, D.: <The Encyclopedia of World costume.>
- 30 Josse, P.: <Japan and its people.>
- 32 Savoy 劇場における Mikado 公演プログラム。
- 33, 40 Gallois, E. <Costumes japonais et indonesiens.>
- 34, 54 Oliphant: <Le Japon.>
- 35, 37, 55, 58, 68 <Photographs of Japanese women.> (京都外国語大学図書館所蔵)
- 36 Scott, G. R.: <Far eastern sex life.>
- 39 Exposition universelle-entrée de la section japonaise dans le palais du Champ-de-Mars. 1878
- 42 Thunberg, C. <Voyage au Japon.>
- 43 Shoberl, F.: <The World in Miniature.>
- 44, 57 Humbert, A. <Le Japon illustré.>
- 45 Challaye, F.: <Le Japon illustré.>
- 47 Depping, G.: <Le Japon.>
- 48 Bibliothèque nationale de Paris.—82B94740.
- 50 Harrold, R. & Legg, P.: <Folk Costumes of the World.>
- 52 Montanus, A.: <Altas Japannensis.>
- 60 Doeley, W.: <Clothing and Style.>
- 62 Fenollosa, M. M.: <The Dragon Painter.>
- 63 《Le monde illustré》21, Juin, 1919.
- 64 内田茂文: <大正大震大火之記念>。
- 66 Ferrand, C.: <Fables et Legendes du Japon.>
- 69 Picken, M.: <The Fashion dictionary.>
- 71 湯若望: <進呈書像>。
- 72, 73 横浜市開港資料館所蔵。
- 74 Musée des Beaux Arts, Angers.
- 75 Machiet collection, bibliothèque du Musée des Arts Decoratifs, Paris.
- 76 Freer Gallery of Art.
- 77 Pritchard: <The Cult of Chiffon.>
- 78 Peel: <Designs for Fancy Dress>
- 79 Bibliothèque Forney, Estampe 170322 1963.

- 80 Musée de l'Opera, Paris.
81 BA-TSU CO., LTD., 1983.
82 Georges Rech, 1983.
83 International Museum of Photography at George Eastman House.
84 Robinson, T.: <Old World Japan>, Champney: <Romance of Old Japan> よりの引用。
85 Newman: <Folk Tales of Japan.>
86 James, G.: <Green Willow.>
87 Wingo: <The Clothes you buy and make.>, 《Women's Wear Daily》(1941) よりの転載。
88 Puyo, C.: <Costume d'Atlier.>

文 献

本稿では文献を章別にして掲載する。その理由は、とくに第4章2に於て、主題とする分野の資料に関してほぼ網羅的であり、主題書誌として有用であると信ずるためである。

なお、同項における末尾の e-, D- 等は、表3と対照のための個人的文献番号である。

まえがき・第1章

- ALEXANDER, William
1805 *The Costume of China*. London: William Miller.
- BAINES, Barbara Burman
1981 *Fashion Revivals: from the Elizabethan age to the present day*. London: Batsford.
- BEVEREN, Jacques Joseph VAN & Charles DUPRESSOIR
1847 *Costume du moyen age: d'après les manuscrits, les peintures et les monuments contemporains, précédé d'une dissertation sur les mœurs et les usages de cette époque*. 2 vols. Bruxelles: Librairie Historique-Artistique.
- BEZOMBES, Roger
1953 *L'exotisme dans l'art et la pensée*. Paris: Elsevier.
- BIBLIOTHÈQUE DE LA VILLE DE LYON
1972 *La Chine découverte par les européens début XVIIe-début XIXe siècle: Exposition 13/Juin-30/Juillet 1972*. Lyon: Bibliothèque de la ville de Lyon.
- BIGGERS, Earl D.
1930 *Charlie Chan Carries on*. 『チャーリー・チャンの活躍』 佐倉潤吾訳 創元社 (1963)。
- BLANC, Charles
1875 *L'art dans la parure et dans le vêtement*. Paris: Librairie Renouard.
- BOISSARD, J. J.
1581a *Habitus Variarum Orbis gentium. Habitz de nations étranges*. Maline: C. Rutz.
1581b *Recueil de Costumes Etrangers: suivant le troisième volume de la collection recueillie par Boissard*.
- BRETON, M.
1811-1812 *La Chine en miniature ou choix de costumes, arts et métiers de cet empire*. 6 vols. Paris: Nepveu.
- CECIL, Levi M.
1947 *Our Japanese Romance: The myth of Japan in America 1853-1905*. Dissertation 4390. Micro-film University.
- CHAPPELLE, George DE LA
1648 *Recueil de divers portraits de principales dames de la Porte du grand Turc*. Paris: Antoine Estienne.
Costumes Turcs de la Cour et de la Ville de Constantinople en 1720

- 1721 *Costumes Turcs de la Cour et de la Ville de Constantinople en 1720: peints en Turquie, par un artiste Turc.* BN.Est. Od.6 4°.
- DALVIMART, Octavien *et al.*
1804 *The Costume of Turkey.* London: William Miller.
- FERRARIO, Jules
1827 *Le Costume ancien et moderne ou histoire du gouvernement, de la milice, de la religion, des arts, sciences, usages, etc. de tous les peuples anciens et modernes.* 13 vols. Milan: L'imprimerie de l'auteur et L'editeur.
- FISSCHER, J. F. VAN Overmeer
1833 *Bijdrage tot de kennis van het Japansche rijk.* Amsterdam. 『日本風俗備考』 東洋文庫 341 庄司三男他訳 平凡社 (1978)。
- GIFFART, Pierre
1697 *L'estat présent de la Chine en figures: dédié à monseigneur le duc & à madame la duchesse de Bourgogne.* Paris: Marchand Librairie.
- GRASSET DE SAINT-SAUVEUR JACQUES
1788 *Costumes civils actuels de tous les peuples connus...* 4 vols. Paris: Knapen et fils.
1806 *Voyages pittoresques dans les quatre parties du monde ou troisième édition de l'encyclopédie des voyages contenant les costumes des principaux peuples de l'Europe, de l'Asie, de l'Afrique, de l'Amérique, et des Sauvages de la mer du Sud.* Paris: Hocquart.
- GROHMANN, Johann Gottfried
1800 *Gebräuche und Kleidungen der Chinesen.* Leipzig: Industrie-Comptoir.
- HABERSHAM, A. W.
1857 *My Last Cruise; or where we went and what we saw...* Philadelphia: J. B. Lippincott & Co.
- Habillement de diverses nations*
1520-1550 *Habillement de diverses nations.* (catalogue de la bibliothèque du banre de Lipperheide à Berlin 1896.) 2 vols. BN.EST.Ob.14 pet-fol.
- HAWEIS, H. R. Mrs.
1879 *The Art of Dress.* London: Chatto & Windus.
- HOTTENROTH, Friedrich
1884?-1891 *Trachten, Haus-, -Feld -und Kriegsgeräthschaften der Völker alter und neuer Zeit.* 2 vols. Stuttgart: G. Weise.
- HOUTMAN, Cornelis DE
1915 *De Eerste Schipvaart der Nederlanders naar Oost-Indië onder Cornelis de Houtman, 1595-1597.* Rouffaer, G. P. *et al.* (eds.), Den Haag. 『東インド諸島への航海』 大航海時代叢書 第Ⅱ期 10. 生田滋他訳 岩波書店 (1981)。
- LE HAY
1714 *Recueil de cent estampes représentant différentes Nations du Levent...* Paris.
- LEOTY, Ernest
1893 *Le Corset: à travers les ages.* Paris: Paul Ollendorff éditeur.
- LUYCKEN
1670 *Costume des quatre parties du Monde.* B.N.Est.Ob. 19 4°.
- MALPIÈRE, D. B. DE
1824-1827 *La Chine: Moeurs, usages, costumes, arts et métiers, peines civiles et militaires, cérémonies religieuses, monuments et paysages.* 2 vols. Paris: L'Editeur.
- MASON, George Henry
1800 *The Costume of China, illustrated by sixty engravings.* London: William Miller.
- 那珂 馨
1954 「明治以前の欧米文献に見られる日本人の服装」『被服文化』88: 61-66. 文化出版局。
- NICOLAY, N. DE
1568 *Les quatre premiers livres des Navigations et Peregrinations Orientales, Avec les figures au naturel tant d'hommes que de femmes selon la diversité des nations, & de leur port, maintien, & habitz.* Lyon: Guillaum Roville.

- O'FOLLOWELL, Docteur
1905 *Le Corset: Histoire-Médecine-Hygiène*. Paris: A. Maloine.
- PAUQUET
1864 *Costumes étrangers*. Paris: Pauquet frère éditeur.
- PÉCHEUX & MANZONI
1813 *Costumes Orientaux, inédites, dessinés, d'après nature en 1796, 1797, 1798, 1802 et 1809*. Paris: L'Editeur.
- PEDDIE, Robert Alexander
1933 *Subject Index of Books published before 1880*. A-Z. London: Grafton & Co.
1935 *Subject Index of Books published up to and including 1880*. second series A-Z. London: Grafton & Co.
1939 *Subject Index of Books published up to and including 1880*. third series, etc. London: Grafton & Co.
1948 *Subject Index of Books published up to and including 1880*. new series A-Z. London: Grafton & Co.
- RAYNAL
1688 *Figures naturelles de Turquie*. B.N.Est. Od.7 4°.
Recueil
1927 (1567) *Recueil de la diversité des habits, qui sont de présent en usage, tant es pays d'Europe, Asie, Afrique & Isles sauvages, le tout fait après le naturel*. Lyon: M. Audin et C^{ie}. (Paris: Richard Breton.)
- RODRIGUEZ, João T.
1634 *Historia da Igreja do Japão*. 『日本教会史』大航海時代叢書 9, 10 池上岑夫他訳 平凡社 (1967, 1970)。
- ROSSET
1790 *Moeurs et costumes, turques et orientales*. B.N.Est.Od.19 fol.
- RUDOFSKY, Bernard
1966 *The Kimono Mind*. New York: Doubleday & Co.
- SAID, Edward W.
1978 *Orientalism*. London: Routledge & Kegan Paul.
- SCARCE, Jennifer
1980 Turkish Fashion in Transition. *Costume 14*: 144-167.
- SCHWEIGER-LERCHENFERD, Amand F. VON
1904 *Die Frauen des Orients in der Geschichte, in der Dichtung und im Leben*. Leipzig: A. Hartleben.
- SIEBOLD, Philipp F. VON
1826 *Reise nach den Hofe des Sjogun im Jahre 1826*. 『江戸参府紀行』東洋文庫 87 斎藤 信訳 平凡社 (1978)。
69 *Dessins originaux de costumes turcs*.
1796 69 *Dessins originaux de costumes turcs*. B.N.Est.Od.23 4°.
- SPENCER, Edmund
1851 *Travels in European Turkey in 1850: Through Bosnia, Servia, Bulgaria, Macedonia, Thrace, Albania, and Epirus; with a visit to Greece and the Ionian Isles and a homeward tour through Hungary and the Slavonian provinces of Austria on the lower Danube*. 2 vols. London: Colburn and Co. Pub.
- TABORI, Paul
1961 *The Art of Folly*. London: Prentice-Hall International Inc.
- THOMPSON, Richard Austin
1957 *The yellow Peril 1890-1924*. Dissertation 24331, Micro-film University.
- VARENIUS, Bernhardus
1649 *Descriptio Regni Japoniae*. Amsterdam. 『日本伝聞記』 宮内芳明訳 大明堂 (1975)。

VECELLIO DA CESARE

- 1550 *Degli Habitii antichi, et moderni di diverse parti del Mondo.* Venetia. B.N.Est.Ob.
12 4°.

第2章・第3章

AKIMOTO, Shunkichi

- 1912 *Tokyo Miyage.* Yokohama: Kelly and Walsh, Ltd.
1934 *The Lure of Japan.* Tokyo: Board of Tourist Industry Japanese Government Railways.

AMMONS, Jobst

- 1872 (1586) *Gynoeceum; or The Theatre of Women: wherein may be seen. The female costumes of all the principal nations, tribes, and peoples of Europe, of whatsoever rank, order, estate, condition, profession, or age, with new and most exquisite figures unequalled hitherto for beauty.* The Holbein Society Fac-Simile Reprints (Frankfort: Published at the cost of Sigismund Feyerabendt.)

ANDERSON, Isabel W.

- 1914 *The Spell of Japan.* Boston: The Page Company.

ARNOLD, Edwin

- 1892a *Japonica.* New York: Charles Scribner's Sons.
1892b *Seas and Lands.* London: Longmans, Green & Co.

AYRTON, M. Chaplin

- 1879 *Child-Life in Japan and Japanese child-stories.* London: Griffith & Farran.

BACON, Alice Mabel

- 1891 *Japanese Girls and Women.* Boston: Houghton, Mifflin & Co.
1893 *A Japanese Interior.* Boston: Houghton, Mifflin & Co.

BARET

- 1892 *Le Costume et la Toilette au Japon.* Paris: Imprimerie Chaix.

BARR, Patt

- 1968 *The Deer Cry Pavilion—A story of westerners in Japan, 1868-1905.* London: Macmillan.

BEARD, Miriam

- 1929 以降 *Realism in Romantic Japan.* London: Jonathan Cape Ltd.

BECKER, J. E. DE

- 1899 *The Nightless City.* London: Max Nössler & Co.

BELL, Quentin

- 1947 *On Human Finery.* London: The Hogarth Press.

BELLESSERT, André

- 1918 *Le Nouveau Japon.* Paris: Librairie Académique Perrin et Cie.

BICKERSTETH, Mary J.

- 1893 *Japan as we saw it.* London: Sampson Low, Marston & Co.

BIRD, Isabella L.

- 1907 (1881) *Unbeaten Tracks in Japan: An account of travels in the interior, including visits to the aborigines of Yezo and the shrines of Nikko and Ise.* London: John Murray. (New York: G. P. Putnam's Son.)

BLACK, John Reddie

- 1880 *Young Japan.* Yokohama and Yedo. London: Trubner & Co.

BLAKESLEE, Fred Gilbert

- 1935 *Eastern Costume.* Hollywood: Warner Publishing Co.

BLANCHOD, Fred Dr.

- 1953 *Vagabondage au Japon.* Lausanne: Librairie Marguerat.

BLAND, J. O. P.

- 1921 *China, Japan and Korea*. London: William Heineman.
- BODLEY, Major R. V.
1933 *A Japanese Omelette — A British Writer's Impressions on the Japanese Empire*. Japan: The Hokuseido Press.
- BOUSQUET, Georges
1877 *Le Japon: de nos jours et les échelles de l'Extrême Orient*. Paris: Librairie Hachette et Co.
- BRAIN, Belle M.
1905 *All About Japan: stories of sunrise land told for little folks*. New York: Young People Missionary Movement.
- BRAUN, Adolphe Armand
1928 *Figure, Faces and Folds: A practical reference book on woman's form and dress, and its application in past and present art*. London: B. T. Batsford.
- BRETON, M.
1811-1812 *La Chine en miniature ou choix de costumes, arts et métiers de cet empire*. 6 vols. Paris: Nepveu.
- BROWN, Arthur Judson
1916 *The mastery of the Far East: the story of Korea's Transformation and Japan's rise to supremacy in the Orient*. New York: Charles Scribner's Son's.
- BROWNE, G. Waldo
1904 (1901) *Japan, the place and the people*. Boston: Dana Estes Co.
- BROWNELL, Clarence Ludlow
1904 *The Heart of Japan: Glimpses of Life and Nature far from the Travellers' Track in the Land of the Rising Sun*. New York: McClure, Phillips & Co.
- BURNHAM, Dorothy K.
1973 *Cut my cote*. Ontario: Royal Ontario Museum, Textile Dept.
- BUSH, Lewis
1967 *Japanalia: past and present*. 2 vols. Tokyo: Japan Times.
- BUTLER, Thomas, Mrs.
1923 *Missions as I saw them*. London: Henry Hooks, United Methodist Publishing House.
- CAINE, W. S.
1888 *A Trip Round the World in 1887-8*. London: George Routledge & Sons.
- CARROTHERS, Julia D. Mrs.
1879 *The Sunrise Kingdom: or Life and Scenes in Japan, and Woman's work for Woman there*. Philadelphia: Presbyterian Board of Publication.
- CECIL, Levi M.
1947 *Our Japanese Romance: The myth of Japan in America, 1853-1905*. Dissertation 4390, Micro-film University.
- CHALLAYE, Félicien
1905 *Le Japon Illustré*. Paris: Librairie Larousse.
- CHAMBERLAIN, Basil Hall
1939 *Things Japanese, being notes on various subjects connected with Japan. For the use of travellers and others*. London: G. P. Putnum's Son.
- チェンバレン, B. H.
1969 『日本事物誌』 東洋文庫 131 高梨健吉訳 平凡社。
- CHAPIN, James Henry
1889 *From Japan to Granada: Sketches of observation and inquiry in a tour round the world in 1887-8*. New York: G. P. Putnam's Son.
- CHASSIRON, le Bon Ch.
1861 *Notes Sur le Japon, la Chine et l'Inde: 1858-1859-1860*. Paris: E. Dentu et Reinwald.

- チャタム, E. A.
 1908 「西洋人の見たる日本の風俗」『風俗画報』379: 40-42。
- CHAUVELOT, Robert
 1923 *Le Japon souriant: ses Samourais, ses Bonzes, ses Geishas.* Paris: Berger-Levrault.
- CHAZE, Elliot
 1947 *The Stainless Steel Kimono.* New York: Simon and Schuster.
- CHESTERTON, Cecil, Mrs.
 1933 *Young China and new Japan.* London: George Harrap & Co. Ltd.
- CHIANG Yee
 1972 *Silent Traveller in Japan.* New York: W. W. Norton & Co.
- CLEMENT, Ernest W.
 1903 *A Handbook of modern Japan.* Chicago: A. C. McClurg & Co.
- CLOSE, Upton
 1935 *Behind the Face of Japan.* London: Hurst & Blackett, Ltd.
- COLLIER, Price
 1911 *The West in the East: from an American point of view.* London: Duckworth & Co.
- COLLINS, Gilbert
 1924 *Far Eastern Jaunts, etc.* London: Methuen & Co. Ltd.
- CONN, William
 1886 *Japanese life, love and legend: A visit to the Empire of the 'Rising Sun'.* In M. Dubard, "Le Japon pittoresque," London: Ward & Downey.
- COOPER, Michael, S. J. (Comp.)
 1903 *They came to Japan: an anthology of European reports on Japan, 1543-1640.* Berkeley: University of California press.
- Costumes*
 1901 *Costumes: A Collection of engravings, etchings, many illustrating the costumes...*
- Costumes of All Nations*
 1901 *Costumes of All Nations.* 2 vols. London: H. Grevel & Co.
- CRANMER-BYING & S. A. Kapadia
 1905 *Women and wisdom of Japan.* London: John Murray.
- CROCKETT, Lucy Herndon
 1949 *Popcorn on the Ginza.* London: Victor Gollancz Ltd.
- CROW, Arthur H.
 1883 *Highways and Byways in Japan: The experience of two pedestrian tourists.* London: Sampson Low, Marston, Searle and Rivingston.
- CURTIS, William Eleroy
 1896 *The Yankees of the East: Sketches of Modern Japan.* New York: Stone & Kimball.
- 大丸 弘
 1979 「現代和服の変貌—その設計と着装技術の方向に関して」『国立民族学博物館研究報告』4 (4): 770-797。
 1980 「現代和服の思想—きもの論の動向に関するノート」『風俗』64: 69-80。
- DALMAS, Le Comte Raymond DE
 1885 *Les Japonais, leur pays et leur moeurs.* Paris: Libraire Plon.
- DAUTREMER, Joseph
 1901 *Au Pays des Geishas. Série d'Orient, No.7,* Shanghai: Imprimerie de la presse Orientale.
- DAVIDSON, Augusta M. Campbell
 1907 *Present-day Japan.* London: T. Fisher Unwin.
- DEKOBRA, Maurice
 1936 *A Frenchman in Japan.* London: T. Werner Laurie, Ltd.
- DEPPING, Guillaume
 1884 *Le Japon.* Paris: Jouvet et C^{te}, Editeurs.

- DHASP, Jean
1893 *Le Japon contemporain: notes et impressions*. Paris: Libraires Imprimeries Réunies.
- DICKSON, Walter G.
1889 *Gleanings from Japan*. Edinburgh: William Blackwood and Sons.
- DIOSY, Arthur
1898 *The new Far East*. London: Cassell and Co. Ltd.
- DOEFF, Hendrick
1833 *Herinneringen uit Japan*. Haarlem: François, Bohn.
- DOUGLAS, Sladen
1892 *The Japs at home*. London: Hutchinson & Co.
- DURAND-FARDEL, M^{me} Laure
1887 *De Marseille à Shanghai et Yedo: récits d'une Parisienne*. Paris: Challamel Ainé.
- EDEN, Charles H.
1877 *Japan: Historical and Descriptive*. "Les voyages célèbres," London: Marcus Ward & Co.
- EDEN, Richarde & Richarde WILLES
1577(1928) *The History of Travayle: In the East and West Indies*. England and Japan: The First Known Account of Japan in English, extracted from the "History of Travayle," London: Richarde Fugge. (Kobe: J. L. Thompson & Co. Ltd.)
- EMBREE, John F.
1975(C.1945) *The Japanese nation; A Social Survey*. Westport: Greenwood Press.
- ENRIGHT, Dennis J.
1956 *The World of Dew: Aspect of Living Japan*. Rutland: Charles E. Tuttle Co.
- ERNEST, F. G. and M. P. HATCH
1904 *Far Eastern Impression: Japan-Korea-China*. London: Hutchinson & Co.
- ESKELUND, Karl
1955 *The Emperor's New Clothes*. London: Burke.
- EXNER, A. H.
1891 *Japan. Skizzen von Land und Leuten mit besonderer Berücksichtigung Kommerzieller Verhältnisse*. Leipzig: T. O. Weigel Nachfolger.
n.d. *Japan as I saw it*. London: Jarrold & Sons, Warwick Lane, E.C.
- FEGEN, W. P.
1954 *Japan Background Stories*. Tokyo: Tokyo News Service Ltd.
- FIELD, Henry M.
1883 *From Egypt to Japan*. New York: Charles Scribner's Sons.
- FISHER, Gertrude Adams
n.d. *A Woman alone in the Heart of Japan*. London: Sisley's Ltd.
- FISSCHER, J. F. VAN Overmeer
1833 *Bijdrage tot de kennis van het Japansche rijk*. Amsterdam. 『日本風俗備考』 東洋文庫 341 庄司三男他訳 平凡社 (1978)。
- FLEISHER, Wilfrid
1941 *Volcanic Isle*. New York: Doubleday, Doran and Co. Inc.
- FOGHT, Harold W. & Alice FOGHT
1928 *Unfathomed Japan; A travel tale in the highways and byways of Japan and Formosa*. New York: the Macmillan Co.
- FONBLANQUE, Edward Barrington DE
1862 *Nippon and Pe-che-li; or two years in Japan and Northern China*. London: Saunders, Otley & Co.
- FORBIS, William H.
1976 *Japan Today: People, Places, Power*. Tokyo: Charles E. Tuttle Co.
- FOREST, Charlotte B. DE

- 1923 *The Woman and Leaven in Japan*. West Medford : The Central Committee on the United Study of Foreign Mission.
- FRANCK, H. A.
1924 *Glimpses of Japan and Formosa*. London: T. Fisher Unwin, Ltd.
- FROIS, Luis
1585 *Tratado em que se contem muito susintae abreviadamente algumas contradicões e difeenças de costumes entre a gente de Europa e esta provincia de Japão*. 『日欧文化比較』大航海時代叢書 11 岩波書店 (1965)。
- 藤原九十郎
1938 『輓近家事論纂』 文光社。
- FUKUDA, Ippei
1936 *The Japanese at Home: Some Intimate Sketches of Life and Personalities*. Tokyo: Hokuseido Press.
- GALLOIS, Emile
1957 *Costumes japonais et indonesiens*. Paris: Henri Laurens.
- GARDINER, Robert, S.
C.1892 *Japan as we saw it*. Boston: Rand Avery Supply Co.
- GARIS, Frederic DE
1937 *Their Japan: being brief descriptions of noteworthy phases of Japanese life, of many of the customs, festivals, arts and crafts of the Japanese* —. Yokohama: Yoshikawa.
- GATTY, Charles Neilson
1967 *The Bloomer Girls*. London: MacDonald & Co.
- GEMEENTEMUSEUM
1959 *De Japansse Kimono: ziel van een volk*. Den Haag.
- GIAFFERRI, Paul Louis DE
1927 *The History of the Feminine Costume of the World*. New York: Foreign Publications Inc.
- GIRÃO, Avila
n.d. *Relación del Reino de Nippon a que llaman corruptamente Jappon*.
- GIRONELLA, José Maria
1966 *Le Japon et son secret*. Plon.
- GONTCHAROV, Ivan A.
1857 *Fregat "Pallada"*. 『日本渡航記』 井上 満訳 岩波書店 (1941)。
- GORDON, E. A.
1903 *"Clear round"; a story of world-travel*. London: Sampson Low, Marston & Co.
- GRACE, James
1936 *Japan Recollections and Impressions*. London: George Allen & Unwin Ltd.
- GREENBIE, Sydney
C.1920 *Japan; real and imaginary*. New York: Harper & Brothers.
1930 *The Romantic East*. New York: Robert M. McBride Co.
- GRONAU Marie-Luise VON
1944 *In Kimono und Obi*. Stuttgart: K. Thienemann.
- GUERVILLE, A. B. DE
1904 *Au Japon*. Paris: Alphonse Lemerre.
- GUIMARÃES, Moreira
1908 *No Extremo Oriente*. Rio de Janeiro: Oficinas de Kósmos.
- GUIMET, Emile
1880 *Promenades Japonaises: Tokio-Nikko*. Paris: G. Charpentier Editeur.
- ギメ, エミール
1977 『1876 ボンジュール・かながわ』 青木啓輔訳 有隣堂。
- GUNSAULUS, Helen C.
1923 *Japanese Costume*. Chicago: Field Museum of Natural History.

- HABERSHAM, A. W.
1857 *My Last Cruise; or where we went and what we saw: being an account of visits to the Malay and Loo-Choo islands, the coasts of China, Formosa, Japan, Kamtschatka, Siberia and the mouth of the Amoor River.* Philadelphia: J. B. Lippincott & Co.
- HAMMERTON, J. A.
1922 *Peoples of All Nations.* Vol. V. London: The Amalgamated Press Ltd.
- HARBERTON, The Viscountess
C.1885 *Reasons for Reform in Dress.* London: Hutchings & Crowsley Ltd.
- HARTSHORNE, Anna C.
1902 *Japan and her people.* 2 vols. Philadelphia: Henry T. Coates & Co.
- HAWES, H. R. Mrs.
1879 *The Art of Dress.* London: Chatto & Windus.
- HAWKS, Francis L. (compile)
1857 *Narrative of the expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, performed in the years 1852, 1853 and 1854.* New York: D. Appleton and Co.
- HERSHEY, Amos S. & Susanne W. HERSHEY
1919 *Modern Japan: Social-industrial-political.* Indianapolis: The Bobbs-Merrill Company.
- HITCHCOCK, Alfred M.
1917 *Over Japan Way.* New York: Henry Holt, Co.
- HODGSON C. Pemberton
1861 *A Residence at Nagasaki and Hakodate in 1859-1860.* London: Richard Bentley.
- HOLLAND, Clive
1908 *Au Japon.* Paris: Vuibert et Nony Editeurs.
- HÜBNER, M. Le Baron DE
1874 *A Ramble Round the World.* London: Macmillan and Co.
- HUMPHREYS, Christmas
1948 *Via Tokyo.* London: Hutchinson & Co. Ltd.
- IDDITIE, Junesay
1960 *When two cultures meet: sketches of postwar Japan 1945-1955.* Tokyo: Kenkyusha Ltd.
- THE INTERNATIONAL COUNCIL OF MUSEUM
1981 *Vocabulary of basic terms for cataloguing costume.*
- 石沢吉磨
1922 『生活改善を基調とせる科学的家事精説』 広文堂書店。
- 巖本善治
1892 『吾党之女子教育』 女学雑誌社。
- IZUMIYA, Elsa
1954 *Once upon a time: A memory of Japanese life.* Tokyo: Hokuseido.
- JEFFRIES, W. Carey,
1914 *Two Undergraduates in the East.* London: Sports and Sportsmen Ltd.
- JEPHSON, R. Mounteney and Edward Pennell ELMHIRST
1869 *Our Life in Japan...* London: Chapman and Hall.
- JOSSE, Page
n.d. *Japan; and its people.* London: S. W. Partridge & Co.
- 霞蝶園主人
1905 「伝法村風俗」『風俗画報』322: 21-22。
- KAEMPFER, Engelbert
1777-1779 *Geschichte und Beschreibung von Japan. Aus den Original-handschriften des Verfassers.* herausgegeben von Christian Wilhelm Dohm Lemgo, im Verlage del Meyer'schen Buchhandlung.

- ケンベル, E.
 1977 『江戸参府旅行日記』 東洋文庫 303 斎藤 信訳 平凡社。
 神奈川県庁
 1976 『神奈川県史・資料編 14』 神奈川県庁。
- KENKOKUKINENJIGIYO-KYOKAI
 1930 *Japan in Advance*. 2 vols. Tokyo: Kenkokukinenjigiyo-kyokai.
- KLEIN, Ruth
 1950 *Lexikon der Mode*. Baden-Baden: Woldemar Klein Verlag.
- KNOLLYS, Major Henry
 1887 *Sketches of Life in Japan*. London: Chapman and Hall Ltd.
- KNOX, George William
 1905 *Japanese Life in Town and Country*. New York: G. P. Putnam's Son.
- KNOX, Thomas W.
 1880 *Adventures of Two Youths in a Journey to Japan and China*. New York: Harper & Brothers.
- 小林秋子
 1904 『世界の婦人』 現代社書房。
- KOESTLER, Arthur
 1960 *The Lotus and the Robot*. London: Hutchinson Co.
- KRUSENSTERN, A. J. VON
 1813 *Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806 auf Befehle Seiner Kaiserlichen Majestät Alexander des Ersten, etc.* St. Petersburg.
- 熊倉功夫
 1979 「文明開化と風俗」 林屋辰三郎編『文明開化の研究』 岩波書店。
- KYBALOVÁ, Ludmila and Olga HERBENOVÁ
 1966 *The Pictorial Encyclopedia of Fashion*. London: Paul Hamlyn.
- LAJTHA, Edgar
 1936 *The March of Japan*. London: Robert Hale & Co.
- LANGER, Paul F.
 1966 *Japan: Yesterday and Today*. New York: Holt, Rinehart and Winston Inc.
- LAUTERER, Joseph
 1907 *Japan: Das Land der aufgehenden Sonne einst und jetzt*. Leipzig: Otto Spamer.
- LAWSON, Kate
 1910 *Highways and Homes of Japan*. London: T. Fisher Unwin.
- LEBRA, T. S.
 1976 *Japanese Patterns of Behavior*. Honolulu: The University Press of Hawaii.
- LECOMTE, F. (Dioyns)
 1893 *Voyage pratique au Japon*. Paris: Augustin Challamel.
- LEDERER, Emil & Emy, Lederer-Seidler
 1938 *Japan in transition*. New Haven: Yale University Press. 「過渡的日本」道家弘一郎 訳・唐木順三編『外国人の見た日本』 筑摩書房。
- LELOIR, Maurice
 1951 *Dictionnaire du Costume, et de ses accessoires des Armes et des Étoffes des origines à nos jours*. Paris: Gründ.
- LEOTY, Ernest
 1893 *Le Corset; à travers les ages*. Paris: Paul Ollendorff éditeur.
- Let's Dress Up!*
 1949 *Let's Dress Up!: Dressing up with Costumes of Many Countries*. London: Edinburgh House Press.
- LIBERTY, Lasenby
 1902? *Japan—A pictorial record*. London: Adam & C. Black.

- LIEBERMAN, Laurence
1978 *Kimono*. *The New Yorker* 54: 93.
- LINDAU, Rudolph
1864 *Un voyage autour du Japon*. Paris: Librairie de L. Hachette et C^{ie}.
- LINSCHOTEN, Jan Huygen VAN
1596 *Itinerario. voyage ofte schipvaert naer Oost ofte Portugaels Indien*. Amsterdam.
- LLOYD, Arthur
1909 *Every-day Japan*. London: Cassel & Co. Ltd.
1911 *Every-day Japan, written after twenty-five years' residence and work in the country*. London: Cassell and Co. Ltd.
- LONGRAIS, F. JÜION DES
1927 *Extrême-Asie; De Yokohama à Singapore...* Paris: Editions Pierre Roger.
- LOONEN, Ch.
1894 *Le Japon Moderne...* Paris: Plon, Nourrit.
- LOTI, Pierre
1889 *Japoneries d'automne*. Paris: Calmann Lévy. 『秋の日本』 角川文庫 村上菊一郎他訳 (1953)。
- 横山栄次
1932 『現代女教』 至誠堂。
- MALPIÈRE, D. B. DE
1824-1827 *La Chine: mœurs, usages, costumes, arts et métiers, peines civiles et militaires, cérémonies religieuses, monuments et paysages...* Paris: Goujon et Mlle Formentir, Firmin Didot.
- MAR, Walter Del
1902 (1904) *Around the World Through Japan*. New York: The Macmillan Co. (London: Adam and Charles Black)
- MARAINI, Fosco
1959 *Meeting with Japan*. New York: The Viking Press.
- MARINI, Henri & Jean FAUCONNEY
1901 *La Femme en Orient en Extrême-Orient: Sa Condition Social*. Paris: Librairie Vernier.
- MARTYR, Graham
1930 *Gokosei of Ryunan*. Kumamoto: Inamoto-Hôtokukai Shuppan-bu.
- MATSUNAGA, Peter I. and Tatsuo SHIBATA (eds.)
1955 *Guide*. Tokyo: Mainichi Newspapers.
- MEARS, Helen
1943 *Year of the Wild Boar. An American Woman in Japan*. London: Peter Davies.
- MENPES, Mortimer & Dorothy MENPES
1901 *Japan*. London: A. & C. Black.
Men's Dress Reform Party
n.d. *Men's Dress Reform Party*. BL-1883. c. 13.
- MENTE, Boye DE
1960 *Faces of Japan*. Japan: Simpson-Doyle & Co.
1963 *Oriental Secrets of Graceful Living*. Hollywood: Wilshire Book Co.
- MICHAUX, Henri
1933 *Un barbare en Asie*. Paris: Gallimard. 『アジアにおける一野蛮人』 小海永二訳 弥生書房。
- MINER, Earl R.
1958 *The Japanese Tradition in British and American Literature*. Princeton: Princeton University Press.
- MINNICH, Helen Benton
1963 *Japanese Costume: and the Makers of its Elegant Tradition*. Tokyo: Charles E. Tuttle Co.

- 三輪田真佐子
1897 『女子教育要言』 国光社。
- 三宅雄二郎
1891 『真善美日本人』 政教社編『日本精神を中心としたる明治時代の文献』 政教社。
- 水上邦彦
1936 「キモノと型」『風俗研究』198: 9。
- MOGES, Marquis DE
1860 *Recollections of Baron Gros's embassy to China and Japan in 1857-58.* London: Richard Griffin & Co.
1860 *Souvenirs d'une ambassade en Chine et au Japon: en 1857 et 1858.* Paris: Librairie de L. Hachette et C^{ie}.
- MONTANUS, Arnoldus
1670 *Atlas Japannensis.* London: Printed by T. Johnson.
n.d. (1973) *Description de l'empire du Japon.* 天理図書館善本叢書—洋書の部 4 Tenri: Tenri University Press.
- MONTGOMERY, Helen. B.
1908 *The empire of the East.* London: Methuen & Co.
- MONTIGUY, Y. Roy DE
1901 *Mariage symbolique au Japon. Paris-prétoria.*
- 森田たま
1957 『きものおぼえ書き』 講談社。
- MORRIS, John
1943 *Traveller from Tokyo.* London: Cresset Press.
- MORSE, Edward S.
1917 *Japan day by day.* 『日本その日その日』 石川欣一訳 創元社 (1939)。
- MORTON, W. Scott
1973 *The Japanese; how they live and work.* New York: Praeger Publishers.
- MURPHY, U. G.
1904 *The Social Evil in Japan and allied subjects with statistics and the social evil test cases and progress of the anti-brothel movement.* Tokyo: The Methodist publishing house.
- MUSÉE DE L'HOMME
1981 *Vers un système descriptif du vêtement.*
- 長沢 節
1979 『デッサン・デ・モード』 美術出版社。
- NEWMAN, Joseph
1942 *Goodbye Japan.* New York: L. B. Fischer.
- NEWTON, Stella Mary
1974 *Health, Art & Reason—Dress reformers of the 19th century.* London: John Murray.
- NOËL, Henry
1939 *Karakoromo: At Home in Japan.* Tokyo: The Hokuseido Press.
- NORBECK, Edward
1965 *Changing Japan.* New York: Holt, Reinhart and Winston.
- NORMAN, Henry
1908 *The real Japan; studies of contemporary Japanese manners, morals, administration and politics.* London: T. Fisher Unwin.
- O'FOLLOWELL, Docteur
1905 *Le Corset: Histoire—Médecine—Hygiène.* Paris: A. Maloine.
- OGAWA, K.
1892 *Costumes and Customs in Japan.* 2 vols. Tokyo: Kelly and Walsh Ltd.
- PALMER, Albert W.
1934 *Orientalism in American Life.* New York: Friendship Press.

- PARIS, John
1921 *Kimono*. London: Collins' Clear.
- PATRIC, John
1944 *Why Japan was strong—a journey of adventure*. London: Methuen & Co. Ltd.
- PAUL-DAVID, Madeleine
1957 *Kimonos d'hier et d'aujourd'hui*. Paris: Musée Cornuschi.
- PAUQUET
1864 *Costumes étrangers*. Paris: Pauquet frère éditeur.
- PEERY, R. B.
1897 *The Gist of Japan*. New York: Fleming H. Revell Co.
- PETTIT, Charles
1905 *Pays de Mousmés, Pays de Guerre!* Paris: Librairie Félix Juven.
- PHILLIPS, Henry Albert
1932 *Meet the Japanese*. Philadelphia: J. B. Lippincott. Co.
- PICKEN, Mary Brooks
1939 *The Language of Fashion*. New York: Mary Brooks Picken School.
- PIN, Le Colonel D'état-major du.
1868 *Le Japon: moeurs, costumes—description—géographie, rapports avec les Européens*. Paris: Arthus Bertrand.
- PLATH, David W.
1964 *The After Hours*. Berkeley: University of California Press.
- PONTING, Herbert G.
1922 *In Lotus—Land Japan*. London: J. M. Dent & Sons, Ltd.
- PRICE, Willard DE Mille
1946 *Key to Japan*. London: William Heinemann.
1971 *The Japanese Miracle and Peril*. London: William Heinemann.
- PUDOR, Heinrich
1903 *Die Frauenreformkleidung: ein Beitrag zur Philosophie, Hygiene und Ästhetik des Kleides*. Leipzig: Verlag von Hermann Seemann Nachfolger.
- PUMPELLY, Raphael
1870 *Across America and Asia—Notes of a five years' journey around the world and of residence in Arizona, Japan and China*. New York: Leypoldt & Holt.
- QUENNEL, Peter
1932 *A superficial journey through Tokyo and Peking*. London: Faber and Faber Ltd.
- REDIER, Antoine
1919 *Chrysanthèmes*. *Le Monde Illustré*.
- REDMOND-HOWARD, L. G. (ed.)
1915 *Japan and the Japanese People*. London: Simpkin, Marshall Hamilton, Kent & Co. Ltd.
- REED, Edward J.
1880 *Japan: its history, traditions and religions. with the narrative of a visit in 1879*. 2 vols. London: John Murray.
- REGAMEY, Félix
1900 *Japon*. Paris: Paul Paclot & C^{ie}.
1904 *Le Japon en Images: dessins d'après nature et documents originaux*. Paris: Paul Paclot & C^{ie}.
- REIN, J. J.
1888 *Japan: Travels and Researches, undertaken at the cost of the Prussian Government*. London: Hodder and Stoughton.
1905 *Japan nach Reisen und Studien im Auftrage der Königlich Preussischen Regierung Dargestellt*. Leipzig: W. Engelmann.

- RENNIE, D. F.
1864 *The British Arms in North China and Japan*. London: John Murray.
- RIESMAN, David & Evelyn Thompson RIESMAN
1967 *Conversations in Japan*. New York: Basic Books.
- RITTNER, Geo. H.
1904 *Impressions of Japan*. London: John Murray.
- ROSENBERG, Alan and William J. O'NEILL
1966 *For men with Yen—A guide to the Japanese hostess system*. Tokyo: The Wayward Press.
- ROSS, C. Houghton, Rev. D. D.
n.d. *Women of the Orient—An account of the religious, intellectual, and social condition of women in Japan, China, India, Egypt, Syria and Turkey*. Nushvill, Tennessee: Cumberland Presbyterian Publishing House.
- RUBIN, Duane R.
1975 *Japan: Customs and Culture*. Milbrae: Celestial Arts.
- RUDOFKY, Bernard
1966 *The Kimono Mind*. New York: Doubleday & Co.
- 桜井錠二
1889 「女子の体育」『高名大家女子教育纂論』金松堂。
- SALE, Richard
1940 *Cardinal Rock*. London: Cassel & Co. Ltd.
- SANSOM, George B.
1950 *The Western world and Japan*. New York: Alfred A. Knopf.
- SCHWANTES, Robert S.
1955 *Japanese and Americans: a century of cultural relations*. The Council on Foreign Relations Inc. 『日本人とアメリカ人——日米文化交流百年史』石川欣一訳 創元社(1957)。
- SCHWEIGER-LERCHENFERD, Amand Freiherr von.
1904 *Die Frauen des Orients in der Geschichte, in der Dichtung und im Leben*. Leipzig: A. Hartleben.
- SCIDMORE, Eliza Ruhamah
1897 *Jinrikisha days in Japan*. New York: Harper & Brothers pub.
- SCOTT, A. C.
1960 *The flower and willow world; a study of the Geisha*. New York: Orion Press.
- SCOTT, George Ryley
1943 *Far eastern sex life: An Anthropological, Ethnological and Sociological Study of the Love Relations, Marriage Rites and Home Life of the Oriental People*. London: Gerald G. Swan.
- SCOTT, R.
1922 *The Foundations of Japan*. London: John Murray.
- SHEPHERD, Kathleen M.
1937 *The Land and Life of Japan*. London: Livingstone Press.
- SIMPSON, Colin
1957 *Picture of Japan, with a 'Philippine Interlude'*. Sydney: Angus and Robertson.
1959 *Japan; an intimate view*. New York: A. S. Barnes and Co., Inc.
- SLADEN, Douglas
1903 *Queer things about Japan*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co. Ltd.
- SLADEN, Douglas and Norma LORIMER
1905 *More Queer Things about Japan*. London: Anthony Treherne & Co.
- SMITH, George
1861 *Ten weeks in Japan*. London: Longman, Green.

SPALDING, J. W.

1855 *Japan, and around the world, an account of three visits to the Japanese Empire.* New York: Redfield.

SPENCER, Edmund

1851 *Travels in European Turkey, in 1850: Through Bosnia, Servia, Bulgaria, Macedonia, Thrace, Albania, and Epirus; with a visit to Greece and the Ionian Isles and a homeward tour through Hungary and the Slavonian provinces of Austria on the lower Danube.* 2 vols. London: Colburn and Co. pub.

STEAD, Alfred

1906 *Great Japan: A study of national efficiency.* London: John Lane.

STEINER, Jesse F.

1943 *Behind the Japanese Mask.* New York: The Macmillan Co.

STEINMETZ, Andrew

1860 *Japan and her people.* London: Routledge, Warne, and Routledge.

STRAELEN, H. VAN

1940 *The Japanese Woman Looking Foreward.* Tokyo: Kyo Bun Kwan.

STREET, Julian L.

1921 *Mysterious Japan.* London: William Heinemann.

SWAAN, Win

1965 *Japanese lantern.* London: Geoffrey Bles.

田中車一郎

1983 「ミス・グレゴリーとお風呂」『真世界』4: 8-9。

TAYLOR, Bayard comp.

1892 *Japan in our day.* New York: Charles Scribner's sons.

TAYLOR, Charles M. Jr.

1898 *Vacation days in Hawaii and Japan.* Philadelphia: George W. Jacobs.

TESSAN, François DE

1918 *Par les Chemins Japonais. Essais sur le vieux et le jeune Japon.* Paris: Plon Nourrit.

THOMPSON, Richard, Austin

1957 *The Yellow Peril 1890-1924.* Dissertation 24331.

THUNBERG, Caic Peter

1791-1793 *Resa uti Europa, Africa, Asia, förrätted åren 1770-1779.*

TILLEY, Henry Arthur

1861 *Japan, the Amoor, and the Pacific; with notices of other places, comprised in a voyage of Circumnavigation in the Imperial Russian Corvette "Rynda" in 1858-1860.* London: Smith Elder & Co.

TISSANDIER, M. Albert

1902 *Voyage autour du Monde: Inde et Ceylan, Chine et Japon 1887-1890-1891.* Paris: G. Masson Editeur.

TOMLIN, E. W. F.

1974 *The Last Country—My years in Japan.* London: Faber and Faber.

TORMIA

1928 *Voyage au Japon.* Paris: Eugène Figuière éditeur.

TRACY, Honor L. W.

1950 *Kakemono: A sketch book of post-War Japan.* London: Methuen & Co. Ltd.

TRONSON, J. M., R. N.

1859 *Personal Narrative of a Voyage to Japan, Kamtschatka, Siberia, Tartary and various parts of the coast of China; in H. M. S. Barracouta.* London: Smith, Elder & Co.

TUNAS, Myrra von

1911 *Anti-Japan, Wahrheitsgetreue Aufklärungen über das Land der aufgehenden Sonne, zum Nachdenken für Europäer.* Zurich: Franz Ketner.

- TYNDALE, Walter
 1910 *Japan and the Japanese*. London: Methuen & Co. Ltd.
- 上原浦太郎
 1929 『洋服通』 四六書院。
- VARENIUS, Bernhardus
 1649 *Descriptio Regni Japoniae*. Amsterdam. 『日本伝聞記』 宮内芳明訳 大明堂 (1975)。
- VAUGHAN, Josephine Budd
 1952 *The Land and People of Japan*. Philadelphia: J. B. Lippincott Co.
- VINES, Sherard
 1931 *Yofuku; or Japan in Trousers*. London: Wishart & Co.
- VOGT, Karl
 1928 *Japan—Handbücher des Weltverkehrs, Band 1*. Berlin: Carl Heymanns Verlag.
- WAINWRIGHT, Samuel H. Jr.
 1935 *Beauty in Japan*. New York: G. P. Putnam's sons.
- WAKE, C. Staniland
 1878 *The Evolution of morality: Being a history of the development of moral culture*. London: Trübner & Co.
 1880 *The Classification of the Races of Mankind*.
- WAKEFIELD, Harold
 1948 *New paths for Japan*. London: royal institute of International Affairs.
- WALWORTH, Arthur C.
 1966 (1946) *Black ships off Japan—The story of commodore Perry's expedition*. Hamden: Archon books. (New York: A. Knopf.)
- 渡辺四郎
 1905 『欧米礼儀風俗美談』 雲梯舎。
- WATSON, Gilbert
 1904 *Three Rolling Stones in Japan*. London: Edward Arnold.
- WATTS, Talbot, M. D.
 1852 *Japan and the Japanese: From the most authentic and reliable sources with illustrations of their manners, costumes, religious ceremonies, etc..* New York: J. P. Neagle.
- WEBSTER, Robert Grant
 1905 *Japan; From the Old to the New*. London: S. W. Partridge & Co.
- WILCOX, R. Turner
 1969 *The Dictionary of Costume*. London: B. T. Batsford.
- WILKES, Paget B. A.
 1913 *Missionary Joys in Japan or Leaves from my Journal*. London: Morgan & Scott Ltd.
- WITTE, H.
 1913 *Die Wunderwelt des Ostens; Reisebriefe aus China und Japan*. Berlin: Schöneberg.
- WOOLSON, Abba Goold (ed.)
 1874 *Dress-Reform: A series of lectures delivered in Boston on Dress as it Affects the Health of Women*. Boston: Roberts Brothers.
- WORMAN, Henry
 1973 (1908) *The real Japan—Studies of contemporary Japanese manners morals, administration, and politics*. Washington: Scholarly resources inc. (London: T. Eisher Unwin.)
- YANAGIDA, Kunio (comp.)
 1957 *Japanese Manners & Customs in the Meiji Era*. Charles, S. Terry tranl. Tokyo: Obunsha.
- YARWOOD, Doreen
 1978 *The Encyclopedia of World Costume*. London: B. T. Batsford.
- YOUNG, James R.
 1942 *Behind the Rising Sun*. New York: Doubleday, Doran & Co. Inc.

YOUNG, John Russell.

- 1879 *Around the World with General Grant: a Narrative of the visit of General U.S. Grant, Ex-President of the United States, to various Countries in Europe, Asia, and Africa, in 1877, 1878, 1879 to which are added certain conversations with General Grant on questions connected with American politics and History.* New York: Subscription Book Department.

YOXALL, H. W.

- 1966 *A Fashion of Life.* London: Heinemann.

第4章-1)

ADAMSON, Helen Lyon

- 1965 *Grandmother's Household Hints: as good today as yesterday.* London: Frederick Muller Ltd. e252

AGATE, James E.

- 1938 *Bad Manners.* London: John Miles. e120

ALLEN, David Elliston

- 1968 *British Tastes. An enquiry into the likes and dislikes of the regional consumer.* London: Hutchinson. e210

AN AMERICAN

- 1888 "*Good Form*" in *England.* New York: D. Appleton and Co. e127

ARGENTI, Philip P.

- 1953 *The Costumes of Chios: their development from the XVth to the XXth century.* London: B. T. Batsford Ltd. D140

ARIA, E.

- 1906 *Costume: Fanciful, historical and theatrical...* London: Macmillan & Co., Ltd. e269

ARMSTRONG, L. Heaton

- 1889 *Good Form; A book of every day etiquette.* London: F. V. White & Co. e94

- 1893 *The Etiquette of Party Giving: with Hints to Hostess and Guests.* London: Ward, Lock, Bowden & Co. e126

- 1908 *Etiquette=UP=to=Date.* London: T. Werner Laurie Ltd. e137

- 1913 *Etiquette and entertaining.* London: John Long Co. Ltd. e64

AUDRAN, H. M.

- 1897 *Les Usages et le Savoir-Vivre.* Paris: A. L. Guyot. e104

AU FAIT

- 1896 *Social Observances.* London: Frederick Warne & Co. e111

AUNT KATE

- 1932 *Aunt Kate's Household Annual.* London: John Long & Co. Ltd. e26

THE AUTHOR OF VOGUE'S BOOK OF ETIQUETTE

- 1929 *Vogue's Book of Brides.* New York: Doubleday, Doran & Co. Inc. e255

BAYARD, Marie

- 1887 *Weldon's Practical fancy dress.* London: Weldon & Co. e268

BRAY, John

- 1913 *All about Dress: being the Story of the Dress and Textile Trades.* London: T. Werner Laurie Ltd. e219

BURLEIGH, Constance

- 1925 *Etiquette Up to Date.* London: T. Werner Laurie Ltd. e160

BUTTRICK, Helen Goodrich

- 1923 *Principles of Clothing Selection.* New York: The Macmillan Co. e110

CAMPBELL, Lady Colin

- 1893 *Etiquette of Good Society.* London: Cassel & Co. Ltd. e125

CASSELL & Co.

- 1912 *Cassell's Penny Book of Dressmaking.* London: Cassell and Co. Ltd. e173

- 1913 *Cassell's Book of Fancy Needlework*. London: Cassell & Co. Ltd. e174
 CHITTY, Susan (ed.)
 1958 *The Intelligent Woman's Guide to Good Taste*. London: MacGibbon & Kee. e100
Complete Etiquette for Ladies
 1900 *Complete Etiquette for Ladies and...* London: Ward, Lock & Co. Ltd. e139
 A CONDÉ NAST PUBLICATION LTD.
 1958 *Vogue's Young Idea Patterns: New Fashions for Home Dressmakers*. 1(1). London: A Condé Nast Publication Ltd. e197
 1958-59 *Vogue's New Beauty Book*. London: The Condé Nast Publications Ltd. e256
 CONSTANTINE, Archimedes
 1899 *Consult me on all matters of Social Intercourse, and you won't rue it*. Agra: Ornamental Job Dress. e92
 COOK, Emily C.
 1901 *The Bride's Book*. London: Hodder and Stoughton. e259
 DABNEY, Edith and C. M. WISE
 1930 *A book of Dramatic Costume*. New York: F. S. Crofts & Co. e270
 DARCY, Daniel
 1885 *Sagesse de Poche*. Paris: Paul Ollendorff. e124
 DARIAUX, Geneviève A.
 1964 *Elegance: A complete guide for every woman who wants to be well and properly dressed on all occasions*. London: Frederick Muller Ltd. D100
 DAVIDSON, Augusta M. Campbell
 1904 *Present-day Japan*. London: T. Fisher Unwin.
 DAVIS, Dorothy V.
 1960 *The New Domestic Encyclopaedia*. London: Faber and Faber. e254
 DAVIS, Fred
 1881 *Our Visitors and how to amuse them*. London: Houlston & Sons. e141
 DECORUM
 1879 *A Practical Treatise on Etiquette and Dress of the Best American Society*. New York: J. A. Ruth & Co. e155
 DEPARTMENT OF TRADE AND INDUSTRY BUSINESS STATISTIC OFFICE
 1973 *Business Monitor PQ 445: Women's and girls' light outerwear, lingerie, infants' wear etc, First Quarter 1973*. London: HMSO. e274
 DOWDALL, Hon Mrs.
 1926 *Manners & Tone of Good Society*. London: A. & C. Black Ltd. e121
 THE DRAPERS' ORGANIZER
 1935 *The D. O. Fashion Buyers' Index*. London: The Draper's Organizer: The Fashion Trades' Magazine National Trade Press Ltd. e154
Etiquette for Ladies
 1855 *Etiquette for Ladies*. London: Frederick Warne & Co. e122, e123
The Etiquette of modern society
 1881 *The Etiquette of modern society: a guide to good manners in every possible situation*. London: Ward, Lock & Co. e140
Fairchild's Women's Wear Directory in London
 1923 *Fairchild's Women's Wear Directory in London*. London: Fairchild publication 1(1). e168
Fashion Buyers Diary
 1968 *Fashion Buyers Diary—Spring '68 Collections*. London: Fashion Forecast. e222
 FENWICK, Trevor
 1934 *Practical Tips on Fashion*. London: The Efficiency Magazine. e227
 FORESTER, The Hon. Mrs. C. W.

大丸 西歐人のキモノ認識

- 1925 *Success through Dress*. London: Duckworth. e229
1935 *This Age of Beauty*. London: Methuen & Co. Ltd. e54
- FRANKAU, Pamela
1933 *A Manual of Modern Manners*. London: Cresset Press. e164
- GIBSON, Hilda
1936 *The Art of Draping*. London: Blandford Press. D4
Good Housekeeping's Home Encyclopaedia
1951 *Good Housekeeping's Home Encyclopaedia*. London: Ebury Press. e249
- GORDON, Elizabeth A.
1903 "*Clear Round*" *A story of the world-travel*. London: Sampson Low, Marston & Co.
- GRANDMAISON, M^{me} DE
1893 *Le Savoir-vivre et ses usages dans la société actuelle ou guide de la bienséance*. Paris: Bernardin Béchét et fils. e89
- GREENWALL, Harry J.
1935 *The Strange Life of Willy Clarkson: An experiment in Biography*. London: John Long Ltd. e258
- GUERRE, Lavigne (Alice)
1914 *Dress Cutting: theoretical and practical, etc...* Leeds: E. J. Arnold & Son.
- GUNSAULUS, Helen C.
1923 *Japanese Costume*. Chicago: Field Museum of Natural History.
- HAMMERTON, J. A. (ed.)
1934 *Cassell's Home Encyclopaedia: A Practical Guide to all Homecraft*. London: Cassell & Co. Ltd. e177
- HARMUTH, Louis (ed.)
1921 *Fairchild's Illustrated Women's Wear Code*. New York: Fairchild Publishing Co. e12
- HOLT, Ardern
1896 *Fancy Dresses described; or, What to wear at Fancy Balls*. London: Debenham & Freebody. e205
1898 *Gentlemen's Fancy Dress: How to choose it*. London: Edward Arnold. e199
- HOLT, Emily
1901 *Encyclopaedia of Etiquette*. London: McClure, Phillips & Co. e84
1905 *The Secret of Popularity: How to achieve Social Success*. London: Methuen & Co. e136
- Home, Fashion & Leisure*
1970-1975 *Home, Fashion & Leisure*. London: McShane & Co. 3(3)-4(8). e204
- HOPTON, Ralph Y. & Anne BALLIOL
1946 *Bed Manners: How to bring sunshine into your nights*. London: The Citadel Press. e207
- HOWARD, Lady Constance
1885 *Etiquette: what to do, and how to do it*. London: F. V. White & Co. e119
- HUMPHRY, Mrs. C. E.
1897 *Manners for Women*. London: James Bowden.
- JONES, Candy
1964 *Look Your Best*. New York: Harper & Row Publisher. e195
- Joy, Lillian
1907 *The Well-Dressed Woman*. London: Cassell and Co. Ltd. e145, e105
- KAY, Hether
1961 *A New Look at Marriage and the Home*. London: Educational Productions Ltd. e208

- KAYE, William
 1911 *When Married Life gets dull.* London: C. Arthur Pearson. e260
- KEEN, Liane
 1965 *I haven't a Thing to wear: A practical handbook on how to dress.* London: Hodder & Stoughton. e201
- KEFGEN, Mary and Phyllis, T. SPECHT
 1971 *Individuality in clothing selection and personal appearance: A guide for the consumer.* New York: The Macmillan Co. e251
- KINGSLAND, Mrs. Burton
 1901 *Etiquette for all occasions.* London: Doubleday, Page & Co. e85
- KLICKMANN, Flora
 1898 *How-to behave: A Handbook of Etiquette for All.* London: Ward, Lock & Co. e107
 1903 *Etiquette of To-Day.* London: R. S. Cartwright. e138
- KNEELAND, Natalie
 1925 *Aprons and House Dresses.* Chicago: A. W. Shaw Co. e176
The Lady at Home and Abroad
 1898 *The Lady at Home and Abroad.* London: Abbot, Jones & Co. Ltd. e91
- A LADY IN SOCIETY
 1907 *The New Book of Etiquette.* London: Cassell & Co. Ltd. e128
Let's Dress Up!
 1949 *Let's Dress Up!: Dressing up with costumes of many countries.* London: Edinburgh House Press.
- LEVERTON, Mrs. Waldemar
 1904 *Little Entertainments: and how to manage them.* London: C. Arthur Pearson Ltd. e131
 1910 *Housekeeping Made Easy: A handbook of household management appealing chiefly to the middle-class housekeeper.* London: George Newnes Ltd. e216
- THE LOUNGER IN SOCIETY
 1881 *The Glass of Fashion: A Universal Handbook of Social Etiquette and Home Culture for Ladies and Gentlemen.* London: John Hogg. e83
- LUND, Gilda
 1962 *Your Dress.* London: Longmans. e246
- LUTES, Della Thompson
 1923 *The Gracious Hostess: A book of etiquette.* Indianapolis: The Babbs-Merrill Co. e162
- LUXMOORE, Marjory Mrs.
 1911 *A Dictionary of Etiquette.* London: Cassell & Co. Ltd. e193
- LYON, Massey Mrs.
 1927 *Etiquette: A Guide to Public and Social Life.* London: Cassel & Co. Ltd. e117
Manners for All
 1898 *Manners for All: A Complete guide to the Rules and Observances of Good Society.* London: Ward, Lock & Co. Ltd. e106
- MAR, Walter Del
 1902 (1904) *Around the World Through Japan.* New York: The Macmillan Co. (London: A. & C. Black.)
- A MEMBER OF THE ARISTOCRACY
 1902 *Manners and Rules of Good Society, or Solecisms to be avoided.* London: Frederick Warne & Co. e129
 1929 *Manners and Rules of Good Society.* London: Frederick Warne & Co. Ltd. e134

- MOORE, Doris & June MOORE
1932 *The Bride Book or Young Housewife's Compendium*. London: Garald Howe. e178
- MOORE, June & Langley DORIS
1936 *Our Loving Duty; or the young housewife's compendium*. London: Rich & Cowan Ltd. e234
- NACLA
1898 *Dictionnaire du Savoir-Vivre*. Paris: Ernest Flammarion. e88
- NATIONAL MARRIAGE GUIDANCE COUNCIL
1956 *All about your Wedding*. London: National Marriage Guidance Council. e285
- OLIPHANT
1878 *Dress*. London: Macmillan & Co. e98
- ONE OF THE ARISTOCRACY
1902 *Etiquette for Women. a book of modern modes and manners*. London: C. Arthur Pearson Ltd. e133
- PEEL, C. S. Mrs.
1905 *Design for Fancy Dresses*. London: Beeton & Co. Ltd. e271
- PICKEN, Mary Brooks
1939 *The Language of Fashion. Dictionary and digest of fabric, sewing and dress*. New York: Mary Brooks Picken School. e211
- POPENOE, Paul B.
1927 *Modern Marriage. A handbook*. New York: The Macmillan Co. e250
- POST, Emily
1922 *Etiquette in society, in business, in politics and at home*. New York: Funk & Wagnalls Co. e75
1931 *Etiquette. "The blue book of social usage"*. New York: Funk & Wagnalls Co. e156
- PRITCHARD, Mrs. Eric
1902 *The Cult of Chiffon*. London: Grant Richards. e36
- PUYO, C.
1902? *Costumes d'Atlier*. Z254
- REBOUX, Paul
1930 *Le nouveau savoir-vivre*. Paris: Ernest Flammarion. e114
- REEVE, Amy J.
1919 *Practical Home Millinery*. London: Longmans Green & Co. e172
- RINGO, Fredonia Jane
1924 *Girls and Juniors' Ready-to-wear*. Chicago: A. W. Shaw Co. D155
- RITTENHOUSE, Anne
1924 *The Well-Dressed Woman*. New York: Harper & Brothers Pub. e108
- RITTNER, Geo H.
1904 *Impressions of Japan*. London: John Murray.
- RIVES, Hallie Ermine
1926 *The Complete Book of Etiquette: With Social Form for All Ages and Occasions*. Philadelphia: The John C. Winston. e118, e189
- RIVKIN, David
1926 *The Art of Dressing well*. London: The Dorland Agency Ltd. e101, D106
- RYAN, Mildred Graves
1949 *Your Clothes and Personality*. New York: Appleton-Century-Crofts, Inc. e200
- SCHILD, Marie (ed.)
1881 *Female Characters suitable for Fancy Costume Balls*. London: Samuel Miller. e273
1914 *Schild's Fancy Costumes for ladies and gentlemen*. London: M. Miller. e272

- SCOTT, Hugh
 1930 *Good Manners and Bad*. London: Ernest Benn Ltd. e115
- SEYMOUR, Anne
 1915 *A.B.D. of Good Form*. New York: Harper & Brothers Pub. e62, e185
- SIMPLICITY PATTERNS LTD. (ed.)
 1964 *Simplicity Pattern Book*. London: Simplicity Patterns Ltd. 1(1). e196
- SMITH, F. Berkeley
 1903 *The City of the Magyar*. London: T. Fisher Unwin. e182
- STATE, Dorothy
 1935 *The Bride's Book*. London: The Bride's Book Co. Ltd. e253
- STORY, Margaret
 1924 *How to Dress Well*. New York: Funk & Wagnalls Co. e99
- STURM, Mary Mark & Edwin H. GRIESER
 1962 *Guide to Modern Clothing*. New York: McGraw-Hill Book Co. Inc. e242
- TATE, Mildred Thurow & Oris GLISSON
 1961 *Family Clothing*. New York: John Wiley & Sons. Inc. e247
- TERRY, Eileen
 1925 *Etiquette for All: Man, Woman or Child*. London: W. Foulsham & Co. Ltd, (Foulsham's Home Library.) e186
- TROUBRIDGE Laura, Lady
 1926 *The Book of Etiquette*. 2 vols. London: The Associated Bookbuyer's Co. e132
 1939 *Etiquette and Entertaining*. London: The Amalgamated Press Ltd. e115
- VALLÉE, Elise
 1925 *The Well-dressed Woman's Do's and Dont's*. London: Methuen & Co. Ltd. e102
- VERNON, Aline
 1893 *La Distinction Française*. Paris: G. Richard. e135
- WADDEVILLE, M^{me} DE
 1887 *Le Monde, et ses Usages*. Paris: A. Hennuyer. e93
- What to Do*
 1897 *What to Do and What to Say in France*. London: Whittaker & Co. e113
- WHEELER, Joan
 1932 *The New Home Encyclopaedia*. London: Odhams Press. e217
- WILCOX, R. Turner
 1969 *The dictionary of costume*. London: B. T. Batsford.
- WILSON, Barbara
 1959 *Complete Book of Engagement and Wedding Etiquette*. New York: Hawthorn Books Inc. e233
- WINTERBURN, Florence Hull
 1914a *Novel Ways of Entertaining*. New York: Harper & Brothers Pub. e63
 1914b *Principles of Correct Dress*. New York: Harper & Brothers Pub. e109
- The Woman's Home Magazine*
 1914 *The Woman's Home Magazine*. London: Charles Argles. e159
- WOOD, Mrs. Mildred W. and Ruth LINDQUIST *et al.*
 1932 *Managing the Home*. Boston: Houghton Mifflin Co. e257

第4章-2)

- A.B.C. of Dressmaking*
 1935 *A.B.C. of Dressmaking—a complete Guide for the Home Dressmaker*. London: Geo. Newnes Ltd. e52

ALDRICH, Winifred

1976 *Metric Pattern Cutting*. London: Mills & Boon Ltd. f21

AMERICAN-MITCHELL FASHION PUBLISHERS

1938 *The New American-Mitchel Text=Book of Designing, Patternmaking and Grading Ladies' coats, suits, dresses, skirts, waists*. New York: American-Mitchell fashion Publishers. D174

THE ASSOCIATION OF TEACHERS OF DOMESTIC SUBJECTS

1943 *Make do mend*. London: The Association of Teachers of Domestic Subjects. e1

AUNT, Kate

1933 *Aunt Kate's Home Dressmaking Book*. London: John Long & Co. Ltd. e60

AYRES, Marjorie

1945 *Clothes for You and your Baby*. Bristol: John Wright & Sons Ltd. e4

BALDT, Laura I.

1917 *Clothing for Women: Selection, design, construction. a practical manual for school and home*. Philadelphia: J. B. Lippincott Co. D76

1935 *Clothing for Women: Selection and Construction, etc.* Chicago: J. B. Lippincott Co. e56

BALDT, Laura I. and Helen D. HARKNESS

1931 *Clothing-Simplicity-Economy-for the High School Girl*. Chicago: J. B. Lippincott Co. e30

BANE, Allyne

1973 *Creative Clothing Construction*. New York: McGraw-Hill Book Co. f18

BANKS, Annie E.

1893 *Practical System of "Teach Yourself Dress Cutting."* e78

1902 *Self-Teaching Dress-cutting for Dressmakers and Technical Classes*. Romford: Wilson and Whitworth Ltd. e37

1923 *Banksian Dress-Cutting for technical classes and evening schools also for dressmakers and the home and specially arranged for the city and guild of London institutes examinations*. Romford: A. E. Banks. D59

BERGE, Madam

1909 *Every Woman Her Own Dressmaker: The Moulding Method of Practical Dressmaking*. London: Hodder and Stoughton. e163

BISHOP, Edna Bryte and Marjorie Stotler ARCH

1959 *The Bishop Method of Clothing Construction etc...* London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. D81

1964 *Fashion Sewing by the Bishop Method, etc.* London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. e276

BOGARD, Ena Whyll

1944 *Useful Hints from Odds and Ends*. London: John Gifford Ltd. e13

BOYLAN, Miss

1902 *The "New Century" School of Dressmaking*. Boston: The New Century School of Dresscutting. e41

BRADBURY, R. & H. BRADBURY

1893 *Dress Cutting Chart for Ladies' Scientific Square Measurement System*. London: "New Mode" Pattern Depot and Scientific Dress Cutting Room. e82

BRADLEY, Carolyn G.

1940 *Costume Design: An introductory outline with aids for students and teachers*. Scranton: International Textbook Co. D180

BRAY, Natalie

1962 *Dress Pattern Designing: The Basic Principles of Cut and Fit*. London: Grosby Lockwood & Son Ltd. D207

1964 *More Dress Pattern Designing*. London: Crosby Lockwood & Son Ltd. D144

- BRINLEY, Rosemary
 1950 *Home Dressmaking*. London: W. & G. Foyle Ltd. D212
- BRISCOE, Jessie
 1936 *Principles of Dressmaking*. London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. D171
- BROCKMAN, Helen L.
 1965 *The Theory of Fashion Design*. New York: John Wiley & Sons Inc. f4, D89.
- BROWN, Clara M.
 1927 *Clothing Construction*. Boston: Ginn & Co. e3
- BROWN, Clara M. & Ethel R. GORHAM
 1934 *Clothing Construction*. Boston: Ginn & Co. e53
- BROWNE, M. Prince
 1902 *Dress-Cutting, Drafting, and French Pattern Modelling*. London: Archibald Constable & Co. Ltd. e39
 1902 *The Practical Work of Dresscutting & Tailoring*. London: Horace Cox. e148, e149
 1907 "Up-to-Date" *Dress cutting & Drafting with Diagrams*. London: Horace Cox. D15
 1913 *The practical Work of Dresscutting & Tailoring*. London: Horace Cox. e123
- BUCKLEY, Emma
 1903 *Every Woman's Guide to Practical Dresscutting and Making*. Bury. e147
- BULL, Winefride M.
 1963 *Introduction to Needlework*. London: Longmans, Green & Co. Ltd. e279
- BUNTING, R.
 1931 *Dressmaking: A Practical Manual for School and Home*. Melbourne: Whitcombe & Tombs Ltd. e55
- BUTLER, Margaret G.
 1958 *Clothes: Their Choosing, Making and Care*. London: B. T. Batsford Ltd. e244
 1965 *Clothes: Their Choosing, Making and Care*. London: B. T. Batsford Ltd. e280
 1975 *Clothing: Their Choosing, Making and Care*. London: B. T. Batsford Ltd. f20
- Butterick Dressmaking Book*
 1940 *Butterick Dressmaking Book*. New York: Butterick Co. Ltd. D176
- THE BUTTERICK PUBLISHING COMPANY
 1927 *The Art of Dressmaking*. New York: The Butterick Publishing Co. D154
 1928 *Dress Construction—with the Aid of patterns*. London: The Butterick Publishing Co. e57
 1930 *Paris frock at home*. New York: The Butterick Publishing Co. D116
 1944 *Butterick Sewing and Dressmaking Book*. New York: The Butterick Publishing Co. D143, e5
 1975 *The Vogue Sewing Book*. New York: Vogue Patterns. f16
- BUTTRICK, Helen Goodrich
 1923 *Principles of Clothing Selection, etc.* New York: The Macmillan Co. e232
- CARLISLE, E. M. F.
 1902 *A Practical Method of Dress Cutting for Adults*. London: Swan Sonnenschein & Co. Ltd. e18
- CARSON, Byrta
 1949 *How You Look and Dress*. New York: McGraw-Hill Book Co. Inc. e153
- CARTER, Lillian
 1911 *Plastic Millinery and Miniature Dressmaking*. London: Cassell and Co. Ltd. e87
- CASSELL & Co.
 1912 *Cassell's Penny Book of Dressmaking*. London: Cassell and Co. Ltd. e173

- CHADWICK, Luie M.
1926 *Fashion Drawing & Design: A Practical Manual for Art Student and Others.* London: B. T. Batsford Ltd. D137
- CHARD, Therese la
1917 *How to make New Clothes from Old.* London: Evans Bros. e167, D72
- CHESSER, Dr. Eustace and Olive HAWKS
1951 *Life Lies Ahead: A Practical Guide to Home-Making and the Development of Personality.* London: George G. Harrap & Co. Ltd. e235
- CLARK, Winifred
1968 *Dressmaking Techniques for Trade Students.* London: B. T. Batsford Ltd. D149
- CLIFFE, Valerie
1958 *Making your own Clothes.* London: Edward Arnold Ltd. e275
- THE CONDÉ NAST PUBLICATION LTD.
1932 *Vogue's Guide to Practical Dressmaking.* New York: The Condé Nast Publication Ltd. e71
1934 *Vogue's Guide to Smart Dressmaking.* New York: The Condé Nast Publication Ltd. e69
- COOKE, J. C. & H. M. KIDD
1914 *Dressmaking in the School.* London: Longmans, Green and Co. e95
- COOKE, S. A.
1891 *Ladies' own Charts.* London: ? e80
- COREY, Marian
1951 *McCall's Complete Book of Dressmaking.* New York: The Greystone Press. f17
1954 *McCall's Complete Book of Dressmaking.* London: Macdonald & Co. Ltd. D232
- COTON, Gertrude
1927 *Progressive needlecraft and Simple Pattern Making.* London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. D126
- COUNTISS, Carolyn
1928 *Clothes-Making Simplified: The Nu-Way Course in Dressmaking.* Chicago: B. W. Cooke Co. D133
1928 *Pattern Making Simplified: The Nu-Way Course in Pattern Drafting.* Chicago: B. W. Cooke Co., Publishers. D131
- CRAIG, Margaret
1906 *Dresscutting: The "Empire" System of Dress and Jacket Cutting.* Glasgow: Western School of Dress. e143
- CRUTCHLEY, Diana
1958 *Quick & easy dressmaking.* London: Museum press Ltd. e288
- CUNNINGTON, C. Willet
1941 *Why Women Wear Clothes.* London: Faber and Faber Ltd. e14
- DARIAUX, Geneviève A.
1964 *Elegance.* London: Frederick Muller Ltd. e191, D100
- DAVENPORT, E. M.
1929 *The Professional Touch for the Home Dressmaker...* London: Coming Fashion. D82
- DAVIS, Jeanette E.
1887 *Measure-Fitting and Cutting Out—for Ladies and Children.* Manchester: "Measure-Fitting & Cutting Out" Office. Miss Davis, Technical School. e32
1902 *The Elements of Modern Dressmaking—for the Amateur and Professional Dressmaker.* London: Cassell & Co. Ltd. e25
- DAVISON, Irene & Agnes M. MIALL
1935 *Needlework and Crafts: Every Woman's Book on the Arts of Plain Sewing, Embroidery, Dressmaking, and Home Crafts.* London: George Newnes Ltd. D196

- DELLAFERA, Phillip
 1929 *The Art of Garment Making*. London: John Williamson Co. Ltd. D138
 1952 *A First Course in Ladies' Garment Cutting*. London: The Tailor and Cutter Ltd. D243
- Designs and Cut*
 1937 *Designs and Cut*. London: The Marshall Press Ltd. D179
- DOOLEY, William H.
 1930 *Clothing and Style*. Boston: D. C. Heath & Co. D129
 1934 *Economics of Clothing and Textiles—The Science of the Clothing and Textile Business*. Boston: D. C. Heath & Co. e23
- Drafting and Pattern Designing*
 1924 *Drafting and Pattern Designing, etc.* Scranton: Woman's Institute of Domestic Arts and Sciences Inc. e241
- EASON, L. E.
 1953 *Clothing: A Practical Course for Post Primary Schools*. London: Whitcombe & Tombs Ltd. D221
- Easily Made Frocks for Little Girls*
 1932 *Easily Made Frocks for Little Girls*. London: Geo. Newnes Ltd. e65
- EDDY, Josephine F. & Wiley ELIZABETH C. B.
 1932 *Pattern and Dress Design, etc.* Boston: Houghton Mifflin Co. e187
- THE EDITOR & STAFF OF THE "LADIES TAILOR"
 1928 *Ladies' Garments: How to Cut and Make them with Sections on Cutting from the Cloth*. London: The John Williamson Co. Ltd. D117
 1935 *Pocket Edition of the Cutters' Practical Guide to Cutting All Kinds of Ladies' Jackets, Coat Frocks, Overgarments, Skirts, etc.* London: Tailor and Cutter Ltd. e237
- ELLIOTT, Kathleen M.
 1956 *Dressmaking on a small income*. London: Hutchinson. e180
- ENGELMANN, Gustav
 1904 *The American Garment Cutter for Women, etc.* New York: American Fashion Co. e28
- ERWIN, Mabel D.
 1957 *Clothing for Moderns*. New York: The Macmillan Co. e202
- ERWIN, Mabel D. & Lila A. KINGHEN
 1969 *Clothing for Moderns*. London: The Macmillan Co. e254
- FEARNSIDE, Gertrude
 1930 *Constructive Pattern Making*. London: Sir Isaac Pitman & Sons. D135
- FERNALD, Mary
 1937 *Costume Design & Making: A Practical Handbook*. London: Adam & Charles Black. D181
- FIELD, Bradda
 1923 *Clothes that count, and...* London: John Murray. e225
- FLEMMING, Jane A.
 1912a *The "A. L." Garment Patterns for Infants' shortening Clothes*. Leeds: E. J. Arnold & Son Ltd. e95
 1912b *Garment Making: The Cutting-out and making-up of Common-sense Comfortable Clothing for Children*. Leeds: E. J. Arnold & Son Ltd. e97
- FONTAINES, M^{me} Jeanne Trois
 1933 *Dressmaking; Designing, Cutting & Fitting*. London: Virtue & Co. Ltd. e34
- FOX, Joseph
 1910a *Manual of Dresscutting for Continuation Schools*. Glasgow: Rodmure Dresscutting Association Ltd. e90

- 1910b *Manual of Dresscutting for Day Schools.* Glasgow: Rodmure Dresscutting Association Ltd. e90 G-1
- 1910c *Manual of Underclothing Cutting for Elementary Schools.* Glasgow: Rodmure Dresscutting Association Ltd. e90 A
- 1912a *Manual of Dresscutting for Day Schools. Book II.* Glasgow: Rodmure Dresscutting Association Ltd. e90 G-2
- 1912b *Manual of Underclothing Cutting. Book I.* Glasgow: Rodmure Dresscutting Association Ltd. e90 B
- 1913 *Manual of Jacket Cutting for Continuation Schools. Book IV.* Glasgow: Rodmure Dresscutting Association Ltd. e90 F
- 1914a *Manual of Coat Cutting, etc. Book IV.* Glasgow: Rodmure Dresscutting Association Ltd. e90 E-1
- 1914b *Manual of Dresscutting for Continuation Schools.* Glasgow: Rodmure Dresscutting Association Ltd. 4th edition. e90
- 1916 *The "Rodmure" No. II. System of Blouse and Skirt Cutting.* Glasgow: Rodmure Dresscutting Association Ltd. D52
- 1927 *Manual of Dresscutting. Book III.* Glasgow: Rodmure Dresscutting Association Ltd. e90 C
- FRANKS, Catherine
- 1940 *The Pictorial Guide to Modern Home Dressmaking.* London: Odhams press Ltd. D173
- 1942 *New Clothes from Old.* London: Evans Brothers Ltd. e22
- FRIEDMANN, Albert
- 1939 *Pattern Drafting and Dress Designing: A practical textbook of instruction for designing working patterns for all types of made-to-measure garments for ladies and girls.* London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. D189
- FULLER, E. F. & S. CLART
- 1960 *Pattern Grading.* London: The Tailor and Cutter Ltd. e283
- GALBRAITH, M. E. D.
- 1937 *Ladies' Tailoring Simplified.* London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. D201
- THE GOOD HOUSEKEEPING INSTITUTE
- 1945 *Good Housekeeping Institute's Book of How to do Your own Home Valeting.* London: Gramol Publications Ltd. e20
- GOODMAN, Bonnie V.
- 1953 *Tailoring for the Family.* New York: Prentice-Hall, Inc. D219
- GORDON, Elizabeth A.
- 1903 *"Clear Round" A story of the world-travel.* London: Sampson Low, Marston & Co.
- GOSTICK, M. G.
- 1922 *Practical Pattern Drafting.* London: Nisbet & Co. Ltd. e231
- GOUGH, E. L. G.
- 1934 *Processes in Dressmaking.* Sydney: Angus & Robertson Ltd. D161
- GRAEF, Judy Lynn & Joan Buescher STROM
- 1976 *Concepts in Clothing.* New York: Webster Division, McGraw-Hill Book Co.
- GRAHAM, Theodora
- 1939 *Needlework in Education.* London: Longmans, Green & Co. D125
- GREEN, F. Whitworth
- 1937 *The Art of Fitting Ladies' Garments.* London: The Tailor & Cutter Ltd. D163
- 1952 *The Art of Fitting Ladies' Garments.* London: The Tailor and Cutter Ltd. D200
- GREENFELL, Mrs. Henry
- 1890 *Under Linen Cutting Out: with Simple System for Class & Self-Teaching.* London: Longmans, Green & Co. e77

- GRIFFITH, Mrs. E.
 1931 *Progressive Pattern Making and Cutting Out for Needlework*. London: Oxford University Press. e58
- GROHÉ, Madam
 1906 *The Anglo-Parisian School of Scientific Dress Cutting, Draping and Design*. Glasgow: The Anglo-Parisian School of Dress. e144
- GUERRE, Alice
 1907 *Manual of Dress-cutting*. The Macmillan & Co. Ltd. e151
- HALL, Mabel Lillian
 1928 *Fashion Drawing and Dress Design: A Handbook dealing with Proportion, Construction, Pose and Draping of the Adult and Child Figure*. London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. D139
- HALL, Marion
 1954a *Let's Make Some Baby Clothes*. London: W. Foulsham & Co. Ltd. D209
 1954b *Let's Make Some Undies*. London: W. Foulsham & Co. Ltd. D210
- HAMBRIDGE, Ethel R.
 1917 *Simple Dressmaking*. London: Sir Isaac Pitman & Sons. D66
- HANNA, Agnes K.
 1922 *Pattern Making*. New York: The Macmillan Co. Ltd. e224
- HARLOW, Eve
 1973 *The Basic Book of Sewing*. London: Octopus Books Ltd. f11
- HARMUTH, Louis (ed.)
 1921 *Fairchild's Illustrated Women's Wear Code*. New York: Fairchild Publishing Co.
- HASLAM, G. A. & F. A.
 1924 *The "Haslam" system of dresscutting, etc.* 2 vols. Boston: ? D6
- HAWKINS, Thomas
 1893 *Self-Teaching Directions for the London A.B.C. Tailor System for Dress-Cutting*. London: W. Straker. e81
- HEAGNEY, Eileen (ed.)
 1953 *Quick and Easy Sewing*. New York: Butterick Co. D217
- HELFGOTT, Roy B.
 1959 *Women's and Children's Apparel*. Cambridge: Harvard University Press. e188
- HEPWORTH, M. F.
 1960 *Dress designing*. London: The English Universities Press. D102
- HICKS, Ada
 1913 *Garment Construction in Schools*. London: The Macmillan & Co. Ltd. e220
- HILLHOUSE, Marion S.
 1963 *Dress Selection and Design*. New York: The Macmillan Co. D93
- HIRD, Anna L.
 1937 } *Principles and Practice of Needlework and Dressmaking*. London: Anglo-Scottish
 1943 } Press Ltd. D194, e9
- HOLDING, T. H.
 1885 *Ladies' Cutting Made Easy*. London: T. H. Holding. D47
 1890 *Ladies' Garment Cutting*. London: T. H. Holding Pub. and Pattern Office. D40
- HOLT, Ardern
 1896 *Fancy Dresses described, ...* London: Debenhan & Freebody. e205
- HOPKINS, J. C.
 1901 *The 20th Century System of Ladies' Garment Cutting, etc.* London: Minister & Co. D45
- HOPKINS, Marguerite Stotts
 1935 *Dress Design and Selection*. New York: The Macmillan Co. D166

HORNER, Isabel

1939 *Teach Yourself Dressmaking*. London: The English Universities Press. D164
How to Cut and Make Ladies' Garments

1933 *How to Cut and Make Ladies' Garments*. London: The Tailor and Cutter Ltd. e70
How to Make Children's Garments

1928 *How to Make Children's Garments: The Modern Singer Way*. New York: Singer Sewing Machine Co. Inc. D111

HOWARD, Constance

1952 *Complete Dressmaking in Pictures*. London: Odham's Press Ltd. D229

HOWLETT, Dorothy M.

1937 *The Principles of Pattern-Making and Garment-Cutting*. London: University of London Press. D183

HOWMAN, Gilian M. C.

1906 *Dressmaking Note Book*. Exeter: James Townsend & Sons. e142

HULME, William H.

1944 *Principles of Dress Design*. London: The Maker-up. e10

HUTTON, Jessie & Gladys CUNNINGHAM *et al.*

1979 *Singer Sewing Book*. London: Hamlyn. f1

ILEY, J. T.

1918 *Garment Making by the Machine: A Practical Treatise describing in detail in Making up of lounges, vests, trousers, morning coats, chesterfields, etc. and showing how and where the sewing machine may be used to advantage*. London: The John Williamson. D64

Improved Scientific Dressmaking Chart

1890 *Improved Scientific Dressmaking Chart*. e79

INNES, Isabella

1913 *Scientific Dressmaking and Millinery*. Toronto: I. Innes. e212

INTERNATIONAL EDUCATIONAL PUBLISHING CO.

1951 *Underwear and Lingerie*. Scranton: The Woman's Institute of Domestic Arts & Sciences, A Division of International Correspondance School. D247

JAFFE, Hilde and Nurie RELIS

1973 *Draping for fashion design*. Reston: Reston Publishing Co. Inc. f7

JALLENT, N.

1936 *Secret of Cutting Ladies' Garment*. London: Jallent School of Cutting. D177

JAQUE, Line

1961 *Sew the French Way*. London: Mills & Boon Ltd. D248

JERMAN, Betty

1959 *Home Dressmaking: And How to Read a Pattern*. London: Oldbourne. e165

KELLAND, C. M.

1925 *The Kelby-Kelland System of Dress-Cutting*. Port Elizabeth: Advertiser Ltd. D62

KENDALL, E. G.

1892 *Instructions for the Cosmopolitan System of Dresscutting*. e76

KETTUNEN, Marietta

1941 *Fundamentals of Dress*. New York: McGraw-Hill Book Company, Inc. e2

KING, Eleanor

1952 *Successful Home Dressmaking*. London: C. Arthur Pearson Ltd. D218

KINNE, Helen & Anna M. B. S. COOLEY

1921 *Shelter and Clothing. A Textbook of the Household Arts*. New York: The Macmillan Co. e215

KNEELAND, Natalie

1925a *Aprons and House Dresses*. Chicago: A. W. Shaw Co. e176

1925b *Negligees*. Chicago: A. W. Shaw Co. D120

- KNIGHTS, Mrs. F. H.
 1889 *The "European" System of Dresscutting by Measure*. Leeds: Harrison & Waide. e19
- LADBURY, Ann
 1970 *The Batsford Book of Sewing*. London: B. T. Batsford Ltd. f15
- Laurie's Household Encyclopaedia
 1931 *Laurie's Household Encyclopaedia*. London: T. Werner Laurie Ltd. e266
- LEACH'S PUBLICATIONS, LTD.
 1934 *Leach's Complete Dressmaking*. London: George Newnes Ltd. e72
- LEVERTON, Mrs. Waldemar
 1907 *Dressmaking Made Easy—with chapters on Millinery*. London: George Newnes Ltd. e48
- LEWIS, Dora S. & Mabel Goode BOWERS et al.
 1960 *Clothing Construction and Wardrobe Planning*. New York: The Macmillan Co. e236
- LEY, Sandra
 1972 *America's Sewing Book*. New York: Charles Scribner's Sons. fs
- LÖFVALL, Madame
 1908 *Simple Lessons in Dressmaking: How to Cut, Fit, and Finish a Dress*. London: Walter Scott Publishing Co. Ltd. e35
- LOVETT, Alice G.
 1913 *Instructions*. London: ? e214
- MACTAGGART, Ann
 1975 *Dressmaking in Detail*. London: B. T. Batsford Ltd. f9
- MANSFIELD, Evelyn A.
 1955 *Clothing Construction*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd. D228
- MARSHALL, A. C. (ed.)
 1935 *Housewife's Handy Book: A Complete Library of Information for every Practical Homemaker*. London: George Newnes Ltd. e267
- MARTIN, Alma
 1953 *Let's Make a Dress*. London: W. Foulsham & Co. Ltd. D211
- MASON, Gertrude
 1935 *Tailoring for Women*. London: A. & C. Black Ltd. e68
 1937 *Gertrude Mason's Pattern-Making Book. The Principles of Pattern-cutting applied to lingerie, blouse, skirts and sportswear*. London: A. & C. Black Ltd. D185
 1943 *New Life for old Clothes*. London: A. & C. Black Ltd. e21
- MATTHEWS, Mary Lockwood
 1926 *Clothing and Textiles: First lesson in clothing and textiles, planning and furnishing the bedroom, and clothing budgets*. Boston: Little, Brown & Co. D115
- MCCALL CORPORATION
 1938 *Dressmaking made easy*. New York: McCall Corporation. D178
 1958 *McCall's New Complete Book of Sewing and Dressmaking*. London: Nicholas Kaye Ltd. e264
- MCDONALD, Geraldine
 1961 *You and Your Clothes*. London: Mills & Boon Ltd. e243
- MCDOWELL, William
 1901 *McDowell Course of Instruction by Mail for Garment Drafting*. New York: The McDowell Co. e17
- MEEHAN, Abby
 1911 *The Ladies' All-British Fabric and Fashion Book*. London: The Selkirk Press. e61

- MELLIAR, Margaret
1968 *Pattern Cutting*. London: B. T. Batsford. f19
Meridian Method of Dresscutting and Tailoring
1924 *Meridian Method of Dresscutting and Tailoring*. Nelson: Meridian School. D61
- MIALL, Agnes M.
1933 *Home Dressmaking*. London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. e86
- MINETTA, Madam
1955 *Models Superb: 48 Designs in Dressmaking to choose from*. D234
- MONAHAN, Andrew M.
1939 *The Simplicity Folding System—of the Art and Science of Designing, Drafting and Cutting Ladies' Garments*. Sydney: Angus and Robertson. e12
- MORGAN, Fay
1980 *Clothes without Patterns*. London: Mills & Boon Ltd. f13
- MORRIS, F. R.
1936 *Ladies' Garment Cutting and Making*. London: The New Era Publishing Co. Ltd. D199, e11
- MORTIMER-DUNN, Gloria
1972 *ABC's of Fashion & Design*. New York: W. Foulsham & Co. Ltd. f8
- MORTON, Grace Margaret
1955 *The Arts of Costume and Personal Appearance*. New York: John Wiley & Sons Inc. e278
1964 *The Art of Costume and Personal Appearance*. New York: John Wiley & Sons, Inc. D97
- MOULTON, Bertha
1967 *Garment-cutting and Tailoring for Students*. London: B. T. Batsford Ltd. D80
- NAYLOR, Brenda
1966 *The Technique of Dress Design*. London: B.T. Batsford Ltd. D96
1975 *The Technique of Fashion Design*. London: B. T. Batsford Ltd. f10
- NEIL, Georgina
1910 *The "Neil" system for Dress Cutting, Ladies' Tailoring, Blouses, Children's Dresses, etc.* Glasgow: Albany Chambers. e262
- NICHOLSON, Rémy
1936 *A Textbook of Dressmaking*. London: Blackie & Son Ltd. D203
- ORENSTEIN, I.
1910 *The "Fit-Cut" system for cutting Ladies' Garments*. Midland: ? e213
- PARKER, Winifred C. & D.
1960 *Essentials of modern dressmaking*. London: Evans brothers Ltd. e286
- PARKER, Winifred & Dora SETON
1951 *The Kingsway Book of Dressmaking*. London: Evans Brothers Ltd. D206
1952 *Essentials of Pattern Drafting and Modelling*. London: Evans Brothers Ltd. D245
- PEEK, Emily
1914 *Practical Instruction in. Cutting Out and Making Up Hospital Garments for Sick and Wounded (Adopted by the Red Cross Society)*. London: John Bale, Sons & Danielsson, Ltd. e221
- PEGLER, Winifred (ed.)
1955 *Vogue Dressmaking Book*. London: The Condé Nast Publications Ltd. D231
- PEPIN, Harriet
1948 *Fundamentals of Apparel Design*. New York: Funk & Wagnalls Co. e152
- PEYRY, Jean B.
1901 *Livre d'instructions—Un système pour la coupe de vêtements pour Dames, Hommes et Enfants*. Montreal: Prof. Jean B. Peyry. e16

- 1904 *Livre d'instructions Complet et Général—pour se servir du conformateur et système métrique du prof. Jean B. Peyry pour couper les habillements pour Dames, Hommes et Enfants.* Montreal: Prof. Jean B. Peyry. e44
- PICKEN, Mary Brooks
1952 *Sewing Magic.* New York: McGraw-Hill Book Co. D222
- PINN, Miss L.
1928 *A Scholars' Needlework Pattern Book. Adapted for Young Children from Miss K. A. Voller's Practical Processes for Pattern Making.* Exeter: A. Wheaton & Co. Ltd. D113
- PLACE, Catherine A.
1953 *Dressmaking and Needlework.* London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. D250
- POOLE, B. W.
1927 *The Science of Pattern Construction for Garment Makers.* London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. D118
- POYNTON, Mrs.
1905 *Hints on Dress-Cutting.* London: John Heywood Ltd. e42
- RALSTON, Margaret C.
1932 *Dress Cutting.* London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. e66
- RATCLIFFE, A. and N. RATCLIFFE
1903 *A Student's Guide to Dress-Cutting.* Farnworth: Tillotson & Son Ltd. e24
- RATHBONE, Lucy and Elizabeth TARPLEY
1931 *Fabrics and Dress.* Boston: Houghton Mifflin Co. e31, e8
1939 *Fabrics and Dress.* London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. D168
- READER'S DIGEST
1981 *Complete Guide to Sewing.* London: Reader's Digest Association Ltd. f3
- REEVE, Amy J.
1901 *Practical Dress-Cutting for Technical Classes, Home Workers and Professionals as adopted by The London School Board.* London: Straker Brothers Ltd. e26
1912a *The Element of Dress Pattern-Making. Magyar Dress-Cutting for technical classes, home workers & professionals.* London: Longmans, Green, and Co. D56
1912b *French Pattern Modelling for professionals...* London: Longmans, Green & Co. e228
1912c *Practical Dresscutting Up-to-Date.* London: Longmans, Green & Co. e170
- RHOE, Mary Jane
1918 *The Dress You Wear and How to Make it.* New York: G. P. Putnam's Sons. D68
- RICHARD, Philip H.
1937 *Dress Creation.* London: Richard Arling Ltd. D191
- RILEY, Josephine
1913 *Notes of Lessons on Pattern Drafting.* London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. e46
- RINGO, Fredonia Jane
1925 *Coats.* Chicago: A. W. Shaw Co. D158
- RITTNER, Geo. H.
1904 *Impressions of Japan.* London: John Murray.
- ROBINSON, Renée
1977 *Fashion Sewing.* London: Studio Vista. f5
- ROBINSON, Renée & Julian ROBINSON
1962 *Odhams Fashion and Dressmaking.* London: Odhams Press Ltd. e277
- RODWELL, Wilfred
1956 *Cutting and Designing Juvenile Outerwear—A Standard Textbook.* London: The New Era Publishing Co. Ltd. e265

ROPER, Ruth V.

- 1935 *The Townswoman's First Book of Pattern Design for the Craftswoman who "cannot draw"*. London: National Union of Townswomen's Guilds. D167

RYAN, Mildred Graves

- 1944 *Junior Fashions*. New York: D. Appleton-Century Co. Inc. e7

SAFF-MAN, M. S.

- 1912 *The Modern Sartorial System of Garment Cutting*. Manchester: John Heywood Ltd. D55

SCHWEBKE, Phyllis, W.

- 1960 *How to Tailor: A Handbook for Home Tailoring*. Milwaukee: The Bruce Publishing Co. e161

SEYE, I. N. P. O. H.

- 1908 *An Easy System of Blouse Cutting to any size for amateurs*. Hendric Catrine Ayrshire. e51

SHAW, Maud Inez

- 1919 *The "Meridian" method of Dresscutting*. Nelson: The "Meridian" School of Dress Cutting. e79
- 1920 *Draughting Book*. Nelson: The "Meridian" School of Dresscutting. e284
- 1921 *Draughting Book*. Nelson: The "Meridian" School of Dresscutting. 2nd ed. e284
- 1922 *Draughting Book*. Nelson: The "Meridian" School of Dresscutting. 3rd ed. e284
- 1923 *Draughting Book*. Nelson: The "Meridian" School of Dresscutting. 4th ed. e284
- 1924 *Draughting Book*. Nelson: The "Meridian" School of Dresscutting. 5th ed. e284
- 1925 *Draughting Book*. Nelson: The "Meridian" School of Dresscutting. 6th ed. e284
- 1927a *Draughting Book*. Nelson: The "Meridian" School of Dresscutting. e284
- 1927b *Meridian Method of Dresscutting and Tailoring*. Nelson: Meridian School. e282

SHORT, Isabella

- 1909 *Cutting out by the "Short" system, etc.* London: Blackie & Son Ltd. D54
- 1912 *Cutting Out by the "Short" System: for Technical Classes and Home Use—A Manual of Instructions with diagrams*. London: Blackie & Son Ltd. e171

Simple Pattern Cutting

- 1926 *Simple Pattern Cutting: Children's Garments*. D110

SINGER EDUCATIONAL DEPARTMENT

- 1961 *Singer Dressmaking Course*. New York: Singer Sewing Machine Co. e184

SKINNER, Hilda M.

- 1916 *A Girl's School Outfit*. London: Trusloue and Hanson. D70

SLADDIN, W. H.

- 1896 *"Shoulderology! Bustology!"* London: Simpkin, Marshall, Hamilton, Kent & Co. Ltd. D16

SMITH, Amy K.

- 1925 *Cutting Out and Making Up of Garments*. London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. e230

SMITH, A. Mansell & Clara E. A. COOMBS, et al.

- 1909 *The "Forward" Scheme. Teacher's Handbook to Simple Clothing for the Baby*. London: Blackie and Son Ltd. e43

SMITH, Mrs.

- 1904 *Simplified Direct Measurement System*. e49

- SMITH, Virginia Willard
 1950 *Modern Methods of Sewing and Styling or Nine Lessons in Sewing and Styling.* Rhodesia: Harvey Greenacre & Co. Ltd. D235
- STREIFF, E. L.
 1913 *Streiff's System of Garment Cutting.* Detroit: E. L. Streiff. D5
Successful Home Dressmaking
 1938 *Successful Home Dressmaking.* Birmingham?: Colman Press. D182
- SYNGE, M. B.
 1914 *Simple Garments for Infants.* London: Longmans, Green & Co. e175
- TALLENT, N.
 1964 *The Pattern Cutter.* London: N. Tallent. D193
- THOMPSON, Henrietta Mary & Lucille E. REA
 1949 *Clothing for Children.* New York: John Wiley & Sons Inc. f14
Thompson's Universal System of Garment Cutting
 1912 *Thompson's Universal System of Garment Cutting—Instruction Book.* Preston: R. Whalley. e218
- THORNTON, J. P.
 1901 *The Sectional System of Ladies' Garment Cutting.* London: The Thornton Institute. e45
- TINLING, C. M. B.
 1944 *Pattern Drafting by Paper Folding.* Cape Town: Maskew Miller Ltd. e289
- TITTERTON, Emma Elizabeth
 1935 *Dress Cutting Simplified.* Sydney. e73
- TOWERS, E. Lucy
 1968 *Techniques of dressmaking and soft tailoring.* London: University of London Press Ltd. e287
- TOWERS, E. Lucy and Helen LEWIS
 1951 *Adaptation of Paper Patterns for Needle-Subjects.* London: University of London Press Ltd. D253
 1951 *Simple Instructions for Cutting Out in Needlework and Dressmaking.* London: University of London Press Ltd. D241
 1953 *Basic Pattern Cutting Folders for Dressmaking.* London: University of London Press Ltd. D213
- TOWNEND, Mrs. F. B.
 1910 *Plain Needlework and Cutting-Out.* London: Cassell & Co. Ltd. e146
- TRAPHAGEN, Ethel
 1932 *Costume Design and Illustration.* New York: John Wiley & Sons Inc. e74
- TRILLING, Marbel B. & Florence, WILLIAMS
 1928 *Art in Home and Clothing.* Philadelphia: Lippincott Co. D87
- URJE, Annie U.
 1914 *Graded Lessons on Cutting-Out—with general hints on the teaching of needlework.* Leeds: E. J. Arnold & Son Ltd. e169
 1921 *Graded Lessons on Cutting-Out.* Leeds: A. J. Arnold & Son Ltd. e226
- VEASEY, Christine
 1954 *Pins and Needles Treasure Book of Family Dressmaking: A Collection of Carefully Chosen Styles to Flatter Every Age and Figure and Win You Compliments.* London: Pins & Needles Magazine (?). D251
- VOGUE PATTERN SERVICE
 1952 *Vogue's New Book for Better Sewing.* New York: Simon and Schuster. D214
Vogue's Book
 1929 *Vogue's Book of Practical Dressmaking.* New York: Vogue. D108
 1936 *Vogue's Book of Smart Dressmaking.* London:? D197

Vogue Sewing Book

1959 *Vogue Sewing Book*. London: The Condé Nast Publication Ltd. e263

WALKER, Agnes

1907 *How to Make Up Garments*. London: Blackie & Son Ltd. e150

1914 *Manual of Needlework and Cutting Out*. London: Blackie and Son Ltd. e179

WALLBANK, Emily and Marian WALLBANK

1919 *Children's Garments*. London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. D67

1929 *Pattern Making for Dressmaking and Needlework*. London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. D105

1937 *Garments for Children and Girls*. London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd. D204

WARDEN, Jessie A. & Martha A. GOLDING

1969 *Principles for Creating Clothings*. New York: John Wiley & Sons Inc. e238

WEGELIN, Maimi

1956 *The Pattern-Cutting Book*. Cape Town: The Citadel Press. e198

WELDON & Co.

1932 *Stitch by Stitch, Complete Dressmaking and Tailoring Guide for Homedressmaker*. London: Weldon & Co. e67

1935 *Weldon's Easier Dressmaking: A Complete Guide to Cutting Out-Fitting-Tailoring-Altering*. London: Weldon & Co. e59

The West-End System

1924 *The West-End System: A Scientific and Practical Method of Cutting all Kinds of Garments. Part II—Ladies' Garments*. London: Robert Planck. D65

WILKINS, Mrs. J. E.

1899 *The Cutting Out of Garments by Paper Folding and Proportion*. London: Charles & Dible. e43

WINGO, Caroline E.

1953 *The Clothes You Buy and Make*. New York: McGraw-Hill Book Co. Inc. D254

THE WOMAN'S INSTITUTE OF DOMESTIC ARTS AND SCIENCES

1935 *Underwear and Lingerie—Underwear and Lingerie, Part 1 & 2*. Scranton: International Educational Publishing Company. e6

WOODGATE, K. D.

1944 *A Guide for "Every Woman" to Dressmaking and Cutting Out*. New Zealand: Whitcombe & Tombs Ltd. e3

WOOLMAN, Mary Schenck

1920 *Clothing: Choice, Care, Cost, etc.* Philadelphia: J. B. Lippincott Co. D85

WRAY, Elizabeth

1953 *Dress Design*. London: The Studio Publication. D230

YOUNG, Florence E.

1938 *Clothing the Child*. New York: McGraw-Hill Book Co. Ltd. D162

第5章

BALDT, Laura I.

1916 *Clothing for Women-Selection, Design, Construction. A Practical Manual for School and Home*. Philadelphia: J. B. Lippincott Co. D76

CARTER, Lilian

1911 *Plastic Millinery and Miniature Dressmaking*. London: Cassell and Co. Ltd. e87

被服文化協会研究部

1949 「日本人の姿態と外人のまなこ」『被服文化』 1: 20-23。

DAVIDSON, Augusta M. Campbell

1907 *Present-day Japan*. London: T. Fisher Unwin.

HILLHOUSE, Marion S.

1963 *Dress Selection and Design*. New York: The Macmillan Co. D93

INNES, Isabella

1913 *Scientific Dressmaking and Millinery*. Toronto: I. Innes. e212

MORTON, Grace Margaret

1964 *The Art of Costume and Personal Appearance*. New York: John Wiley & Sons Inc.
D97

NORMAN, Henry

1908 *The Real Japan; studies of contemporary Japanese manners, morals, administration and politics*. London: T. Fisher Unwin.

PICKEN, Mary Brooks

1957 *The Fashion Dictionary*. New York: Funk & Wagnalls Co.

PUYO, C.

1902? *Costume d'Allier*. Z254

WALKER, Agnes

1914 *Manual of Needlework and Cutting Out*.